
電腦ロスト・ワールド

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳ロスト・ワールド

【Nコード】

N4824P

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

仮想現実が普及した未来。客家二郎は、仮想現実構築プログラム「パンドラ」を開発する。そのプログラムで、自分だけの仮想現実世界を造りだすのだが、なんと、プログラムに「バグ」があったのだ！彼の創造した仮想現実は、訪問者を呑み込む「ロスト・ワールド」となってしまった……。二郎は、自分の責任として、何とかロスト・ワールドを正常なものにしようと、苦闘するのだったが……。

創造主

灰色の闇。妙な言い方だが、それしか表現の方法がない。

その空間には、ただ単調に、灰色の闇が広がっていた。黒とも、白とも言えず、かといって、単なるグレーとも言えない。色の諧調でどの辺りに位置するのも、表現しようがない。

上も下もない空間に、一人の男が立っていた。

その男の肌は、塗りつぶしたような漆黒。艶のない、真つ黒な色合いは、いわゆる黒人とも違い、多分に人工的で、吸い込まれそうな漆黒であった。逆に、頭髮は雪のように真白い。

年齢は十代後半から三十代初めまで、どの年齢とも言えるだろう。漆黒の奇妙な肌色のせいで、年齢の見当がつきにくい。

男は大きく息を吸い込み、何か身内から高まって来るものを堪えているようであった。

さつと男の右手が高々と上げられた。男の唇が開き、声を発した。

「光あれ！」

その瞬間、べったりとした灰色の空間に、眩しい光が強烈に迸った。男は目映い光輝に怯むことなく、目を細めることもしなかった。高々と上げたままの右手を、さつと横に薙ぐ。

「大地！」

言葉が終わると、今まで何もなかった空間に広々とした大地が広がる。目の届く限り、平坦な地面を目にし、男の顔にようやく微笑が浮かんだ。男の両足は、大地にしっかりと支えられ、今や、上下の違いが顕わになった。

「空！」

青空が現れる。セルリアン・ブルーの真っ青な青空の中天に、太陽が燦々と暖かな光を投げかけている。

「雲！」

青空に忽ち、白い雲が浮かんだ。それを見上げ、男の顔にちよつと苦笑が浮かぶ。

「ちよつとばかり月並みな雲だな……。これは、急いで修正しないと……」

男の言葉どおり、青空に浮かぶ白い雲は、どこかの観光ポスターにありそうな、ぽつかりとした楕円形をしている。男の両手が複雑な舞を踊る。その手の動きに応じ、大地に緑が芽吹き、何もなかった地平線に山脈が浮かび上がる。森が、大河が出現し、風が吹き渡って、男の真っ白な頭髪を波打たせる。

男は一步、足を踏み出した。途端にその表情が顰められる。ほんの軽く一步を踏み出したただけなのに、男はぴょんと十数メートルも空中に浮き上がったのである。

「重力修正！ 軽すぎる！」

どうやら、物理的特性の設定の桁を、間違ってしまったようだ。

男は左手の手の平を上にして、待ち受けた。ずっと空中に白いボールが出現する。

男はボールを受け止めると、ひょいと空中に放る。ボールは当たり前の放物線を描き、落下し、地面でとんとんと何度か跳ねて、止まった。

それを見て、男は一人うんうんと頷く。満足すべき結果だったようだ。

「さてと……どう仕上げるべきか？」

叫び

しばし思案して、にやりと笑う。

さつと手を振ると、空中に巨大な岩が浮かんだ。何の支えもなく、確固たる存在感を発している。さらに、岩の上面には、ヨーロッパ風の城が建てられている。男の目指したのは、ルネ・マグリットの絵画の再現であった。エッシャー、キリコ、サルバドール・ダリなどの超現実派の絵画が、次々と立体になって出現する。

が、男の創造は遊びであつたようだ。ごちゃごちゃとそれらの創造物が混乱した風景を作り出すと、男はそれらをただ一振りの手の動きで、あっさり消去する。肩を竦め、やり直す。

男の瞳に、熱中が浮かぶ。世界は奇妙な様相を表し始めた。

それまで当たり前に存在した自然が、金属的な鋭角な線を作り出した。緑滴る森の代わりに、きらきらとした結晶のような固まりが突き出し、大地から斜めに金属の丘が盛り上がる。青空は血のような真紅に変化し、どろりとした緑色の雲が流れた。

ほつと男は息を吐き出した。両肩から力が抜け、悠然と自分が作り出した世界を眺め渡す。まるで悪夢が現出したような光景に、男はにやにや笑いを浮かべている。

まだ、何か足りない……。

男の手が動き、生命が現れた。この世界に相応しい、奇妙な生き物である。

ごろごろと転がる岩の塊が、その一つだ。

群衆で動くのか、いくつもの大小無数の岩が、何かの意思に操ら

れているように、坂を重力を無視して駆け上がり、跳ね上がる。

逆に、粘液のような生物も存在した。鋭角の金属の丘にへばりつき、刃物のような鋭い稜線に、ぷちぷちと途切れる。だが、また、ぐねぐねと集まり、元の形を取り戻す。

空には、十字型のプロペラのような飛行物体が、目まぐるしく旋回して浮かんでいる。これは、この世界の鳥のようだ。

男の瞳に狂的な光が湛えられる。

「どうだ！ こんな世界は、ここだけだろう……。おれだけの世界……！」

満足したのか、男は唐突に顔を上げる。目を閉じ、何かを待ち受ける。

と、男の顔に狼狽が浮かぶ。

きよときよとと、何度も辺りを見回す。

「まさか……」

驚愕の表情が浮かぶ。

もう一度、呟いた。

「まさか……そんなことって！」

がっしりと両腕で胸を抱きしめた。がたがたと身体が震えていた。
「嘘だ　！」

叫びは、世界全体に響いていた。

強制切断

「！」と、声にならない叫びをあげ、客家はつかじょう二郎はそれまで身体を横たえていた仮想現実接続装置から跳ね起きた。

二郎は、ヘルメットを耑り取るように脱ぎ捨てると、自分の身体を見下ろした。

痩せこけた骨と皮のような身体つき。髪の毛はぼさばさで、ふと上げた手の平に触れた顎には、無精髭が濃く浮いている。身に着けているのは、上半身にランニングと、パンツのみ。

木目の浮いたフローリングの床には、先ほど脱ぎ捨てたヘルメットが転がっている。ヘルメットの外側は、つるりと何もない。だが、内側には、びっしりと無数の極板が並んでいる。

ぷん、と異臭が漂う。二郎は眉を顰めた。失禁している。

さつと壁の時計を見上げた。時刻と、日時が表示されているタイプで、最後に見たときより三日が経過している。

三日！

二郎はよろよろと立ち上がった。下半身に便意が溜まっていた。かくん、と膝から力が抜ける。全身が怖ろしく疲労困憊していた。

「まさか……そんなことって……！」

呆然と呟く。怖ろしい想像が二郎の胸に湧き上がり、その顔に脂汗が浮かんでいた。

やっこの思いで歩き出す。目指すは、トイレだ。便器に座り込む

と、どどーつと盛大に排出した。ざーつ、という水流の音を背中に、もう一度よろよろ仮想現実接続装置に向かう。

震える指先でヘルメットを取り上げ、頭に被る。そのまま装置の寝椅子カウチに身体を横たえ、じっと待つ。

が、何分と経過しても、変化は全然なかった。装置の表示装置に、警告マークが点滅している。それを見て、二郎は腹立たしくヘルメットを再び脱ぎ捨てた。

判っていたことだ。強制切断が起きた後は、最低二十四時間は再接続は不可能である。

現実

ぐうつうつ　と、腹が空腹を訴えている。二郎は強いて無視していた。が、諦め、起き上がると、食卓へ向かう。

冷蔵庫を漁り、簡単な食事を済ませる。それでも空腹には勝てず、がつがつと獣のように食物を摂取し、飲み込む。食物は、短時間で摂れるよう流動食が大部分で、ただ飲み込めばいいだけのものだ。カロリー、ビタミン、無機物がバランスよく配合されているが、味は最低で、俗に言う？犬も食わぬ？ほど酷い。

浴室に入り、シャワーだけで入浴を済ませると、着替える。髭を剃り、歯を磨く。

メンテナンスの時間である。なにしろ三日間、ずーっと自分は、仮想現実接続装置に繋がっていたのだ……ろう。

その三日間を、何も憶えていない。何一つ！

最初にヘルメットを被り、目を閉じた瞬間から、目覚めた瞬間がストリートに繋がっている。一瞬の遅滞もない。目を閉じ、目を開けたそのとき、今のような醜態に陥っていたのだ。

仮想現実装置は、二郎の部屋の中でただ一つ、どつしりとした外観を持って存在を主張している。

革張りのマッサージ・チェアに良く似た外見の寝椅子　実際、その機能も組み込まれている　と、装置の本体。本体はすっきりとしたデザインで、真珠色の仄かな輝きを放っている。

二郎は立ち上がり、窓に向かった。窓にはブラインドが下ろされている。二郎は苛立たしく、ブラインドを撥ね上げた。

さつと夕日が部屋に差し込む。二郎は眩しさに目を細めた。

窓の外から都会の風景が広がっている。薄汚れ、美的とはとても言えない無骨なビルが乱雑に並んでいる。

人気は、ほとんどない。しんとした静寂が辺りを支配しているのみ。その窓の一つ一つに、二郎と同じような仮想現実装置に接続されたプレイヤーが、各々の夢を追っているのだろつ。

いや……。

「阿呆、阿呆、阿呆……」と、物寂しい鴉^{からす}の鳴き声が上空を渡っている。鴉だけが、この現実世界で生を謳歌しているような錯覚を、二郎は感じていた。

後悔

寝椅子に近づくと、どすんと腰を落とした。がっくりと頂垂れ、頭を抱える。

怖れていたことが現実起きてしまった。

自分は？ロスト？したのだ！

二郎の分身は、^{ベルソナ}仮想現実^{に置き去りにされ、立ち往生している。}
もう、取り返しはつかない。

なぜこんな事態に？

原因は、はつきりしている。自分が作り出したプログラムに？バグ？があつたのだ！

二郎のプログラム、それは仮想現実構築支援ソフト【パンドラ】である。誰でも仮想現実世界を簡単に構築できるソフトウェアで、二郎は完成直後に、まず自分の仮想現実を作り出そうと試みたのだ。

仮想現実装置が普及して数年が経つが、肝心の仮想現実の中身といえは、大企業による寡占により、毒にも薬にもならない面白みのない世界ばかりだった。何しろ仮想現実世界を構築するには、専門のプログラマーが大量に必要で、個人では不可能とされていたのだ。それに二郎は不満を感じ、現状を何とかしたくて、独力で、個人で仮想現実を構築できるソフトウェア【パンドラ】を開発したのだ。

ぎゅっと二郎は拳を握りしめた。

なんとしても【パンドラ】のバグは大至急、修正しなくてはならぬ！ 二郎には、すでにバグの原因である仮説があった。

しかし【パンドラ】が最初に作り出した？世界？には、そのバグが残されたままだ。オリジナルのプログラムのバグは修正できるであらうが、失敗作である最初の？世界？のバグは、どうにも修正不可能だ。

もし、修正しに再度仮想現実に接続しても、また帰還できなくなつて、同じことの繰り返しになる可能性が確実に大きい。

身を絞られるような後悔に、二郎は深々と頭を垂れていた。

ロスト

二十四時間が経過した。

睡眠を摂り、たっぷり休養を取った二郎は、元氣を取り戻し、再び仮想現実装置に接続をした。ヘルメットを被り、目を閉じると、即座に仮想空間に立っている。

周りを見渡すと、真っ白な、何もない空間に、ゆったりとしたソファが置いてある。二郎はソファに腰掛け、口を開いた。

「ティンカー（修繕屋）……いるか？」

二郎の声に反応し、一瞬にして金属の球体が空中に浮かんだ。大きさはテニス・ボールほどである。

滑らかな真鍮の球体には、目も鼻もなく、つるりとした表面に見える二郎の顔が歪んで映し出されている。

「二郎さま！ お呼びですか？」

ティンカーと呼びかけられた金属の球体から、きんきんと甲高い声が聞こえてくる。と、ぐっと球体が扁平になり、一本の腕のような触手が持ち上がり、困惑しているように自分の身体をこりこりと搔いている。その様は、まるで自分の頭を搔いているかのようだ。

「二郎さま？」

二郎は、にやっと笑いかけた。

「おれの姿がいつもと違うので、戸惑ったんだろうな。安心しろ、

おれだ」

納得したのか、ティンカーは元の金属の球体に戻る。腰掛けている二郎の周りを、ぶんぶんと音を立て飛び回る。今の二郎は、実際の自分と同じ姿で、仮想空間にいた。

「？シャドウ？ではないんですね……」

ティンカーの言葉に、二郎は苦い思いを堪えた。

黒い肌に、白い雪のような髪をした姿に二郎は？シャドウ？と名付けていた。あの分身は二郎の自信作だったのに、もう取り戻せない。

分身は、同じものは二つとない。というより、作成することは不可能なのだ。

「ああ、あの分身は、^{ベルソナ}ロストしたんだ」

「ロスト！」

ティンカーは甲高い声で叫ぶ。動揺しているのか、ぶるぶると表面が波打った。

「それって、つまり……？」

プログラム

二郎は頷く。

「そうだ。？世界？を造ることに失敗した。【パンドラ】に致命的なバグがあつたらしい。ティンカー、【パンドラ】のプログラムを……」

二郎の命令でティンカーは空中にさつと飛び上がった。

球体はぱくんと二つに割れ、その中から【パンドラ】のプログラムが展開された。二郎の目の前に【パンドラ】の全プログラムが表示される。

二郎は自分の作品ともいえる、【パンドラ】のプログラム・ファイルを眺めた。

といっても、ずらずらと並ぶプログラム言語の行を想像しては的外れだ。一番近い例えは、色とりどりのブロックで組みあがった都市計画の立体模型といったところか。

一行一行、キーボードから命令を打ち込むプログラム方式は、すでに廃れている。現在では、様々な命令ブロックを組み合わせ、仮想現実空間で3D的に構築する方法が一般的に採用されている。

そもそも、プログラムの規模が巨大すぎ、一行ずつ確認しながらプログラムするなど、不可能なのだ。

もし【パンドラ】の全プログラムを機械語にコンパイルして表示したら、一生どころか、何百年も掛けても総て読みきれぬものではない。

ソファから立ち上がり、二郎は目の前の【パンドラ】のプログラムに近寄った。

すっと指をプログラムの一箇所近づける。

二郎の動きに反応して、プログラムの一部がぐーっと拡大され、細部が表示される。みっしりと組みあがった、複雑極まりない構造が広がった。

「ここだ！ この箇所がバグの原因だ！」

二郎の指摘に反応して、プログラムの一部分が赤く点滅している。きつちりと組み上がった構造の中で、その部分だけは僅かな不整合を見せていた。

ティンカーも納得して、何度も頷くかのように、空中で跳ね回る。

「ああ、判りました！ この命令ブロックは、他の命令ブロックとうまく噛み合わない特性を持っていたんですね。それで、バグが…」

…」

二郎は鋭く押し殺した声を上げる。

「修正できるか？」

予想

ティンカーはすつ、とプログラムの中へ飛び込んでいく。組み上がったブロックを押したり、引いたりして、ちよつとずつ動かしていく。

が、どうやっても微かな隙間ができる。微妙に異なるジグソーパズルのピースを強引に押し込んだかのように。

ティンカーは何か考えているのか、球体から立方体に変化した。表面に目まぐるしく、様々な図表や記号が光の線になって現れる。やがて、もう一度球体に戻り触手を伸ばして、空中からもう一つ、小さなブロックを取り出した。問題のブロックと接合する。

「修正プログラムです！ これで、うまく行くはずですよ！」

今度は、かっちりとブロックは組み上がった。どの命令ブロックにも、隙間やはみ出しはなく、完璧な構造を見せていた。

ほつと二郎は溜息をついた。

どすん、とソファに倒れこむように座り込むと、天を仰いだ。ティンカーが心配そうにおずおずと近寄った。

「こちらのプログラムは修正できましたが、コピーのほうは？」

「ああ」と二郎は生返事をする。

「おれの分身が残された？世界？にあるのは、修正されていないオリジナルだ。あのままでは、あの？世界？は【ロスト・ワールド】になってしまふ……」

ティンカーは慰めるような声を掛けた。

「でも、不完全な？世界？なのですよ。そういった？世界？は、時間が経てば自然消滅するのでは？」

二郎は首を振る。

「いいや！ あそこには、おれの分身が残っている。つまり、今の
おれと同じ知識と経験を持つもう一人のおれだ！ もし、おれだつ
たら、黙って自分が消滅する運命を甘んじて受けると思うか？」

ティンカーの表面に大きく「？」の記号が浮かんだ。

「何が起きると思います？」

二郎はぼんやりと何もない空間を見上げていた。ティンカーの滑らかな表面に、自分の放心したような顔が映し出されている。

「おれだつたら……？魔界？を作り出すだろうな……。のこの迷
い込んでくるプレイヤーを呑み込んで？世界？を成長させる肥やし
にするために……」

「魔界！」

ティンカーはショックを受けたのか、表面に大きく「！」のマークが浮かんでいた。

決意

二郎の分身の【シャドウ】は、すでに自分のいる世界が【ロスト・ワールド】に変貌している事実を確信していた。

もう、戻れない。自分はこの？世界？に囚われたまま、永遠に過ごす羽目になる。

今頃は本来の自分 オリジナルの客家二郎 は、仮想現実空間の構築に失敗したことを悟り、大慌てでオリジナルの【パンドラ】プログラムの修正にかかっていることだろう。

【シャドウ】は、すでに自分本来の客家二郎という名前を拒否していた。この瞬間から、自分は【シャドウ】である、と決めていた。いつか二郎は、この？世界？へやってくることだろう。プログラムの欠陥を修正して【ロスト・ワールド】を消滅させるために。

【シャドウ】はゆっくりと自分が作り出した？世界？を眺めた。

微かな風に、真っ白な髪の毛が揺れる。

毒々しい真っ赤な空に、いやらしい緑色の雲がたなびいている。

きらきらと輝く結晶の森に、硬質な金属の丘、光の筋が走る多結晶の山脈。

こんな世界で暮らすとは、とても耐えられない！ おれは人間の世界に戻りたい……。

【シャドウ】の両腕が持ち上がり、？世界？を再構築しようと複雑な舞を描く。思い描くのは、人間の世界……。

が、それが途中で止まった。首を捻る。

おれは、どこに帰りたいのだ？ あ、薄汚れた、仮想現実装置だけがぽつんと置かれたアパートの一室か？

ぱたん、と両腕が下ろされ、両脇にだらりと垂れる。

いや！ 違うぞ！ おれの戻る場所は……。

仮想現実！ 無数の人々が暮らす、もう一つの現実世界。

おれの戻る場所は、あそこしかない！

なんとか、この【ロスト・ワールド】に？^{ゲート}門？を作り出し、他の？世界？と行き来できる開門を開通させなくては。

進化

いいや、それだけでは足りない。

きゅっと、【シャドウ】の薄い唇の両端が鋭角に持ち上がり、悪魔的といったいい笑みが浮かぶ。

この【ロスト・ワールド】こそが、全世界の中心でなくてはならぬ！

仮想現実空間の支配者になる　この【シャドウ】さまが！

「くっ……くくくくく……っ！」

【シャドウ】の歪められた唇から、奇妙な笑い声が漏れ出ていた。さっと両腕を高く差し上げ、叫んだ。

「進化しろ！　お前ら、戦い、食らい合い、産み増やせ！　世界へ満ちよ！」

のたのた、ずりずりと不器用な動きを見せていた生き物が、亜【シャドウ】の叫びに電流が走ったかのごとく、ぴん、と一斉に緊張する。

オレンジ色のアメーバーのような生き物が、のんびり結晶の草を食んでいる巨大な水母に襲い掛かった。

水母は「ぎえーっ」と金切り声を上げ、身悶える。覆いかぶさったアメーバの体内で、巨大な水母はじわじわと消化されていた。

空をくるくる旋回しながら飛行するプロペラは、身体に無数の突起を生やし、他の空をゆっくりと飛行している風船のような生き物

に突っ込んだ。

ぷしゅーっ、と音を立て、風船は萎んでいく。

どすん、どすんと跳ね回っていた岩の群れが、たちまちお互いくっ付き合い、一つの巨大な生き物に変貌した。

どすどすと大きな地響きを立て、岩の獣はガラスの森へ突入する。

ばりばり、がしやがしやと盛大な音を立て、透明な結晶は粉微塵に砕け散った！

あちこちで誕生した奇妙な生き物同士、殺し合いが起きていた。

殺し合いは、生き物に急速な変化を強いた。

ラマルクの進化論　獲得形質が子孫へ遺伝する　が、ここでは実際に起きていた。

殺し合いを続けるうち、有利な形質を持ったものは特質を遺伝子に刻み込み、繁殖していく。また、他の獲得形質を捕食することにより、我が物にしてさらなる進化を成し遂げる。

百万年、いや、数億年の進化の歴史が、ここでは僅か数週間、数時間という短さで行われている。行き着く先は、誰にも想像すら困難である。

殺し合いを眺めた【シャドウ】は、狂的な高笑いを続けていた。

【大中央駅】

もし、あなたが仮想現実空間に最初に立ち寄るなら、まずは【大
・セントラル・ステーション
中央駅】を目指すべきだ。

ここは文字通り、総ての？世界？へ通じる【大中央駅】である。

仮想現実装置に接続され、意識がリンクされると最初に表れるメ
ニューに、この場所が表示される。

もし、あなたが、何の目的もなくリンクするなら、最初にここに
立ち寄り、あなたに向いた目的地を探し当てることをお勧めする。
そうでなければ、あの怖ろしい【ロスト・ワールド】に漂う羽目
に陥る。メニューからここを選択すると、次の瞬間あなたは【大中
央駅】の真ん中に立っていることを知るだろう。

【大中央駅】には、今から目当ての場所を目指す無数の旅人が行き
交っている。

目の前を中世ヨーロッパのマスケット銃を抱えた三銃士たちが通
りすぎる。
ムスクテール

あるいは、きらきらと輝く金属製のロボットを従えた宇宙人の一
団が、宇宙船に乗り込むため急いでいる。

大声で当たり憚らず、のし歩いているのは、カリブ海を荒らし回
る海賊たちだ。

あちらからは、ヨーロッパ戦線から帰還した一九四〇年代の装備
に身を固めた海兵隊^{マリーン}が、先ほどまでの戦いの結果を熱っぽく語り合
っている。

【大中央駅】は巨大である。巨大というより、果てしない広さを誇る。実際、どれほどの空間を占拠しているのか、誰にも判らない。

見上げると、アラバスター薔薇石膏でできたドームが空のようにアーチを描く。実際にも、天井近くには、薄っすらと雲が湧いている。

横方向を見渡しても、どこまでも広がって、縁は見えない。

【大中央駅】中心近くには、一体の奇妙な坐像が聳えている。

三面六臂の、怖ろしげな姿で、中央の顔はアンコール・ワットの仏像に似て、優しげな笑みを浮かべているが、左右の顔は見るからに怖ろしげな憤怒の表情を表している。六本の腕には、様々な仏具や、武器を構えている。

坐像は【裁定者】と呼ばれていた。仮想現実世界を守る、守護神である。

【裁定者】の坐像の近くの場所には、旅人の案内のための柱が立っているのが見える。その一つに近寄ってみよう。

案内柱

案内柱の表面には、四つの区分けがなされている。右から「未来」「過去」「冒険」「アダルト」とある。

何？ 「アダルト」に興味が湧いたって？

残念、その区分けは、満二十一歳以上でなければ、アクセスできない。

あなたは……はあ、十八歳！ あと三年、我慢したまえ。年齢をごまかして申告しても、ムダである。仮想現実接続装置には、最初から年齢認証機能が組み込まれているのだ。

試しに「冒険」の文字に手を触れてみたまえ。文字にずらずらと様々な項目が浮かぶ。

おや、この「ジャングル」が面白そうだ。選択すると「宝探し」という項目があった。さらに選択を続けると、様々な？世界？の名称が現れ、一つ一つの特徴の説明文を読み取れるだろう。

どうやら色々な世界では、プレイヤーに「宝探し」のサービスを提供しているようである。面白そうだ！

これを選ぶと、あなたの足下に一本の光の線が浮かび上がるのが認められる。この線を辿っていくと、目的の？^{ゲート}門？に行き着く。

距離が心配だって？ 大丈夫、ここは仮想現実世界だ。

ほら、たった二、三步で、早くも？門？の正面に、あなたは立っている。

石造りで、表面にはマヤかインカらしき、細かなレリーフが施されている。どうやらこの？世界？は、古代中南米の世界を再現したものらしい。

電腦盜賊

と、突如そこで？門？が開くと、中から見慣れない若い男が飛び出してくる。

柔らかな革のベストに、ぴっちりとしたパンツを穿き、足下は膝まで達する黒革のブーツで固めている。ブーツや、腰のベルトには何本も切れ味の鋭そうな短剣を装備し、胸からは様々な形の鍵がちらちらと音を立てている。

男は小粋な帽子を被り、帽子の縁には【盗賊ギルド】の紋章が飾られている。どうやらこの男は、電腦盜賊の一人らしい。帽子の下、面長の顔は、どこことなく狼を思わせる。やや前屈みの姿勢で、油断無さそうな目の光が、こちらを窺っている。

男は、あなたに気付き、にやりと皮肉な笑みを浮かべるだろう。じろじろと不躰に、あなたの全身を観察し、口を開く。

「初心者かね？　ちょうど良い。この先の？世界？は、プレ・インカのティティオ・ワカンの月の大ピラミッドがある。お望みなら、おれが案内してもいいぜ。どうする？」

あまりに早口に捲し立てられ、あなたは戸惑っているようだ。あなたの戸惑いを見て取り、男は肩を竦めた。

あなたは、くると背を向け、もう一度、案内柱に向かう。もう少し、穏やかな、安心できそうな？世界？を探すつもりか？

それがいい。

ここは仮想現実。初心者にも、ベテランにも、どんな相手にも満
足できる、あらゆる？世界？が広がっているのだ。

客家二郎

見るからに初心者らしいプレイヤーは、すらりとした上背のある、髪のを背中に垂らした少女であった。

年齢は十五、六歳くらいに見えた。

とはいえ、大抵のプレイヤーは分身ベルソナを実際の年齢よりも低めに設定するから、多分、十七、八歳といったところか。

中には六十を過ぎて、二十歳前後に設定する図々しい輩もいる。だが、それだと身動きに実際の年齢が出てしまい、ふとした瞬間に、ぎくしゃくとした、見つともない動作になる。だから大体、実際の年齢前後に設定するものである。

再び案内柱に向かうと思われたプレイヤーは、ふと立ち止まってくるりと振り返り、向き直ると、悪戯っぽい表情を浮かべる。

おや？ と、客家二郎は伸び上がって、プレイヤーを見つめ返した。

つかつかと少女は二郎に近づいてくると、切り込むような口調で質問する。

「どうして、あたしが初心者だって、判ったの？ そんなに覚束なく見える？」

含み笑いを浮かべ、二郎は答えた。

「ああ、見えるね。一目見て、君は初心者だと判ったよ」

「まあ」と、少女は口を丸く開いた。目が大きく見開かれ、驚きにまん丸になっている。

「そんなにすぐ判るものなの？」

「うん」と二郎は頷いた。

す、と指を挙げ、反対方向からやってくる二組のプレイヤーを指示す。

法則

「見ていてご覧」

少女は二郎の指し示した方向を見つめた。

一方はファンタジー世界からやって来たと思しき、エルフの姿で、もう一方は日本の戦国時代からのプレイヤーらしい。

二組のプレイヤーは、真っ直ぐ前を見詰め、わき目も振らず大股で歩いてくる。当然、二組はそのまま歩けばぶつかる軌道をとっている。

二組が近づき、接触した！

が、二組は何事もなかったかのように、するりとお互いの身体を突き抜け、さつさと立ち去ってしまった。まるで空気を突き抜けるかのようなだった。

二郎は肩を竦めた。

「ほら、あの二組、まったくお互いを避けようとしなかったろう？ この【大中央駅】では、物理計算を一部しか行っていない。なにしろ現実世界から常時、数十億の人々がアクセスしているからね。いちいち身体がぶつかる処理をしていたら、たちまち大混乱だ。

だからここでは、他人を避ける必要はないのさ。君はここまで歩いてくるとき、無意識に他人の身体に触れないようしていたね。だから一目で初心者だって判ったのさ」

少女は、考え深げな表情を浮かべる。

「それであたしを……。ふうん、成る程。で、どうして声を掛けた

の。さつき、案内してやるって言ってたわね。何が目的？」

ぐつと両足を踏ん張り、腕組みをする。

二郎は大きく両腕を広げた。

「まず第一に、この仮想現実には、いろいろな罠があるからさ！おれは、そういつた罠に初心者が陥らないよう、注意してやつている。それが、おれたち、長く仮想現実で過ごしている先輩としての義務だからだ。」

それと、君がおれの指導でこの仮想現実には習熟すれば、いずれおれを助けてくれる片腕になってくれるんじゃないか、と期待していることだ」

「他にもいるの？」

「多くはないがね。ものになるのは、千人に一人、いや一万人に一人かもしれない。しかし、おれは諦めるわけにはいかない。目的があるからだ」

少女の目が細められる。

「目的って？」

二郎は真面目な口調になった。

「【ロスト・ワールド】って聞いたこと、ないかね？ おれは、【ロスト・ワールド】に、一緒に探検に出掛ける仲間を探している」

タバサ

唐突に、その場の空気の温度が下がったかのようだった。【ロスト・ワールド】という名称には、それだけ危険な印象がこびりついている。

少女は、ゆっくりと頷いた。

「知っている……。この仮想現実にはリンクするとき、説明書にあつたわ。決して【ロスト・ワールド】に立ち寄ってはいけない、って注意されていたわ。もしうっかり、迷い込んだら？ロスト？が起きて、あたしの分身が仮想現実に取り残されてしまうって」

「その【ロスト・ワールド】を作り出した張本人が、おれなんだ。おれは、なんとしてでも【ロスト・ワールド】を正常な状態に戻さねばならない。だが、一人では無理だ。だから仲間を探している」

二郎の言葉に少女はびっくりと顔を上げた。
「あなたが？ あなた、いったい誰なの？」

二郎は名乗りを上げた。

「おれは、客家二郎。【パンドラ】の開発者だ。仮想現実のプレイヤーなら、一度くらいは、おれの名前を聞いたことあるだろう」

少女は、がらりと態度を変えた。今までの用心深さをかなぐり捨て、興味津々といった表情になる。

「本当？ あなたがそうなの？ まさか、信じられないわ」

「信じられなくてもいい。ともかく、おれの案内が要るかね？ お

れは、この仮想現実が産声を上げた頃から多数の？世界？を渡り歩いている。おれが指導すれば、君は短期間で独り立ちできるようになるだろう」

少女はしばし、考えていた。

やがて少女の表情に、最初に見た悪戯っぽい笑いが浮かぶ。
右手を差し出し、口を開いた。

「いいわ！ あたしは、タバサ。あんたの言うとおり、初心者だけど、この仮想現実であんたを先輩として付き合っわ！」

「おれは、客家二郎。二郎、と呼んでくれ」

二人は握手を交わした。

ティンカー

ぶるぶるっ、と二郎の上着のポケットが震える。タバサと名乗った少女は、一歩びくっとな飛びのいた。

「な、何なの？」

「こいつだ……」

二郎はポケットの上蓋を開いた。中から、テニス・ボールほどの大きさの、真鍮製の金属球がぴょん、と飛び出した。

金属球は、ふわりと浮かぶと、表面に細かな漣を立て、きんきんとした声を上げる。

「二郎さま！ 【ロスト・ワールド】に動きがあります！」

「なにっ！」

二郎は思わず鋭い声を上げていた。ぐっと金属球に顔を近づけ、囁いた。

「どういうことだ？ 動きとは、何だ？」

「【ロスト・ワールド】の一部が他の？世界？に接触を試みているようです。もしかすると？門？が造られるかも知れません」

「本当かつ！」

二郎は大声を上げた。その声に、周りのプレイヤーが、ぎくりと立ち止まる。慌てて二郎は背中を向けた。

「どこだ、接触が始まるのは、どの？世界？なんだっ！」

金属球は興奮したかのようにぷにぷにと変形しながら上下に跳ねた。

「【蒸汽帝国】です！ あらゆる？世界？で最大、最古のあの【蒸汽帝国】です！ 二郎さま、これは、ビッグ・チャンスですよ！ もし接触が起きれば、次郎さまの念願である【ロスト・ワールド】攻略のチャンスでしょう？」

何度も二郎は頷く。

「そうだ……これはチャンスだ。二度とない、チャンスかもしれん……」

道連れ

そのとき、ようやく二郎は背後のタバサに注意を戻した。タバサは呆然とした表情で、見守っている。

「済まん……。つい、夢中になってしまった。さっきも言ったように、おれは【ロスト・ワールド】を探検するチャンスを探していた。こいつは　ティンカー（修繕屋）といって、おれの相棒だ。ティンカー。この女の子は、タバサだ」

ティンカーはつい、とタバサに近寄る。

「よろしく、タバサさん！」

「よ、よろしく……」

ちよつと仰け反ったような姿勢になって、タバサは答える。すつ、とティンカーは二郎の側に戻る。

「二郎さま。この人、初心者ですね？」

「まあ……」とタバサは、はつきりと気分を害した表情になる。

「まったく……、あたしを馬鹿にして！　二郎っ！」
呼び捨てにする。

「あんた、今からあたしを放っぱり出して、その【蒸汽帝国】とやらに出かけるつもりなの？　ええ？　あたしを指導するつてのは、どうなったのよっ！」

二郎はほりほりと指先で鼻を掻いた。

「ああ……。そうだったな……。つまり、こんな次第で……要する

に……」

ぐつとタバサは詰め寄った。

「あんた、あたしを連れて行きなさい！」

「えっ？」

二郎の口が、ぽかんと開く。

タバサは畳み込む。

「あたしも連れてって！ あんた、道連れを探しているんでしょ？
ちようど良いじゃない。【ロスト・ワールド】に、あたしを連れ
て行きなさい！ それが、あんたの義務よ。あたしに声を掛けた、
あんたのね！」

二郎とティンカーは顔を見合わせた。ティンカーはくにゅつ、と
身体を变形させ「？」の形になった。タバサは笑顔になった。

「【蒸汽帝国】って、面白そうな？世界？じゃない？」

ハビタット

【蒸汽帝国】の？門^{ゲート}？は、厳しい大金庫の扉のようなデザインであった。

どっしりとした鉄の板に、無数のボルトが埋め込まれ、巨大な鉄輪の取っ手がついている。

タバサは、思わず、といった感じで尻込みする。それを見て、二郎は軽く笑った。

「どうした？　ここが【蒸汽帝国】の？門？だぞ。心配するな、中に入っても、閉じ込められる心配はない」

「な、何もそんなこと、心配してないわよ。ただ、ちょっと驚いただけだわ」

二郎に内心をずばり言い当てられ、悔しいのだろう。タバサの顔は、真っ赤になっていた。

二郎は一步、すつと？門？に近づき、無造作に鉄輪を握る。ぐいと捻ると、呆気なく鉄輪はぐるりと回転し、音もなく扉は開いていく。

内部に踏み込むと、そこは十九世紀末の、鉄道の駅舎風になっていた。

かっちりとした帽子を被った駅員が一人、立っている。年齢四十年代半ばと思われる、中年の男性である。

目尻に柔らかな笑い皺が刻まれ、駅員は愛想のいい笑顔を二人に向けた。

「ようこそ！　ここからが【蒸汽帝国】になっております！　切符をお買い求め下さいますか？」

「切符？」

タバサは不審そうに二郎に尋ねる。二郎は頷いた。

「【蒸汽帝国】の首都に行くには、鉄道を利用しなくてはならないんだ」

二郎は駅員に向かい指を二本立てて見せた。二人分、という意味表示である。駅員は上機嫌に頷いて見せた。

「百二十？ハビタット？になります」

二郎は無言で頷く。駅員は二枚の切符を渡した。

通貨単位

さつさと通過する二郎に小走りに近づき、タバサは話し掛けた。
「さつきの百二十？ハビタット？って、何のこと？」

二郎はちよつと呆れてタバサを見た。二郎の顔色を見て、またタバサの顔が赤くなる。

「な、何よ！ 知らないから質問したんじゃないの！」

仕方なく、二郎は説明した。

「？ハビタット？というのは、仮想現実での通貨だよ。お金だ。仮想現実接続装置の説明書にあったはずだが、読んでいないのか？」

タバサの視線がぐるりと円を描く。唇を軽く噛み、首を捻った。

「さあ……」

「しょうがないな」と二郎は呟き、歩きながら説明を加えた。

「？ハビタット？とは、縄張り、とか棲息範囲とか訳されている。つまり人間で言えば、個人の生活範囲だ。

仮想現実装置を所有すると、同時に一定の個人が自由に使用できる空間が与えられる。それを使って？世界？を構築してもいいし、今のうちに他の？世界？を利用して自分の空間から一定の範囲を譲り渡すこともできる。

こうして？世界？はプレイヤーにサービスを提供して、その見返

りに？世界？を成長させるんだ。

だから【蒸汽帝国】のように多数のプレイヤーを引き付ける？世界？は、どんどん拡大する。

反対に、誰も立ち寄らない？世界？は自分の？ハビタット？を消費するだけだから、縮小して、遂には消滅する」

ホーム

タバサは驚きの表情を浮かべた。

「それで今、あなたが支払った？ハビタット？は、どれくらいの価値があるの？ あたし、返さなきゃ駄目かしら？」

二郎は天を仰いで高らかに笑い声を上げた。

タバサは恨めしげな目つきになって、顔を赤らめた。

「大丈夫！ 一人に与えられる？ハビタット？は、一生ずーっと使っても、とうてい使い切れないほどだよ。それに、おれは、電腦盜賊ギルドに入っているから、気が向いたら盜賊稼業に戻って稼ぐこともできるしな」

二人の足が止まった。鉄骨で組みあがった大きな丸屋根の下に、長いホームが延びている。ホームには鐵路が真っ直ぐ、陽光の中に溶け込んでいた。鐵路の先には広々とした田園地帯が広がっているのが見える。

ホームには先客が何人か、待っていた。

皆、十九世紀末の服装で、二郎とタバサの二人は、その中でひどく場違いであった。気まずい表情のタバサに気づき、二郎は頷いて見せた。

「汽車の中に入れば、【蒸汽帝国】のドレス・コードに合った衣裝が支給される。それも料金に含まれているんだ」

衣装

がしゅがしゅがしゅ……と逞しい蒸気機関の音とともに、機関車が入ってきた。

緑色のペンキも鮮やかな、英国鉄道の蒸気機関車である。機関士は窓から首を突き出して、慎重に機関車を停止させた。

ベルを持った駅員が「からん、からん」とベルを鳴らしながら「？シテイ？行き！ 発車五分前！」と叫びながら歩いている。乗客は、ぞろぞろと乗車し始めた。

二郎に促され、タバサは客車のステップに足を掛けた。

「きゃっ！」と、その途端タバサは軽く悲鳴を上げる。

ステップに足を掛け、車内に入り込んだ瞬間、衣装が変化していた。

それまでのカジュアルな服装から、いきなり足下まで達するスカート、膨らんだ肩のクラシックなドレスに変化していたのである。

「心配ない。衣装が支給される、と言ったろう？」

声を掛ける二郎もまた、茶色のスーツに、山高帽、手にはステッキを握っていた。但し、二郎の被っている帽子には、相変わらず電脳盗賊ギルドの紋章が光っていた。

「ああ、驚いた！ てっきり、着替えするんだとばかり思ってい

た！」

今度は正直に、タバサは感想を述べる。

二人が乗り込むと、乗務員が近づき、切符を確認する。乗務員は二人を、個室に案内した。

鉄路

個室に向かい合わせに座ると、すぐ汽車は走り出した。

ぽおーっ、という汽笛の音がして、がったんと大きく揺れて汽車は走り出す。

ごとん、ごとんという鉄路の響きが、すぐたたたん、たたたん……というリズムミカルな震動に変わる。ようやく落ち着いたタバサは、物珍しげに窓の外を見やった。

平坦な田園地帯が続き、ときおり絵葉書にありそうな、ちんまりとしたヨーロッパ風の農家が遠くに見えている。農家の庭先には、赤ら顔の農婦が、物干しに洗濯物を乾かしているのが見えた。

「あれも、ここの住民なの？」

二郎は首を振った。

「いや、あれは繰り返し背景なんだ。？シテイ？に向かうプレイヤーたちに、ここが十九世紀であると思わせるための演出だね。実際、この列車からは、到着するまで外へ出ることは絶対できない」「良くてきているわね……」

タバサは溜息をついた。二郎に視線を戻し、尋ねる。

「それで【蒸汽帝国】って、どんな？世界？なの？ どうして最大、最古の？世界？になれたの？」

二郎は手を上げた。

「やれやれ、質問攻めだな！」

タバサはしゅん、となった。二郎は「仕方ない」とばかりに肩を

竦め、説明を始めた。

「もともと【蒸汽帝国】は、三つの？世界？が合わさったものなんだ。一つは鉄道マニアが作った？世界？。一つはミュージカルの愛好者、もう一つが、十九世紀末の英国の生活に憧れる同好の士で作った？世界？でね。その三つの？世界？が一つに統合したから、最初から、かなりの規模だった。RPGの愛好者も参加したから、あそこでは魔法が使用されている」

「魔法！」

最後の二郎の言葉に、タバサは飛びついた。
「魔法が使えるの！ あたしでも？」

二郎は、微かに首を振った。

「君の考える魔法とは、少し違うな。向こうでは魔法という名前は使っていない。単に蒸汽の驚異、という表現になっている」

首を捻るタバサに、二郎は付け加えた。

「ともかく、呪文を使ってどうのこうの、といった類の魔法じゃないことは確かだ。ま、行けば判るさ」

ちら、と窓の外に視線を向け、二郎は指先を上げた。

「ほーら、見えてきたぞ」

遠景に【蒸汽帝国】が見えてくる。

布告

濛々とした蒸気が一面に噴き上がり、白煙の中に朧に人の顔が浮かんだ。

年齢は二十歳前後と思える、若い女性である。

卵形の顔に、なだらかな曲線を見せる^{おとがい}頤。髪の毛はやや亜麻色がかつた金髪で、くるくるとカールがかかって、数本が額から垂れている。

目の色は、深い澄んだ青。身に着けているのは緑色の絹のドレスで、襟元には細かな刺繍のレースが飾られ、額にはきらきらと輝くティアラが載せられている。小さめの耳朶には、ドレスと色を合わせたエメラルドの宝石が、身動きするたび、柔らかな輝きを放っている。

柔らかな唇の両端がぎゅっと持ち上がり、女性は微笑を浮かべた。

「皆さん！ わが【蒸汽帝国】は、設立十周年を迎えました！ この記念日に、わたくしエミリー皇女は、ミュージカルを開催いたします！」

この言葉に、どーっと歓声が上がる。蒸汽の幕に映し出された皇女を見上げる人々の顔は、みな期待に溢れ、次にエミリー皇女が口にする言葉を待ち受けている。

人々の服装は、どれもクラシックな十九世紀末英国の衣装で、男性はほとんど山高帽か、シルク・ハットを被り、女性は大きく膨らんだ足下まで届くスカートを穿いている。

皇女は、類い稀なほど形のいい唇を開き、言葉を続けた。

「演目は？ 蒸気よ永遠なれ！？ です！ 皆さん、お楽しみに……」

わあわあと上がる拍手と歓声の中、エミリー皇女は軽く頭を下げ、手を振って消えていった。蒸気の噴出が止まり、人々は今しがた耳にしたばかりの報せを、口々に興奮して言い合った。

蒸気の驚異

蒸気帝国！

ここは、総てが蒸気に満ち溢れた帝国である。

鉄道、汽船はもとより、蒸気で動く乗合馬車、洗濯機、タイプライター、パイプ・オルガン、それに、今しがた見たような、蒸気映画装置。

組石造りの路面に、煉瓦の高層住宅、屋根は急勾配を見せる切妻屋根で、そこには逞しい蒸気を噴き上げる排気管、煙突がよきよきと立ち上り、壁面には各家庭に大量の蒸気を供給するため、太いダクトが蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

「ごおん……」。と、陰々とした轟音を響かせ、上空を蒸気飛行船がゆったりと舞っている。その間を、軽蒸気飛行艇が、燕のようにひらひらと旋回し、見上げる市民に向かってパイロットが翼を振って挨拶している。

人々は、小型の手に持てるほどの小さな蒸気エンジンを愛用している。

これは自転車に組み込むこともできるし、娯楽のための受像機に繋げば、いついかなる時も、演劇や詩の朗読などを楽しむことができるのだ。人と連絡を取りたいときは、携帯蒸気電話という通話装置もあった。

とにかく、総てが蒸気！ 蒸気であった。

帝国の中心は単に？シティ？とのみ呼ばれている。シティと言え
ば、他にはこのような都市は存在しない。シティの中心にあるのは
？王宮^{パレス}？である。

厳しいゴシック建築の王宮は、常に近衛兵が目を光らせ、毎日、
午後になると、衛兵の交代が荘重に行われ、市民はそれを見るため
に集まるほどだ。

衛兵は青い肋骨服に、白いズボン。ズボンの脇には赤いラインが
走り、頭には高々とした帽子を目深に被り、天辺からは一メートル
もありそうな羽根飾りが揺れている。その衛兵が交代するときは、
手足をぴんと伸ばして、ぎくしゃくと行進するのが見物である。

全体に、この【蒸汽帝国】は、十九世紀末の英国をモデルに作ら
れている。

ただし実際の英国にあった暗い面 阿片窟とか、ディケンズの
小説にあるような孤児院 は省かれている。当然、貧民街などは
存在しない。ここで暮らす人々は、上流階級の優雅さと、平民の自
由を満喫していた。

この【蒸汽帝国】が？世界？に存在するようになって十年！

ほとんどの新？世界？が産声を上げて、数年以内、酷いときには
一月も保たずに消滅していくのに対し、この？世界？だけは、多
くのプレイヤーを引き付け、益々拡大を続けている。

エミリー皇女が即位してから、さらに【蒸汽帝国】は多くのプレ
イヤーの賛同を得、今や絶頂期を迎えようとしていた。

首相

「皇女様、市民は、歓呼の声を上げておりましたな」

慇懃な口調で、首相のトークはエミリー皇女に話しかけた。

ピア樽のような身体つき、ピンクの丸い顔に、ふさふさとした白い髭を蓄え、片方の目に単眼鏡^{モノクル}を掛けている。身長はエミリーの肩にも届かない短軀で、灰色のラシャ地のスーツに、ズボンの裾は短めのブーツにたくしこんでいる。

首相の賛辞に、エミリーはちよつと顔を赤らめた。

ここは、王宮の執務室である。窓からはシティの全貌が見渡せ、落ち着いた調度の家具には、太い蒸汽のパイプが接続されている。

壁には、しゅうしゅうと微かな音を立てる蒸汽ランプが、柔らかな光源を放っていた。

今はエミリーは簡単なワンピースに着替え、額のティアアラも外している。こうしていると、エミリーが帝国を象徴する皇女とは思えず、どこかの快活そうな娘にしか思えない。

エミリーは大きな窓ガラスに近寄り、シティを見下ろした。

どこまでも続く靄の海に、無数の煙突がもくもくと煙を噴き上げている。ときおり、煙を上げていない煙突に、小さな人影が散見される。手には掃除道具を抱えている。煙突掃除夫なのだろう。

こういった辛い仕事には、プレイヤーは絶対に関わらない。やっているのはNPC^{ノン・プレイヤー}である。NPCは単純な労働を請け負い、市民の

生活を助けている。

屋根の間から見える路地に、市民が思い思いに動き回る光景が、ここからでも見えている。

それら大衆の景色を目にし、エミリーは呟いた。

「十周年記念の公演は、成功させたいわね。なんとしても！」

懇願

エミリーの呟きに、首相は大きく頷いて見せた。

「成功なさいますとも！　これまで皇女様が参加なされた公演は、悉く大成功でした。劇場に入れなかった不運な市民たちは、公演を記録した蒸汽映画を、今でも何度も見返しておりますわい」

首相の言葉に、エミリーは悪戯っぽい笑顔を見せた。

「ねえ、タークさん。いつか……いいえ、今度という今度は、あなたにお願いしたことを実行して頂けませんの？」

エミリーの口調に、何を悟ったのか、ターク首相はぎくりとした表情になった。

「と仰いますと？」

「あたくしとの共演ですわ！　あなたが一緒に出演して貰えば、とっても素敵だと思いますわ！　ね、今度こそお願い。あなたにぴったりの役どころが御座いますのよ！」

首相の眉が上がり、単眼鏡がぼとりと落ちた。それを無意識に片手で受け止め、首相はぽかんと口を開け、ぶるぶるつ、と顔を振る。頬の肉が、たぶたぶと波打った。

「御免蒙ります！　我輩、心臓が弱くて……あんな沢山の観客の前に出たら、一発で止まってしまいますわい！」

エミリーは小走りに首相の側に近寄り、継り付くような姿勢になった。

「ねえ、お願い……タークさん。うん、と仰って！」

「いいえ！ 断固、お断りします！ 絶対に、金輪際、天地が裂けようと、海が二つに割れようと、不肖このターク、舞台に上がることは絶対に……」

「お願い……！」

何度も拒否の言葉を口にするターク首相であつたが、敗北は確定的であつた。

エミリーの懇願を敢然と退けるのは、そう簡単なことではなかつた。

闖入者

「その公演は、中止したほうがいいな」

不意に聞こえた若い男の声に、ターク首相と、エミリー皇女は、ぎくりと立ち竦んだ。

「誰だ！」

厳しい声で誰何すると、いつの間にか執務室の隅に、一人の男が立っていた。すぐ側には真鍮製の金属球が、ふわふわ宙に浮いている。

男は茶色の落ち着いたスーツを身につけ、手にはステッキを持っていた。目深に被った山高帽の下から、鋭い視線を二人に当てている。山高帽に付いている紋章を一目ちらつと見て、ターク首相は声を上げた。

「その紋章！ おぬし、電腦盜賊か？」

「御明察……。客家二郎と申す、駆け出しの電腦盜賊でございます。以後、お見知りおきを！」

首相の時代がかった口調に影響され、客家二郎も、やや芝居じみた返答になる。それが可笑しかったのか、二郎は、にやり、と笑顔を浮かべた。

首相は、きよときよと落ち着きなく、執務室を見渡した。

「なぜ電腦盜賊が、こんなところに出没する？ おぬしらは、ギルドに登録されたお宝だけを狙うのではないか？ ここには、盜賊ギ

ルドに登録されたお宝など一切ないぞ」

様々な？世界？は盗賊ギルドと契約し、その？世界？特有のお宝を用意する。当然、厳重な警備をするが、ギルドに所属する盗賊は契約されたお宝しか狙わない規約になっている。

盗賊に狙われたお宝がある、ということになれば、物見高いプレイヤーが押しかける。また盗賊にまんまと盗まれても、お宝は別の？世界？に持ち込まれ、再び別の盗賊に狙われることによって、話題を作る。

盗賊はお宝を売りさばき、仮想通貨通貨の？ハビタット？を手にする。お宝を盗まれたことにより、？世界？もまた話題を集める。

また、お宝も、様々な？世界？を渡り歩くことにより、特有の？物語？が付与される。

長年、様々な盗賊に狙われたお宝のいくつかは、それにまつわるストーリーによって有名なものもあった。その結果、皆、得をするというわけだ。

これは、プレイヤーを引き付けるための、巧妙な仕組みであった。

警告

二郎は、肩を竦めた。

「今日は盗賊の用事で、のこのこ出張ってきたわけじゃないんでね。忠告するために、わざわざやってきた、というわけさ」

「忠告？」

首相は不機嫌な口調になった。その口調に、電腦盗賊に対する首相の気持ちが顕わになる。

「なにが忠告だ！ 盗賊の癖に……」

「あんたら、近々、国立劇場で公演をするんだろっ？」

首相の言葉に取り合わず、二郎は本題を、ずばりと切り出した。窓際に近づき、手にしたステッキの先を示す。

指し示した先には【シティ】の大広場に聳える、国立劇場の建物があった。ステッキの先をちらりと見て、首相は答えた。

「そうだが、それが、何か？」

「国立劇場の空間が不安定になっている。知っていたかね？」
「何だと？」

ぴょん、と二郎の側に浮かんでいた金属球が飛び出した。きんきんと甲高い声で、首相とエミリーに話しかける。

「【ロスト・ワールド】の一部が、あの国立劇場に出現しようとしています！ もし、公演中にそんな状況になったら、大変な事態が起きますよー！」

「【ロスト・ワールド】！」

首相は愕然と呟いた。

「なぜ、そんなことが判るの？」

それまで黙っていたエミリー皇女が、口を挟んだ。表情には、押し殺した怒りが差し上っている。

二郎は浮かんでいる金属球を指さした。

「そいつは、おれの相棒で、ティンカーって言ってね、仮想空間の様々な徴候を感じとる能力がある。そいつの予言することは、信用したほうがいいぜ」

エミリーは猛然と、二郎に向けて言葉を投げかける。

「公演を中止しろ、と仰るの？」

二郎は頷いた。

「できればね」

エミリーは、たん、と足踏みをする。

「厭です！ この公演は、わが【蒸汽帝国】十周年の記念すべき行事です！ 断じて、中止することはできません！」

首相が「皇女さま……」と、心配そうな声を掛ける。

不安

エミリーは頑固そうに頭を振った。

「わたくし、絶対に、この公演を中止することなど致しませんからね！」

言い放つと、足早に壁の通話装置に駆け寄り、送受口に向かって叫ぶ。

「衛兵！ 衛兵！ 何をしているの？ 曲者が現れました！ すぐ逮捕なさい！」

エミリーの通報に、すぐ反応があつた。扉の向こうから、ばたばたという数人の足音が近づいてくる。

二郎は「まいったな」と呟くと、頭を掻いた。

「それじゃ、一応、警告はしたからな。では、ご無事で……」

軽く山高帽の鐔に手を掛け、会釈をすると、すつと二郎は後じさる。

そのとき、ばあーんつ！ と派手な音を立て、執務室の扉が開け放たれた。どどつと、数人の衛兵が雪崩れ込んでくる。

「皇女さま！ 曲者は？」

「そつちです！」

皇女の指さした方向を見て、衛兵たちは「あつ」と小さく叫んだ。

なんと、執務室の壁に二郎の身体が溶け込んでしまっている。背中が、足が壁にめり込み、遂には首だけが壁から突き出している。二郎は、にやりと笑うと、そのまま壁の中へと消えていった。後には痕跡すら、残さない。

慌てて衛兵たちは壁に殺到した。目を皿のようにして、壁に何か隙間がないか、仕掛けがないかと探り回る。だが、虚しい作業であった。

「皇女さま！ 壁は、まったく異常なしです。あやつは、どこへ？」
一人が振り返り、叫ぶ。皇女は、ぼつかりと目を見開いたまま、力なく首を振った。

「何が起きたのでしょうか？」

首相を見つめるが、タークもまた何が起きたのか、さっぱり判らないことでは同じであった。唇を湿し、首相は皇女に話しかける。

「皇女さま……公演は、やはり……？」

皇女は強く首を振る。

「いいえ！ 何としても、公演は行います！ 盗賊などに脅され中止など、わたくしが許しません！」

首相は、微かに肩を落とした。

「左様ですか……」

ふと顔を手で撫で上げ、手の平が冷や汗にべったりと濡れていることに気付く。

不安が込み上げる。

広場

「ちょっと行ってくる」と二郎が姿を消してしまった。

タバサは、ぽかんとした気持ちを持て余し、？シティ？の広場に待たされたままだった。

目の前には国立劇場の建物が聳え立ち、入口横の看板には、近々上演される演目の『蒸汽よ永遠なれ！』のポスターが大々的に貼られている。

劇場の屋根には 蒸汽映画、と呼ぶのだそうだ 白い蒸汽の幕に、以前、上演された演目のダイジェストが立体的に映し出されている。主演は皇女エミリーで、堂々とした立ち居振る舞いは、初見のタバサの目を釘付けにするほどの艶やかさが横溢していた。

タバサは所在なさに、広場を行ったり来たり、或いは劇場前の大階段に座り込んだりして、二郎の帰りを待った。

このまま、どこかへ姿をくらまそうか、とも思ったりした。

だが、やはり初めての仮想現実に一人だけ取り残されている心細い気持ちは、「ここで待っているよ」という二郎の命令を守る気持ちのほうが大ききようだ。

それにしても、どこまで行っただのかしら……。

階段に座り込み、膝で肘を支えるような姿勢になって、タバサは突き出した顎を手の平で押さえている。もうすぐ、夕刻近い。

空はまだ青さが残っていたが、地平線近くにはオレンジ色が忍び寄っていた。劇場の正面は？王宮？であり、様々なレリーフや象嵌

に飾られた建物には、深い影ができている。

なぜか？王宮？の様子が慌しい。

鳥打帽

正面前では実用的な軍服を身に着けた衛兵たちが、強張った顔つきで何か耳打ちしたり、命令を受けたりして右往左往している。

ぼんやりしていたタバサの顔に、影が差した。

「お一人ですか？ お嬢さん」

柔らかな口調に、タバサは「はっ」と我に返って顔を上げた。目の前に見知らぬ男が立っている。男は夕日を背中に受け、黒々としたシルエットになっていた。タバサは目を眇めた。

灰色の地味なインバネス、鳥打帽、口元には濃い黒髭を生やし、目の表情を覆い隠す、黒いサングラスを掛けていた。

「いいえ、人を待っていますのよ！」

タバサはぷい、と横を向いた。どう見ても、怪しい！

いかにも自分は「曲者です」と看板をしょっているような、怪しい出立ちである。

「そうですか、残念ですね。この近くに、とても美味しい食事を出すレストランがあるので、よろしかったら……」
「しつこいわね！」

腹が立って、タバサは叫ぶ。

と、男の被っている鳥打帽に目が止まる。

電脳盗賊の紋章が夕日を受け、煌いた。

「あんだ……」

男は口髭を筆取り、サングラスを外した。
「ばあっ！ おれだ！」

客家二郎の顔が現れた。

食事

「いったい、どういふつもり？」

二郎の案内してくれたレストランに入って、タバサは猛烈な食欲で、出された食事を片端から平らげつつ、質問する。二郎は一杯のコーヒーを注文しただけで、それも少ししか口にしない。

「あんまり食べ過ぎるなよ。胃に悪い」

もぐもぐ、くちやくちやと盛んに咀嚼するタバサの顔に疑問が浮かんだのを見てとり、二郎は言葉を足した。

「仮想現実で出される食事は、本当の食事じゃないんだ。あくまでも君の脳にそういった幻影を伝えているだけでね。

しかし、脳は食事を摂り、胃に食物が運ばれたという信号を受け取っている。結果、胃に何も入っていないのに、胃酸が大量に分泌されることになる。

仮想現実ならいくら食べても太らないと安易に考えて食べすぎで、胃潰瘍を患った連中を山ほど知っているからね」

かちやり、と音を立て、タバサはナイフとフォークを置いた。

グラスに注がれた水を飲み込むと、改めて質問をする。

「だから、どうして変装なんかしたの？」

二郎はこりこりと首筋を掻いた。

「ちよっと、騒ぎを起こしちゃってね。それで、姿を変える必要があった。しかし、こいつは……」と、膝においた鳥打帽を取り上げ

る。帽子には電脳盗賊の紋章が付いている。

「紋章は絶対に外すことができないんだ。どんな姿になっても。これは、おれの分身に、データとなつて書き込まれているからな。まあ、でも一寸くらいは誤魔化せるだろうね。君もすぐ、おれだとは気付かなかつたらしいし」

「騒ぎつて、何よ？」

「？王宮？に忍び込んだ」

忠告

あっさりと言い放つ二郎に、タバサは呆れて、口をぽっかりと開いてしまう。二郎に顔を近づけ、囁く。

「本当なの？」

二郎は頷いた。

「でも、どうして？」

二郎の表情が、真面目なものになる。

「あの国立劇場が、どうやら【ロスト・ワールド】の接触点らしいんだ。

あそこでは、今週、王宮主宰のミュージカルが演じられることは知っているだろう？ 主演は、皇女エミリー。これは、どう考えても何かある。

おれにとって【ロスト・ワールド】の接触点が開くことは好都合だが、もしそれが主演するエミリーに危害が加えられるような展開になると、甚だ面倒な事態になる。だから公演を中止するよう、忠告しに忍び込んだんだ」

タバサは唇を舐めた。

「それで、どうなったの？」

二郎は首を振る。

「駄目だった。エミリーは頑固だな。どうあっても、公演は開催するの一点張りだ。ついでに、おれは曲者ということになって、追われる身となった。まあ、しかたないが」

「これから先どうするの？」

二郎は背を反らした。

「待つさ！　ともかく、今週、主催されるミュージカルを、見に行こうと思う。君は、どうする？」

タバサは躊躇った。何だか、ひどくヤバそうである。

しかし……。

「行くわ、あたしだって！」

決意の印に、腕を組み、二郎を睨みつけた。

「ふうん」と二郎は溜息をつく。

「よせ、と言っても無理だろうな。まあ、勝手にするさ。但し、何が起こっても、責任は取らないぜ！」

途端に弱気の虫が疼くのを、タバサは無理矢理どうにか堪えた。

「判ってるわよ……」

何でもお見通しとでも言うつもりなのか、二郎の視線がからかうようなものになった。皮肉な笑みを片頬に貼り付け、二郎はタバサに忠告する。

「もしもの事態を考え、仮想現実に接続する前はたっぷり休養を摂り、栄養をつけておくことだな！」

俄かな恐怖が、タバサの口調を弱々しいものにした。

「もしも、って何よ？」

二郎の表情が真剣なものになった。

「？ロスト？だよ。決まってるだろう？」

これには、タバサは二の句が継げなかった。

目覚め

仮想現実から戻った田端^{たはたようこ}洋子は、ふうつと溜息をついて、ヘルメットを脱いだ。驚きに、しばし痺れた状態で天井を見上げている。

これが仮想現実！

あんなものとは、想像もしなかった。現実より豪華で、しかも……リアルだった！

横を向くと、洋子の仮想現実接続装置が、窓から差し込む夕日に仄かにピンクに輝いている。仮想空間と、現実の時刻は同期している。仮想空間の【蒸汽帝国】では夕方だったから、現実でもその時間だ。

寝椅子から立ち上がり、装置に近づく。

装置のモニターには、洋子の分身^{ベルソナ}が映し出されている。

ほっそりとした身体つき、すらりと伸びた長い足。肩幅は広めで胸は誇らしげに突き出している。顔は猫を思わせる大きな瞳が印象的で、柔らかなウェーブが掛かった髪が、背中に垂れていた。

愛おしげに、洋子はモニターの分身の映像を指で撫でる。これが仮想現実での自分……。

分身の名前はタバサ。

ふと洋子の視線が、部屋の片隅にある姿見に止まった。

どこをとっても丸々とした、子豚のような娘が、そこにはいた。

ちんまりとした身体つき。腕も、足も、福々しく太っている。

スエット・シャツに、ホット・パンツという軽装で、剥きだしの手足にむっちりと肉がついていた。

夢

洋子は思わず目を背ける。

人は自分を誉めるとき、必ず同じセリフである。

「君は、とても綺麗な肌をしているね……」

ああ、そうでしょうよ！ 他に誉める所がないから、しかたなしにそう言うしかないんだわ！

十八才の誕生日に、ようやく洋子は、この仮想現実接続装置を両親からプレゼントされたのである。十八才の娘としてはあり得ないほど派手に啾り泣いたり、懇願したりした大騒ぎの末だったが、それでも家に運び込まれたときは、天にも昇る嬉しさで一杯であった。

尤も、両親ともに装置を所有していたから、いずれ洋子にも、という両親の気持ちは判っていた。今どき、装置を所有していない人間のほうが少数派になっている。

父親は仮想現実中存在する？世界？に職を持っている。父親の言葉では、仮想現実の通貨？ハビタット？は、現実世界の通貨と交換可能で、今や仮想現実サラリーマン　チャリーマン　は仮想現実で勤めて、報酬を得ているのが大多数になっている。

洋子の部屋は、女の子らしく、ごてごてとした小物で溢れかえっている。小学生から使っている勉強机には、シールやお気に入りのおプロマイドがべたべたと貼られ、壁には仮想現実世界でのアイドルたちの写真が所狭しと占有していた。

それらは洋子にとって夢の一部であつた。
今日、仮想現実実際に接続するまでは。

不意に、洋子は自分の部屋が色褪せたかのように思えた。もう、昨日までの自分には戻れない。仮想現実を体験した今、洋子の中の何かが死に、何かが生まれたのである。

ニュース

家は、しん、と静まりかえっている。

両親は、ちゃんと、家の中にいる。しかし、二人とも仮想現実
に接続していて、各々の部屋へ閉じ籠もっている。

父親は「仮想現実での仕事で残業だ」と言っていたから、深夜ま
で部屋にいたろう。母親も、仮想現実パートで働きに出ている
らしい。洋子は部屋を出て、キッチンに向かった。

気がつくと、空腹で目が回りそうだ。考えてみれば、朝から仮想
現実装置に接続していて、現実では何も口にしていない。

キッチンのテーブルには、洋子のための食事が出されていた。流^は
行^{やり}の濃縮栄養パック、というやつだ。紙のようにばさばさした食感
の、味も素っ気もない食べ物だ。

キッチンには小型の情報端末が置かれている。昔は？テレビ？と
呼ばれていて、今でも機能は変わらない。

洋子は、もそもそと食事を噛みしめつつ、端末を点けた。夕方の
ニュース番組が始まった。

だが、ほとんどのニュースは仮想現実での最新情報で、現実世界
での出来事はまったく言っていないほど、扱うことはない。

何しろ事件が起きないのだ。仮想現実接続装置が普及してからと
いうもの、現実世界での犯罪は激減した。激減というより、ほぼ消

滅したと言っている。

犯罪事情

犯罪の理由は色々と考えられるが、ざっくりと断定してしまうと、それは不足から生じる。

人は財力の不足から金を盗み、愛情の不足から、強姦事件を起こす。

しかし、仮想現実接続装置を所有してしまうと、それら諸々の不足は、完全に充足してしまう。

大金持ちの暮らしを体験したければ、それらのデータを仮想現実で入手すればいい。僅か四畳半の部屋に暮らしていても、仮想現実では城のような豪邸に住まうことができる。

現実世界では誰にも見向きもされない人間でも、仮想現実の夢のような美しさを誇る、男女のNPCが本物の愛情を持って接してくれる。

事故すら、ニュースにならない。なにしろ、自動車を現実世界で運転する人間が存在しないのだ。それでは、物流はどうするのだと疑問が起こるだろうが、問題は一切ない。

仮想現実から接続して、無人の車両や航空機、船舶を操縦するのが一般的だ。だから現実の人間が乗り組むこともなく、事故が発生しても、死亡事件とはならない。単に、機械が破損するだけだ。

静寂の中、家の外で子供が遊ぶ声が微かに聞こえてくる。

今や、街中で見られる人間は、十八才以下の子供のみである。仮想現実接続装置を使えるのは、十八歳の誕生日を過ぎてからと決ま

っている。

なぜなら、人間の脳細胞は思春期まで安定した構造を保持していないからだ。生まれてから思春期を過ぎるまでは、ニューロン、グリア細胞などが結びつき、脳の安定した構造が完成するまで、人間の脳は毎日、いや、一分一秒ごとに変化している。

それでは接続装置は脳の完璧な仮想現実でのリンクが維持できず、ブレイン・マップ脳の地図が完成する十八歳を待たないと、使用できない規約になっている。

十八歳以下の少年犯罪も激減した。犯罪に対する刑罰が、仮想現実接続装置の使用不許可であるから、それまでは大人しくしているに限ると、犯罪に手を染める少年少女がいなくなってしまったからだ。

コンビニ

洋子は食事を諦めた。とてもじゃないが、食べたものではない。

仮想現実で大部分を過ごす多くの人は、この食事でも満足できるのだが、洋子は今日ようやく初めて接続した初心者である。何か、買いに行こうと思ったのだ。

それでも家を出る前、洋子は簡単な身づくりいを済ませ「買い物に行ってくる」と母親に書置きを残し、外へ出た。

もし仮想現実が普及する前の人間が、街の様子を一目でも見たら、「ここは廃墟か」と驚くだろう。

ほとんどの家は壁に罅が走り、屋根は穴が空いて、それを簡単なビニール・シートなどで覆う応急修理で済ませている。

ビルもまた壁は薄汚れ、街路には亀裂ができて、そこから雑草がぼうぼうに生い茂る。

公園の木々は手入れもされず、地面が剥き出しのところは頭も隠れそうな丈の長い草に一面どこまでも占領されていた。しかし、洋子にしてみれば、子供の頃から見慣れている風景なので、何の感慨も起こらない。

住宅街から少し離れた幹線道路沿いに、洋子の目当てのコンビニがあった。

買い物を選び、カウンターに向かうと、遠隔操作義体の店員が接客してくれる。機械のボディに、顔の辺りにモニターがあり、そこから仮想現実から接続された店員の顔だけが映し出されている。

弁当と、飲み物の代金を払い、洋子は買い物袋を下げ、近くの公園に向かった。

決意

ベンチに座り込み、買い物の弁当を広げ、ぼんやりと夕日を眺めながら食べはじめる。

美味しい……。

たとえ大量生産の、無人工場で作られた弁当であっても、本物の素材、本物の食べ物、洋子の空腹を満たしてくれる。

夕日が空を染め上げる。

廃墟のような街の景観はシルエットとなって夕空に沈み、醜い細部は影になって見えなくなる。それが仮想空間で見た、景色と重なる。

洋子は食べ終えた弁当と飲み物の容器をまとめ、屑籠に投げ入れた。容器は、ほんの少しの亀裂でも自然分解する素材でできているから、数日中には跡形もなく土に溶け込むだろう。

客家二郎のことを考える。あの名前は、本名なのだろうか？

ほとんどの仮想現実で過ごす分身は、外国風の名前を名乗っているのが普通だそう。だから洋子は、分身にタバサという名前を与えた。

二郎……。どう考えても、日本人の名前である。仮想現実接続装置には、自動翻訳機能がついているから、日本人であるという確証はないが。

【ロスト・ワールド】に挑もうとしている、あの客家二郎を考えるうち、洋子の胸にも新たな決意が育っていた。

そうだ、あたしも何か挑戦できるものを見つけよう。それが何か、今は皆目、見当もつかない。でも、二郎と知り合ったことが、きっかけとなるかもしれない。

？ロスト？は確かに脅威だが、ただ怖がったとしても、意味がない。第一、死ぬわけじゃないのだ。単に三日分の記憶が失われるだけじゃないか……。

ベンチから立ち上がり、洋子は家に帰る道筋を辿った。

控え室

続々と詰め掛ける観衆を見て、皇女エミリーは満足そうな笑みを浮かべた。

今日、開催される演目？蒸気よ永遠なれ！？のメイクを施しているので、いつもよりさらに美しさに磨きが掛かっている。

国立蒸気劇場の二階にある、控え室グリーンルームの窓から広場を覗き込んで、エミリーは傍らのターク首相に言葉を投げかける。

「この前の公演より、ずっと沢山の人に来てくれたわ！ 大成功は約束されたようなものね？」

「左様で御座います」と返事をするタークは、内心の不安を顔に出さないよう努力していた。

だが、エミリーは瞬時に気付いたようだ。

「どうしたの？」と、エミリーの形のいい眉が微かに寄せられる。タークは疑念を隠すことを諦めた。

「心配なので御座いますよ、エミリーさま」

エミリーは、わざとらしく、開けっぴろげな笑みを浮かべる。

「この前の曲者の言葉ね！ ターク首相って、本当に心配性なのね。大丈夫よ。もしもの事態を考えて、警備は厳重にしているし、王宮パレスでは帝国軍がすぐに駆けつけられるよう、待機しているわ」

「それは確かに、それで御座いますか……」

タークは口籠る。

【ロスト・ワールド】の噂は、この【蒸汽帝国】でも色々と耳にしている。

仮想現実の初期に【パンドラ】が無数の？世界？を産み出す最初に誕生したと言われている【ロスト・ワールド】は、どの？世界？にも通じていない孤立した？世界？であつたという。本来なら、そのような？世界？は？ハビタット？の注入がなされないまま、消滅してしまう運命にあるはずなのだ。

ところが、それが大違いだった。

なんと【ロスト・ワールド】は、他の？世界？に綻びを作り出し、一目ちらつと見た程度では判然としない罫を作り出していると言う。

それらの罫に気付かず、うっかり【ロスト・ワールド】に迷い込んだが最後、もう元の？世界？には戻れず、永遠に囚われてしまうそうなの。仮想現実に接続して七十二時間の期限が来ると、プレイヤーは分身を【ロスト・ワールド】に残したまま？ロスト？してしまうのだ。

伍長

「大丈夫だったら！」

エミリーは黙り込んだタークの背中を気安く叩いた。

その時、部屋のドアが、どんと勢いよく叩かれた。

「どなた？」とエミリーが声を掛けると、ドアの向こうから喚くような一本調子の声が応える。

「帝国軍第一連隊所属伝令の、バルク伍長であります！ ご報告にまいりました！」
「お入りになって」

エミリーの声に「はっ！ 失礼します！」と返答があり、ドアが叩きつけられるように開かれた。ドアの向こうには、頬を真っ赤に染めた陸軍下士官がしゃつちこばって立っている。直立不動のまま、さつと敬礼をすると、叫ぶように報告をする。

「わが帝国第一連隊は、本日完全に配備を完了！ 水も漏らさぬ態勢で、国立蒸汽劇場の警備に着いております！ どうかエミリー皇女さまにあらましましては、全幅の信頼を置かれないと、連隊長のお言葉であります！」

こちこちに緊張している伍長は、声の加減ができず、あらん限りの声を張り上げる。

首相のタークは、思わず両耳を手で塞いでいた。やっと伍長が報告を終えたので、タークは叱り付けた。

「伍長！　ここは演習場の野っ原ではないのだぞ！　もう少し、声を抑えるとか、考えろ。鼓膜が破れる！」

「はっ！　申し訳ありません！」

詫びる伍長の言葉は、さらに大声になった。窓ガラスがビリビリと震動する。

エミリーは気の毒そうな表情になると、優しい笑顔を伍長に向けた。

「まあ、伍長さん。気にすることないのよ。わたくしが感謝していた、と連隊長さんに伝えて下さいな」

エミリーの言葉に伍長は感激して、もう一度、口を開きそうになった。だが、タークが睨みつけると慌てて口を噤み、さっと敬礼をして回れ右をして退出した。

伍長の背中を見送り、エミリーはタークに顔を向けた。

「さあ、そろそろ開演の時間よ！　遅れると、お客さまに悪いわ。まいりましょう！」

「はあ」と生返事をして、タークは重い腰を上げた。

劇場

「凄い、人の列ねえ……」

待ち合わせたタバサと二郎は広場で落ち合い、劇場に向かった。劇場の切符売り場には観客の長い列が伸びて、最後尾は延々と一キロ以上に渡って続いていた。最後尾から劇場を臨み、タバサは二郎を振り返る。

今日の二郎は、洒落たスーツを身につけ、シルクハットを被っている。首許はネクタイではなく、バンダナを巻いて替わりにしていた。手にはステッキではなく、乗馬鞭を握っていた。足下は乗馬ブーツで、休暇中の若い貴族といった思い入れである。

タバサのほうは、この前の支給されたドレス姿のままだ。会ったびに二郎は姿を変えているが、いったいどうやって身につけるものを調達しているのだろうか？

「これで開演に間に合うの？」

「どうだろうな」

二郎は関心のない素振りで、ぼんやりと呟く。タバサは苛々と足踏みをする。

「あんた、あの劇場で何か起きるって、言ってたじゃない？ 公演を見に行くの、行かないの？」

「勿論、公演は見に行くさ」

二郎の様子に、タバサは首を傾げる。

「だつたら……」

二郎の腕が伸び、ぐいとタバサの手首を掴んだ。
タバサは思わず「えっ？」となった。

二郎は、にやりと笑うと、無言でタバサを引っ張っていく。

入口

ぐいぐいと力強く、二郎はタバサを引っ張り歩いていく。タバサは二郎の勢いに圧倒され、つつい従ってしまう。

二郎は、そのまま劇場の裏手へと回った。

裏手にはごたごたと太いの、細いの様々なダクトや、パイプのたうつように劇場の壁を占領している。歩道のマンホールからは、溢れた蒸汽が濛々と立ち込め、まるで俄かに霧が出現したかのようだった。

ぽん、と二郎のポケットから金属の球体が飛び出した。二郎の相棒であるティンカーである。二郎は陽気にティンカーに命令する。

「ティンカー！ 入口を頼む！」

「了解！」

ティンカーは短く応えると、ダクトの隙間の壁に近寄った。針のようなものが、ティンカーの表面から飛び出した。針を壁にくっつけ、素早く長方形の形を作る。

と、煉瓦の壁に、きらきらと長方形のラインが走り、ドアの形に変化する。

「二郎さま。できました！」

「ご苦労」と二郎は頷き、ドアのノブを掴む。

呆気にとられているタバサに、顎をしゃくった。

「さあ、中へ入るぞ！」

がちやり、と音を立てドアが開く。
ドアの向こうは廊下であつた。

二郎はさつさと中へ入り込む。中からタバサを見て、眉を上げた。
「どうした？ 入らないのか？」

裏技

「え、ええ……」

訳が判らず、タバサは恐る恐る踏み込んだ。

床には柔らかなカーペットが敷き詰められ、壁には公演予定のポスターが幾枚も貼られている。確かに、劇場の内部のようだ。長い廊下のあちこちに、木のベンチが置かれ、天井からは黄色いランプが点々と柔らかな光を灯している。

がちやり、ともう一度音を立て、二郎はドアを閉める。途端にドアが壁に溶け込むように消えていく。あとには白い漆喰の壁が残っているだけである。

「な、なんなのよ……。これって、魔法？」

「違うな」

二郎は首を振った。

「おれは【パンドラ】の開発者だと言ったろう？ 従って【パンドラ】を使って作成された？ 世界？ では、色々な裏技が使えるのさ。ティンカーに命じて、劇場の壁に入口を作らせたのも、裏技の一つだ。結構、便利だろ？」

得意そつに、二郎は軽薄な笑みを浮かべる。

タバサは目を細めた。

「ふうん……。あんた、確か、電腦盗賊って名乗ったわね……。なるほど、これなら腕利きの盗賊になれるわ！」

二郎は「へっ！」と肩を竦めて見せる。

「そりゃな。だけど、盗賊になるために『パンドラ』を開発したわけじゃない！ さあ、ともかく皇女さまの公演とやらを見物しに行こうじゃないか！」

悠然と、二郎はタバサの腕に自分の腕を絡ませた。大人しく二郎に案内されながら、タバサは、これから始まる冒険の予感に密かに胸をときめかせた。

雑踏

劇場入口は殺到する観客たちで、芋を洗うがごとくの混雑を見せている。

派手な金モールの飾りをつけた警備員が、声を枯らして観客たちに整然と入場するように叫んでいる。

が、一瞬でも早く場内に入りたい観衆にとっては、馬の耳に念仏で、後から後から入口に押しかける。

「押さないで！ まだ時間はありますよ！ 転んで怪我をする怖れがあります。どうか、押さないで！」

顔一杯に汗を掻き、両手を振り回す警備員だったが、まるで観衆には届いていない。

二郎とタバサの二人は、押しかける観衆の混雑に紛れ、会場へと押し流されるように運ばれていく。押し合いへし合いの混乱から、二郎はぐいぐいと力強く抜け出し、タバサの腕を掴んで会場の中央部分へと案内していく。

ぽかんと、真空地帯のように、お誂え向きに二つの空席が見つかった。慌てて座り込むタバサの隣に、ゆっくりと二郎が腰を降ろしてくる。

「運が良かったわね。ちょうど席が空いていて」

「まあな」と短く答える二郎の片頬に、皮肉そうな笑みが浮かんでいるのを見て、タバサは顎を引いた。

「なによ……。また裏技？」

「違う。慌てる必要はなかった、と言いたいのさ。周りを良く見て、何か気付かないか？」

観客

言われてタバサは、改めて会場を見回す。

丸い天井、観客席は一階の一般席と、二階、三階と棧敷席が取り囲む。複雑な彫刻が施された柱に、天井からは豪華なシャンデリアが垂れ下がっていた。クラシックな、会場であるという印象の他は、何も訴えてくるものはなかった。

「別に……」

「観客席さ。いったい、収容人数はどのくらいだろうな」

二郎の言葉に、タバサはざっと見当をつける。

「そうね……五百人も入れば、一杯かしら」

「外に何人、入場を待っていたと思う？ 少なくとも、五千人はいたらうな」

タバサは目を丸くした。

「どういうこと？」

「この会場に、たとえば全世界の人間が集まったとしても、平気だと言えば信じるかな？」

二郎の目が悪戯っぽく、笑っている。タバサは無言で頭を振った。

「ここが仮想空間だということを忘れちゃ駄目だな。辺りにいる他の観客は、言ってみれば、幻影だ。本当の観客じゃないんだ」

「じゃ、本当の客は、あたしたち二人きりなの？」

二郎は苛立たしげな表情になる。

「違うと言ったろう？　ここには数千人の客がいるが、おれたちには仮想空間が見せてくれる象徴的な意味での観客しか見えていない、ということさ。他にいる観客たちにとっても、同じさ。単に、沢山いる観客というイメージだけが展開されている」

タバサはくらくらするような眩暈を感じる。まったく仮想現実つてのは……！

二郎が呟く。

「始まるぞ……」

タバサは慌てて舞台に目をやった。

開演

場内が暗くなり、どっしりとした緞帳に柔らかなライム・ライトの光が浴びせられる。

舞台の袖から、悠然とターク首相が現れる。

途端に、観客席から熱狂的といっている拍手と喚声が沸きあがった。しばらくは、拍手と喚声の中、首相は立ち尽くしていた。

やがて会場が静まると、首相はばかりと口を開き、開演の挨拶を始める。

「ようこそ！ 【蒸汽帝国】十周年を祝し、国立蒸汽劇場において『蒸汽よ永遠に！』を上演いたします！

主演は畏くも（ここで観客は一斉に立ち上がり、胸に手を当てる）皇女エミリー殿下！

エミリー殿下は、今回の記念公演を皆様方と成功させたいと、熱望致しておりますぞ！」

わあわあという喚声が会場を包む。首相は両腕をゆっくりと上下に揺らし、観客を着席させた。再び会場が水を打ったように静まり返ると、首相は頭を下げ、退出する。

静寂の中に、期待が一杯に張り詰められる。

いきなり、じゃーんとユニゾンによる大音量で、音楽が鳴り響いた。

緞帳が静々と左右に開き、舞台の幕が上がる。皇女エミリーが立っていた。

歌劇

スポット・ライトの中に立っているエミリーは、燦然と輝いていた。

衣装は純白のドレスに、一面にスパンコールが縫いこまれ、微かな身動きできらきらと輝いている。

サキソフオンが誘うようなソロを演奏する。エミリーは、朗々としたアルトで歌いだした。バイオリンが演奏に加わり、打楽器が力強いリズムを刻み、音楽は雄大な広がりを作り出した。

エミリーの頬が赤らみ、次第に音域が高まっていく。

アルトの声調からメゾ・ソプラノ、ソプラノへと高まり、コロラトゥーラ・ソプラノへと駆け上がっていく。

歌声に、詰め掛けた観客から笑い声が聞こえてくる。中には、一緒に歌って歌っている観客も見受けられる。

どうやら歌詞に反応しているらしいが、どこが可笑しいのか、タバサにはさっぱり判らない。

【蒸汽帝国】に長くいる住民にとっては自明の冗句なのだろうが、初めて聞くタバサにとっては、珍紛漢紛の内容である。ともかくエミリーの圧倒的な歌唱力には感心するが……。

出し抜けに、白い蒸汽が舞台を包んだ。さっと両側からダンサーが飛び出し、エミリーを囲んで軽快なステップでタップを踏む。エミリーもまた、タップに合わせて手拍子をして踊る。会場からリズムに合わせ、拍手が巻き起こった。

舞台の袖から、首相が現れる。わざとらしい顰め面で、歌いだす。意外なことに、首相は朗々としたテノールであった。しばらくはエミリーと首相の掛け合いが続いた後、舞台は暗転して、【蒸気帝国】建国の場面になる。

夜明けを思わせる薄暗い空に、数本の煙突がもくもくと煙を吐き出し、舞台にはあちこちから蒸気が噴き出している。

がちゃん、どしんと力強い機械の音が音楽と溶け合い、いやがおうにも観客の心を掴んで離さない。

我知らず、タバサは身を乗り出し、演じられている内容に夢中になっていた。

暗転

舞台は再びエミリー一人になり、独唱になった。

微かに顔を挙げ、どこか遠くを見つめるエミリーには荘厳といていい神秘的な表情が浮かんでいた。エミリーの身体を包むようにして、白い蒸気が盛んに噴き出している。

ふと、隣の二郎の様子がタバサは気になった。タバサと同じく、舞台に夢中になっているのかと思ったが、その視線はエミリーに向けられてはいない。どこか、違う方向を見ている。

「どうしたの？」

小声で囁くと、二郎は微かに首を傾げる。

「妙だ……演出が変わったのかな？ あんなに蒸気を出す場面じゃないのに……」

二郎も小声で囁き返した。タバサは、ちょっと驚いた。

「前にも……って、あんた以前にもこれを見たことあるの？」

二郎はタバサに顔を向け、にやりと笑った。

「まあな。おれは、仮想現実で行われている総てのことには興味があるんだ」

もくもくと白い蒸気が盛大に噴き出し、ついには舞台全体を覆ってしまった。歌っているエミリーの姿も、ほとんど見えなくなる。二郎が明らかに緊張した様子で身を乗り出す。

「どうやら始まったらしい……！」

じわり……と白い蒸気の中から、黒い影が姿を表した。

姿を表したのは、巨大な扇風機であった！

扇風機

観客も、舞台に立ち尽くすエミリーも、皆ぼかんとした表情で、巨大な扇風機を見上げている。

「な、何なの……？」

タバサは、呆然と呟いた。

隣の二郎も、訳が判らないという表情で、ただただ舞台に、どてん、と据えられた扇風機を見上げているだけだ。

と、扇風機に電源が入ったのか、羽根がゆっくりと回り出した。実にゆっくりで、からからと乾いた音が扇風機のモーター部分から聞こえている。

舞台を覆う、白い蒸気が羽根に掻き回され、静かに輪を描く。白い渦巻きが、扇風機を中心に動いている。何の危険も感じさせない、呑気で少々間延びした光景だ。

ゆっくりとした羽根の動きに、タバサは意識がぼんやりとしてくるのを感じる。額に手をやり、目を擦る。そんなタバサの様子に、二郎が心配そうに声を掛けた。

「どうした？」

「なんだか、眠いの……」

二郎は「はっ」とした表情になり、慌てて周りを見渡す。ぐつとタバサの肩を掴み、荒々しく揺さぶる。

「煩いわねえ……。あたし、眠いんだって……」

二郎がタバサの耳もとに口をつけ、切迫した調子で叫んだ。

「起きろ！ タバサ！ 周りを見るんだ！」

「何よう……」

ぼんやりとした視界で、タバサは言われたとおり、周囲に目をやった。

観客たちが、タバサ同様、とろんとした目付きで舞台に視線を釘付けにされている。一様に、ぼーっと魂が脱け出たような、虚脱した間抜けな表情である。

舞台を見上げ、タバサは「あっ！」と小さく叫んだ。

「せ、扇風機は？」

舞台を占領していた扇風機はいつの間にもやら、どこかへ消えていた。だが、扇風機が作り出した蒸気の渦巻きだけは、相変わらずゆったりとした動きで旋回を続けている。

二郎は眉間に深い皺を刻み、鋭い目付きで渦巻きを見つめている。もう、座ってはおらず、腕組みをして観客席の中央通路に凜々しく、すっくと立っていた。

宣言

渦巻きは舞台から観客席まで伸びていた。渦の中心は、黒々とした闇のみが広がっている。

ぱつ、と眩しい光が闇を貫いた！

真っ白な、目を突き刺すような光に、タバサは思わず目を瞑る。

再び目を開けたとき、舞台には光の階段ができていた！

驚き、タバサも立ち上がる。階段は、まるで無限の彼方に続いているかのようだ。階段の先は、遙か高みへと繋がっている。

階段の上に、一人の人物がぼつんと立っている。

真っ白な光をバックに、異様なほど人物の姿は黒々としていた。

真っ黒な艶のない黒い肌。黒いスーツ。しかし微かな風に靡く頭髮は、雪のような白銀色を呈している。

ことり、ことりと靴音を響かせ、人物はゆっくりと階段を降りてくる。

やっと表情が見受けられるほどの距離に近づいた。

長い顔、どことなく狼を思わせる野性的な顔つき。切れ上がった両目。表情には、一辺の暖かみなど微塵もなく、酷薄ともいえる厳しい表情のみが支配している。

不意に、男の顔が歪んだ。笑顔を見せたのだ。

だが、どう見ても、笑顔と言うには凄絶すぎる表情である。獲物

を狙う肉食獣の笑み、と形容できそうだ。

さっ、と男は両手を広げた。

「お初にお目に掛かる！ 我こそは【ロスト・ワールド】の主人なり！ 全？世界？の支配者と運命付けられた、その名もシャドウ！
【蒸汽帝国】の諸君！ 喜べ、今日より【蒸汽帝国】は、我が【ロスト・ワールド】の傘下に入ったのだ！」

得意そうにシャドウと名乗った男は、高々と顔を仰向けた。真っ白な髪の毛が、ぶあつと鬣たてがみのように左右に広がる。

シャドウの視線は、舞台に呆然と棒立ちになっているエミリー皇女に向けられている。皇女は、シャドウの凝視に、身動きもできず、愕然と凝固している。

門

「ば……馬鹿なっ！」

舞台の袖から、首相のタークが顔を真っ赤にさせ、飛び出してくる。エミリーを庇う位置に立って、頭を振り立てながら叫んだ。

「傘下に入っただと？ 出鱈目も大概に申せ！ たった一人で、法螺を吹くとは、お前は だ……！」

恐らく「気違い」と言いたかったのだろう。しかしタークの口元はぱくぱくと、虚しく動くだけである。仮想現実では、こういった差別用語は、テレビ放送コードに準じて自動的にカットされる。

「傘下に入ったとは、どういう意味だ？」

シャドウは冷やかな視線をタークに向ける。タークはシャドウの一瞥に、ぎくりと立ち竦んだ。シャドウは、さっと背後の輝く階段に向け、腕を振り上げる。

「この階段が見えないのか？ これは、我が【ロスト・ワールド】に続く？ 門？ ^{ゲート}なのだ。お判りかな、ターク首相。すでに【ロスト・ワールド】と、あなた方の【蒸汽帝国】は、繋がってしまった。つまり【蒸汽帝国】は【ロスト・ワールド】の一部になった、ということだ」

「何い？」

タークは驚きに目をひん剥いた。両目が飛び出るばかりに見開かれている。

「まだ早い！」

しん、と静まり返った会場に、鋭い怒鳴り声が響き渡る。

シャドウとターク首相、それにエミリーの三人は、声の方向に目をやる。

観客席通路の真ん中に、二郎がぐつと両足を踏ん張り、シャドウを睨みつけていた。

シャドウの顔に驚きと、皮肉な笑みが同時に浮かぶ。

「これはこれは……。客家二郎、お懐かしや、その姿。オリジナルの姿のまま、分身を製作したのか！」

シャドウは、歌うように楽しげに二郎に話しかけた。ぎゅつと唇の両端が持ち上がってVの字を形作り、悪魔的な笑みを浮かべている。

野望

二郎は冷静な口調で答える。

「お前の姿は、おれが最初に作った分身だ。あの頃は、おれも若かったな。そんな姿が格好いいと思っていたからな。今では、つくづく後悔しているよ」

シャドウの顔に、きりきりと怒りの皺が刻まれた。

「馬鹿にしゃがって！ もともとは、お前のせいではないか！ おれがシャドウになったのも【ロスト・ワールド】が誕生したのも！ 勝手な御託を抜かすな！」

二郎は憂い顔になった。

「そうだ。総ては、おれの間違いでおきた！ 間違いは正さねばならない……」

シャドウは嘲るように笑った。

「どうするというのだ？ おれは知っているぞ。お前は【ロスト・ワールド】に何度か侵入を図っていたな。

もっとも、侵入した途端、ほうほうの態で逃げ帰っているが。多分、お前は【パンドラ】の修正をするつもりなんだろうが、無駄なことだ。おれは、十年前のお前のままではない。この十年、おれは着実に進化している。【パンドラ】も同じだ！ お前の手に負えるレベルの代物ではない！」

二郎は、ひた、とシャドウに目を据えながら詰問する。

「これから、何を仕出かすつもりだ？ 進化したと言う【パンドラ】と、お前は」

ぐつとシャドウは背を聳^{そび}やかす。見る見るシャドウの全身が膨れ上がる。

いや、実際に巨大化している。背が、肩幅が、両足がぐんぐんと膨れ上がり、ついには頭が天井に届かんばかりになった。

「全？世界？の征服だ……！ 手始めは【蒸汽帝国】！」

シャドウの声は、ごろごろと石の車輪が転がるときのような響きを帯びていた。

蒸気軍

膝を突き、腕を伸ばす。

シャドウの腕は、立ち竦んだままのエミリーに伸ばされている。ぶんつ、と腕を振り、立ち塞がるターク首相を弾き飛ばし、手の平を開いて、がばつとエミリーを掴み上げた。

「きゃああああっ！」

エミリーは、あらん限りの声を張り上げ、悲鳴を上げた。

シャドウは爛々と目を輝かせ、虜にしたエミリーの顔を覗きこんだ。

「エミリー皇女さま……そなたに、新たな玉座を用意しよう……」
「ロスト・ワールド」の玉座を！」

軽々と弾き飛ばされたタークは、よろよろと立ち上がった。ポケットから携帯蒸気電話を取り出し、送受口に向かって叫ぶ。

「蒸気帝国軍！　すぐ劇場内に突入せよ！」

劇場の出入口が、ばんつ、と音を立てて開かれた。さつと差し込んだ外光とともに、完全武装の帝国軍の兵士が怒濤の如く突入してくる。皆、一様に重装備のプロテクターを身につけ、頭からは防護ヘルメットを被って、まるでロボットの一団であった。

先頭の、指揮官の襟章を付けている兵士が、ヘルメットの覆いを撥ね上げる。下から現れたのは、若い女性の顔である。

きりつとした表情、瞳は深い緑色、ヘルメットの下から燃えるような赤い髪の毛がこぼれ出ていた。指揮官の女性は、この場の状況を一目見て「はっ」とばかりに喘いで叫ぶ。

「エミリー！ 皇女さま！」

皇女を掴み上げたシャドウは、邪悪な笑みを浮かべ、兵士たちを睨みつける。

危険

ようやく遅ればせながら、この時に至って、観客たちに恐怖の感情が、呆けた脳味噌に湧いて出たらしい。

絹を裂くような……と言いたところだが、黒板を爪で引掻くような女の悲鳴が一声「ひいーっ！」と高く下品に響くと、それを切っ掛けに、会場全体が「わっ」とばかりに騒然となった。

「何だ、あれは？」

「エミリー皇女さまが！」

「悪魔か？ そんな馬鹿な、ここは【蒸汽帝国】だぞ！ 中世ヨーロッパの、RPG？世界？じゃないんだ！」

「誰かが、他の？世界？から持ってきたんじゃないのか？ そんなこと、できるのか？」

皆、口々に勝手な与太を言い合っている。

呆然と立っていたタバサの腕を、二郎がぐいっつと掴んで引き寄せ。近々と二郎はタバサに顔を近寄せ、喚いた。

「逃げろっ！」

「え……」と、タバサはまだぼんやりして、二郎の言葉が意識に届かない。

二郎は苛々した口調になった。

「逃げろ、と言ったんだ！ 聞こえなかったのか？」

「で、でも、どうして……？」

「【ロスト・ワールド】に呑み込まれるぞ！ 見ろ！ あれを！」

後退

二郎は舞台を指差す。

二郎の示した方向には、蒸汽の渦が舞台から客席全体を覆い尽くそうとしていた。

渦に触れた劇場の部分は、ぐにやりと変形し、何か異様なものに変貌しようとしていた。

渦巻きの中心に巨大化したシャドウと、その手に捉えられている皇女エミリーがいる。

「皇女さま……エミリー……」

首相のタークは、すんと腰を抜かしたように床に仰のけになり、必死になって立ち上がるうとしている。

恐怖に凍り付いた視線は、ひた、とシャドウに掴まれたままのエミリーに注がれていた。

「【ロスト・ワールド】が、蒸汽劇場全体を呑み込もうとしている！ このまま留まったら、おれたちも強制的に【ロスト・ワールド】に入ってしまう！ それは超まずい！ 何の準備もないまま【ロスト・ワールド】に呑み込まれるわけには、断固いかん！」

二郎は一気に捲くし立てると、ぐいぐいとタバサの腕を引っ張って、劇場の出入口へと突進した。

が、途中で思い直したのか、ターク首相の襟首を背後から片腕一本で掴み、ずるずると引き摺っていく。怖ろしいほどの怪力だ。

タークは抗議した。

「は……離せっ！ 皇女さまが、あの化け物に捕まっているというのに……！」

すかさず二郎は叫び返した。

「今は無理だ！ まだ準備が全然できていないっ！ それより帝国軍の攻撃が始まるぞ」

二郎の言葉にタークは、帝国軍の方向に顔を振り向ける。

蒸汽砲

女性指揮官は、ヘルメットの前覆いを撥ね上げたまま、鋭い視線で舞台上のシャドウを見上げている。戦いの予感に、緑の瞳が煌いていた。さつと片手を挙げて合図すると、機敏な動作で部下たちが、巨大な筒のような武器を構えた。

「よせっ！ 皇女さまが危ないっ！」

タークの叫びに、指揮官は振り向くと、にっこりと笑顔になった。

「安心して下さい、首相！ 我々は、この瞬間のために日夜訓練を重ねてきました。皇女さまには、掠り傷一つ、つけません！」

「し……しかしっ！」

タークは心配顔だ。

指揮官は、もはや首相には関心をなくしたのか、さつと振り上げた腕を下ろし、叫ぶ。

「蒸汽砲、攻撃せよ！」

言葉が終わらぬうち、部下が蒸汽砲の引き金を引く。

ずばあーんっ！

魂消るような大音量で、筒の先端から真っ白な蒸汽が固まりとなつて飛び出す。

本来は気体のはずなのだが、まるで個体のようにしっかりとした輪郭を持っている。白い蒸汽の固まりは、狙いたがわず、シャドウ

の胸元に飛び込んだ。

ずばんっ、と白い蒸気がシャドウの胸で爆発する。シャドウの全身がぐらつと揺れた。真っ白な髪の毛が逆立ち、真っ黒な顔に怒りの表情が浮かぶ。

「おのれ……小癪な……！」咆哮する。

二郎は肩を竦め、首を振る。

「大時代だね、どうにも……」

そつとタバサの腕を掴み、後退する。耳元で囁いた。

「あんな時代物の旧式兵器で、シャドウをどうにか始末できるもんじゃない！ 巻き込まれないうち、こっちは、おさらばしようぜ！」

激突！

「あんたって！」

タバサは憤然となった。

「さっきの話じゃ、あんたに責任があるんでしょ？ それなのに、尻尾を巻いてすたこらさつさと逃げ出すつもり？」

二郎は恬淡と頷く。

「当たり前さ！ こちとら、十年も掛けて『ロスト・ワールド』攻略の秘策を練っているんだ。向こうがのこのこ、こっちへ出向いてきた今こそ、おれの秘策を使うチャンスなんだ。しかし、ここじゃない。おれのチャンスは、別の場所にある。まあ、【蒸汽帝国】の軍隊がどう戦うか、お手並み拝見といこうや」

二人の話を聞きつけたのか、タークが険しい表情になって二郎に詰問する。

「お前！ この前の、王宮に忍び込んできた電腦盗賊だな！ これは、お前の策略か？ あやつとお前、どう関係があるのだ？」

二郎は、うんざりした表情になる。

「だから、忠告したじゃないか。公演を中止したほうがいいと。第一――」

二郎の言葉が終わらぬうち、軍隊と巨大化したシャドウの間に激

突が起こった。

エミリーを握りしめたまま、シャドウは大腿で武器を構える軍隊の中に踊り込んだ。爪先で、滅茶苦茶に蹴り上げる。兵士はエミリーに当たらないよう、蒸汽砲を狙わなくてはならず、形勢は圧倒的に不利であった。

二郎はシャドウの背後に渦巻く【ロスト・ワールド】の？門？を見て叫ぶ。

「逃げろっ！ こりゃ、愚図愚図してられないぞ！」

拉致

何事かと、タバサが二郎の視線を追った。

舞台からはみ出てぐるぐると渦を巻いている？門？が、さらに直径を増している。今や天井まで達し、観客席の半分を覆っている。

二郎はタバサと首相の腕を掴み、出口へと走り出した。抗いようのない二郎の腕力に、タバサと首相は否応なしに引っ張られ、出口へと駆け込んだ。

劇場の外、王宮前の広場に飛び出した二郎は、くると振り返って指さした。

「見る！　？門？が……！」

国立蒸汽劇場の建物が、見ている前で奇妙に拉げ始めた！

がっしりとした石造りの建物が内側からの力にへし折れ、柱が、屋根が、見る見る歪んでいく。崩壊の音は全然しなかった。

しん、と静まり返った静寂の中、建物の輪郭は内側へと曲がっていく。

わああっ！　と叫び声を上げ、劇場の出口から、ようやく観客たちが外へと逃げ出していく。その後から、兵士たちも続いていた。くるくると一枚の絵が巻き上げられるかのように、建物は内側へと倒れこんだ。まるで渦巻きに巻き込まれるかのようなだった。

遂に建物は、跡形もなく消滅した。替わりに【ロスト・ワールド】の？門？が、その場に存在していた。

渦を巻いている空間、中心には光り輝く階段が、どこまでも上へと続いている。

階段には、シャドウが立っていた。シャドウは、じろりと首相のタークを睨みつけ、叫んだ。

「ターク首相！ エミリー皇女は、我が【ロスト・ワールド】が頂いた！ 皇女に相応しい玉座を用意し、全？世界？を統括する地位に昇って頂くから、安心しろ！」

タークは怒り心頭に発して叫び返す。

「馬鹿な！ 皇女さまを今すぐ返せ！ 【ロスト・ワールド】へなご、断固として行かせんぞ！」

シャドウは、ただ真っ赤な口を開け、高笑いでタークの叫びに報いただけだった。悠然と背中を見せ、階段を上っていく。

握りしめられたエミリー皇女は、必死になってシャドウの束縛から逃れようと暴れている。だが、まったく無益な試みであった。絶望がエミリーの顔に表れた。

「ターク！ 助けて！」

シャドウは階段の途中、ふっと空中に掻き消えてしまう。最後のエミリーの悲鳴だけが、長々と静寂に響いていた。

ゲルダ少佐

出口から駆けつけた指揮官は、唇を噛み締め、ターク首相に報告する。撥ね上げた面覆いの下顔は、緊張で蒼白に強張っている。

「申し訳ありません！ こちらの武器は、全く効果ありませんでした。もっと強力な武器があれば、と思われるのですが、エミリー皇女さまが囚われている限り、どうしようもなく」

タークは憎々しげに指揮官を睨みつける。

「ええい！ 弁解無用！ お前の名前は？」

さつと指揮官は敬礼して、踵を打ち合わせた。

「帝国軍第一連隊指揮官、ゲルダ少佐であります！」

「よし、ゲルダ少佐。今からエミリー皇女救出のための部隊を編成せよ！ あそこに見える『ロスト・ワールド』の？ 門？ に突入し、万難を排して、シャドウの手から皇女を救出する！ いいか、もう言い訳は許さんからな！」

首相の命令は、却ってゲルダ少佐の顔に希望を昇らせた。かつと頬に赤みが差し、背筋が、ぴん、と伸びた。

「承知致しました！ すぐに全連隊を召集し、精鋭を選抜して救出隊を編成致します。時間は掛かりません」

二郎が割り込む。

「そいつあ、止めたほうがいい……」

わざとだろうが、二郎の口調は至極のんびりとしたものだった。
首相はぎくりと二郎を睨みつけた。

提案

「何？　どういうことだ？」

二郎は肩を竦める。

「あの？　門？　は、見え透いた罠だよ。【ロスト・ワールド】に突入するなら、別の方法が必要だ。おれなら、それを知っているが、さて、聞く気はあるかね？」

二郎の両目は、試すような光を放っている。

タークは唇を震わせ、何か言いかけるが、二郎はおっ被せた。

「この前は、おれの忠告を無視したな。今度も、無視するのかね？」
タークは呟く。

「どうせよ、と言うのだ？」

二郎は顎を上げた。

「エミリーの救出部隊は、おれが召集する！　おれに全面的に任せて貰いたい。だが、あなたの協力も必要だ。あそこに見える【ロスト・ワールド】の？　門？　だが……」

二郎は振り返る。

「あれは、さっきも言ったように、向こうの罠だ。うっかり入り込むと、シャドウの思う壺に嵌る。しかし、おれにとっては絶好の罠でもある。おれに任せれば、皇女を救出した上で【ロスト・ワールド】も始末できる。どうする？　ターク首相」

「うぬぬぬぬ」と首相は呻いた。

逡巡がタークの眉間に深い皺を作り、いつまでも立ち尽くしていた。

円卓

渋々ながら、首相のタークは二郎の言葉に従い、エミリー皇女の救出計画を練るための会議を参集した。

王宮広間の大円卓に、タークを筆頭に帝国軍のゲルダ少佐、二郎、タバサが顔を付き合わせる。タークとゲルダ少佐の間には、将官級の軍人がむつとりと座っている。皆、押し黙り二郎とタバサを疑いの視線で見ている。

残りの席には【蒸汽帝国】開闢に功のあつた最古参市民、ほか様々な階層の長が居並んでいる。タークの隣に座るゲルダ少佐は、会議に出席するため、儀典用の軍装を着込んでいる。

二郎は挑発するように口火を切った。

「この中で【ロスト・ワールド】に足を踏み入れたことのある者は？」

ぐるりと二郎は円卓の顔ぶれを見渡す。二郎の凝視に合い、全員が揃って目を伏せた。

嘲るような笑いが二郎の片頬に浮かぶ。

「いないようだな。では、【ロスト・ワールド】が、どんなところか知っている者は？」

タークは、ぐい、と顔を上げた。

「それなら知っている！ 【ロスト・ワールド】は仮想現実のゴミ

溜めよ！ あちこちの？世界？に勝手に穴を穿って、近づくうつかり者をぱっくりと呑みこむという……。嵌まり込んだ運の悪い間抜けは？ロスト？してしまう……」

喋っているうち段々自信がなくなってきたのか、終わりは至極あやふやな口調になってしまふ。

二郎は「ふん」と鼻を鳴らした。

「どうやら、それくらいしか、判ってはいないようだな。そんなんで、突入部隊を編成しようとしたのかね？ 運良くエミリー皇女を見つけ、救出したとしても、どうやって元の世界へ戻れると思っていたのだ？」

痛烈な二郎の言葉に、皆、言葉もない。横で聞いているタバサは、はらはらしていた。

まるで二郎は、会議をぶち壊すために発言しているみたいだ。

怒り

「劇場でのおれとシャドウの会話を耳にした者がいると思うが、白状すると【ロスト・ワールド】は、おれが作り出した。そう、おれだよ。おれが【ロスト・ワールド】を作り出したんだ！」

怒りがタークとゲルダ少佐の顔を真っ赤に染めた。ぶるぶるとゲルダ少佐の腕が震え、腰に差した軍刀の柄を握り締めている。

今にも刀を抜き放ち、真っ向微塵に二郎に切りつけんばかりの勢いだ。

歯を食い縛り、ゲルダは一言一言を区切るように二郎に話し掛ける。

「それで……あなたは……何を……狙っているの……シャドウとお前の関係は？」

ゲルダ少佐の怒りを無視して、二郎は平板な口調で返事をする。

「おれの目的は【ロスト・ワールド】の正常化だ！ 【ロスト・ワールド】は、おれが作り出した。だから、正常化の責任も、おれにある。エミリー皇女の誘拐というアクシデントがなければ、もっと簡単に行ったのだが。あんたらが折角の忠告を無視したから、おれは厄介な任務を押しつけられた、ということさ！」

最後のセンテンスは、タークに向けられた。

タークはぶい、と横を向く。

「【ロスト・ワールド】がどんな？世界？か知っているかね？ あそこは独特な世界律で存在している。何と、倫理保護規定が、あそこでは存在しないのだ！」

二郎の言葉に、ターク、ゲルダ少佐は、ぎくりと顔を上げた。二人の顔色から血の気が引き、蒼白になっている。

「倫理保護規定が……存在しない？」

タークが繰り返す。二郎は頷いた。

ナイフ

タバサは二郎に囁いた。

「何を言っているの？」

二郎の表情に、タバサはまた自分が馬鹿な質問を仕出かしたことを悟った。が、引っ込んでもらえない。

「教えてよ！」

「しょうがないなあ」

二郎は、うんざりした声になり、身を屈めてブーツに差しているナイフを取り上げる。

「見てろよ」と二郎はタバサの目を見てナイフを握りしめ、空いている左手でタバサの右腕を掴みテーブルに固定した。

「な、何をっ！」

タバサは悲鳴を上げる。

二郎はタバサの悲鳴に取り合わず、いきなりナイフをタバサの右手の甲に突き立てた！

どすっ！ という鈍い音がして、タバサの右手の甲にナイフが突き刺さる。一瞬、ちくりとした痛みを感じる。タバサは思わず目を閉じた。

「見ろ、タバサ」

二郎の声に、タバサは恐る恐る目を開く。

自分の右手にナイフが突き刺さっている。しかし、案じられた血の一滴すら零れていない。痛みすらなかった。

ぐい、と二郎はナイフを引き抜いた。右手の甲には、何の痕跡もなかった。まるで何事も起きなかったかのようだ。

「な？　大丈夫だったろう？」

涼しい顔の二郎に、タバサの胸にむらむらと怒りが湧く。
「あんたって……なんて……！」

怒りの余り、言葉がうまく出てこない。

倫理保護規定

「これが倫理保護規定だ！

仮想現実で、どんなに酷い怪我をしても、苦痛の信号はカットされる。当たり前だ！ 一々、冒険するたびに、本当の痛みを感じていては、誰も仮想現実で好きな行動はできないからな。

しかし【ロスト・ワールド】では、そうはいかない。あそこでは、本当の苦痛が待っている。もし、死ぬほどの怪我や事故を体験したら……」

二郎は言葉を切り、タバサの目を覗きこんだ。タバサは思わず聞き返す。

「どうなるの？」

二郎は、ふつと視線を逸らした。

「判らん！ おれ自身、そんな失敗のないよう用心していたからな。だが、死ぬような苦痛を体験したら、それこそ冗談では済まない心理的なダメージを受けるのではないかな？ 七十二時間という時間制限の前に？ ロスト？ が起きてしまうかもしれない」

真面目な二郎の口調に、タバサは円卓のトーク首相の様子が気になった。

トークは、じつと下唇を噛みしめ、何事か考え込んでいる様子だ。自分一人きりの思考に沈んでいるようである。

ずっしりと重そうな功労賞や、勲章を胸に飾った軍隊の重鎮たちは、ひそひそと何事かお互い囁きあっている。一人がゲルダ少佐の

袖を掴み、何事が指示する。

ゲルダ少佐が二郎に向き直り、口を開く。

「それで……あなたは【ロスト・ワールド】に何度も潜入したと言ったけど、どうして他の人のように、虜囚とならずに帰還できたの？」

二郎は得意そうな笑顔になった。ぽん、と上着のポケットを叩くと、ぴよい、と金属の球体が飛び出す。球体は円卓の真ん中に浮かび、きんきんとした声を発した。

「よろしく！ わたくし、客家二郎さまの助手の、ティンカーです！」

支援

二郎はティンカーに視線を向け、ゲルダに返事をした。

「こいつは、おれの相棒だ。ティンカーは、おれが【パンドラ】を開発したときも、プログラムの主要な部分を構成している。つまり仮想現実のことは、隅から隅まで承知しているってわけさ！ こいつの案内で、おれは【ロスト・ワールド】から元の？世界？への道筋を見つけて出すことができた。だから、無事に？ロスト？も免れたってわけさ！」

ゲルダの視線が厳しいものになった。

「あなたは自分がエミリー皇女の救出部隊を召集するって、言ったわね？」

二郎は頷いた。

「ああ。こいつは、危険な任務だ。おれは、自分が信頼できる仲間しか、連れて行きたくないからな」

ゲルダは怒りを押し殺しているようだ。

「で、あんたが我々にして貰いたい支援とは？」

二郎はティンカーに合図する。

ティンカーの身体の一部がぱっ、と開き、中から一枚のきらきら光る円盤が飛び出した。円盤はふらふらと空中をさ迷い、ゲルダ少佐のテーブルの上にぴたりと着地する。

「そいつは【パンドラ】のバグを修正するプログラム・ディスクだ。おれが【ロスト・ワールド】に潜入して合図を出すから、その時

になったら劇場跡の？門？にディスクを投げ込んでくれ。

恐らくあの？門？は【ロスト・ワールド】の中心部に達しているはずだ。ディスクは向こうの【パンドラ】に真っ直ぐに飛び込み、バグを修正する！

しかし、おれからの合図無しで投げ込んでも何にもならんから、覚えておけよ！」

「それだけ？ それだけが、あたしたちに頼みたいことなの？」

ゲルダ少佐の両手が握り締められる。

ばんっ！ と勢いよくテーブルを叩く。びっくりと二郎以外の全員が飛び上がった。

ゲルダ少佐はぐい、と立ち上がった。

「馬鹿にしないで！ 誘拐されたのは、あたしたちのエミリー皇女なのよ！ その救出任務に、あたしらはあんたを信じて、ぼけっとミツユビナメケモノのように、ただ待っているって言うのね！」

二郎は退屈そうに指の爪を見ながら答える。ゲルダとは目を合わせようとすらない。

「どうしろ、って言うんだ？」

「あたしを救出部隊に参加させなさい！」

ゲルダは上半身を二郎に傾け、燃えるような瞳で睨みつけた。

命令

「いいえ、断ったってムダよ！ あたしは何としても、あんと一緒に【ロスト・ワールド】に潜入させて貰いますからね！ それが、あたしたち【蒸汽帝国】の国民としての義務です！」

ちら、と二郎は目を上げ、ゲルダを見た。ゲルダの両肩は大きく動き、ふーっ、ふーっと大きく息をついている。

「それじゃ、ディスクを投げ入れる役目は誰が引き受けるんだ？」

二郎の言葉に首相が顔を上げた。

「わたしが、その役目を引き受ける」

「はっ」とゲルダが首相を見た。首相は苦い笑いを浮かべた。

「わたしは、年寄りだ。【ロスト・ワールド】に救出部隊の一員として従っていきたい気持ちは山々だが、足手纏いになるのは判りきっているからな。だから【ロスト・ワールド】の？門？を、じーっと見張って、あんたの合図を待っているよ」

最後には二郎に視線を注いで言葉を切る。次いでゲルダに目をやった。

「少佐、君はこの客家二郎とともに救出部隊に参加してくれ！ 皇女のことは頼んだぞ」

少佐は、さっと敬礼した。

「お任せ下さいっ！」

「やれやれ……」

二郎は肩を竦める。

「それじゃ仕方ない。だが、言っておく。向こうに入ったら、おれの指示に絶対服従だということを忘れるな！」

少佐は悔しそうに頬を染めた。二郎は居並ぶ大将、元帥の顔ぶれに話しかけた。

「それから広場の？門？には絶対に人間を入らせるな！ これ以上、ゴタゴタの種を持ち込んで貰っては困るからな」

軍人たちは無言で頷く。どうあっても、二郎とは直接、会話をすることは拒否するつもりらしい。

タバサは二郎に話しかけた。

「あたしも参加するからね！」

二郎は、ぎよつとなつてタバサを見つめた。

「何だと？」

タバサは二郎に向け、笑いかける。

「その少佐と同じ、あたしも何としても皇女さまの救出に加わりたいの。断ったって、ムダよ！」

二郎は両手を上げた。

「勘弁してくれよ……」

真実

会議が散会になると、首相は二郎とタバサに、そつと話し掛けた。

「ちよつと内密の話がある……」

二郎はタークを見つめ、目を細める。

「何だね？」

「エミリー皇女のことについてだ」

タークの目は、真剣だった。

「来てくれないか？ あんたらに、皇女の秘密を明かしたい」

二郎は「どうする？」とタバサを見た。表情に躊躇いが浮かんでいる。

タークは懇願するような口調になった。

「頼む！ どうあつても、聞いてもらいたい」

必死に掻き口説くタークの勢いに、二郎とタバサは王宮を案内された。

タークが二人を案内した先は、王宮の奥深くの、薄暗い廊下を延々と歩かされた一角であった。タークは懐からごつい、古びた鍵束を取り出し、ドアの鍵穴に差した。がちゃがちゃと音を立て、鍵が開けられる。

素早く周りを見て、誰もいないことを確認すると、タークは素早く二郎とタバサを押し込むようにして部屋へと入る。

背後でタークが再び施錠する音が響き、タバサは部屋の中を見渡

した。

「何なの……」と、呆然と呟く。

しゅーっ、しゅーっという単調な音が響いている。部屋の中には医療用のベッドが占領しており、一人の患者が横たわっている。

少女らしい……とはいえ、痩せこけ、ほとんど肉のない手足は骨格が浮き出っていて、まるで骸骨だ。

少女の顔にはマスクが装着され、枯れ枝のような手足には至るところ、医療用のチューブが無数に繋がれている。

ベッドの横には巨大な医療用の器械　人工心肺だろう　が先ほどの単調な音を繰り返し返している。

「誰？　この娘」

「エミリー皇女だ。これが皇女の、真の姿だよ」

絵美

タバサと二郎は同時に「えっ！」と声を上げた。

タークは、じつと病床の少女を見つめる。

「本名は絵美。幼い頃、火事で一酸化炭素中毒になり、一命だけは取りとめた。しかし全身麻痺で、今はこういった人工心肺などの人工臓器で、辛うじて生き永らえている。今、見ているのは、現実世界での映像を、同時にモニターできるよう、こっちに映し出した姿だ。これがエミリーの本当の身体なんだ」

二郎の唇が、細かく震えている。

「それで……この娘の本当の年齢は？」

「十二才だ」

二郎は大きく頭を振った。

「馬鹿な！ 十八才を過ぎなければ、仮想現実接続装置は……」

「知っている」と、タークは頷いた。

「しかし、この娘が歩くことはおろか、寝返りすら打てないまま成長するのを見守るのは、親として忍びなかった……」

二郎は愕然とした表情になる。

「親？ それじゃ、あんたは？」

「そう、わたしはこの娘の実父だ。」

わたしは、あらゆる伝手を使って、仮想現実装置をこの娘に接続できるように手配した。

仮想現実なら、実際の身体が全身麻痺の状態にあっても、分身を使って普通の人間と同じく、歩いたり、あるいは感じたりできる。そのため、仮想現実において絵美のセルフ・イメージを構築し、今では娘の身体に対するセルフ・イメージは、こちらが優先されている。本来の身体は、絵美 いや、今はエミリーと呼ばう の肉体反応を反映するための土台となってしまうている。事故による全身麻痺に陥って、仮想現実接続装置を使い出して十年、エミリーは唯の一度も、現実世界で目覚めたことはないんだ」

「そんな、無茶な……」

二郎はタークの告白に肩を落とした。

「そんなことをしたら……」

タークは暗い眼をした。

「そうさ。そんなことをしたら、神経の接続は、ばらばらになったまま成長してしまう。しかし、それでも構わないと、わたしは思ってたんだ。仮想現実であっても、普通の娘のように歩いたり、走ったり、歌ったりできるからね」

震える両手で、タークは顔を覆う。手の平からくぐもった声が聞こえてくる。

「エミリーが【ロスト・ワールド】で？ロスト？してしまい、接続が強制切断されたときに、いったい何が起きるか……！ 考えたくない！」

仲間

轟々と、蒸気機関車は力強いラッセル音を立てながら鉄路を走る。客車にはタバサ、二郎、ゲルダ少佐が個室に向かい合っていた。少佐は、堪りかねたように口を開いた。

「いい加減、教えてくれてもいいでしょう？　いったい、どういう道筋で【ロスト・ワールド】に向かうつもりなのですか？」

それまで窓外に目をやっていた二郎は、ゲルダ少佐に顔を向けた。いつもの軽薄な調子は影を潜め、表情は固い。

「【ロスト・ワールド】は様々な？世界？に入口を開け、罠を仕掛けて知っていることは知っているな？」

二郎の変貌に気押され、ゲルダは言葉もなく頷いた。

「それらの罠から【ロスト・ワールド】へと向かうつもりだ。【蒸気帝国】に空けられた？門？は中心部に直行するが、それだけ無数の罠が仕掛けられていてと見ていいだろう。それより、何度も潜入したおれにとっては、馴染みのある道筋のほうが安全度は高い。それに、仲間を募らなくてはならないからな」

少佐は眉を寄せた。

「仲間とは、どのような？　何か、特殊な技能を持っているのですか？」

二郎は初めて笑いを見せた。

「そう……だな。確かに、特殊な技能とっていいだろう。何しろ【ロスト・ワールド】は危険な場所だ。いや！むしろ不条理とっていい。そんな場所に向かうのなら、こちらも不条理な連中を従える必要がある」

二郎の言葉は謎めいていた。

プレイヤー

タバサは内心、首を傾げていた。

二郎と知り合ってまだ、二日にしかないが、知れば知るほど判らなくなる。

軽薄そうदैいて、実は慎重だし、大胆でもある。残酷であっても、奇妙に人懐こい。何だか無数の人格が同居しているようである。

列車の速度が落ちてきた。

【蒸汽帝国】の？門？が、ある駅舎に近づいたのである。

窓外に、駅舎のホームが見えてきた。ホームの端に駅員が汽車を迎えて立っている。駅員は機関士と手を振り、挨拶をする。

駅員を見ながら「駅員はNPCなの？」とタバサは呟く。

二郎は首を振った。

「違う。本物のプレイヤーだ。言っていなかったかな？ 【蒸汽帝

国】は鉄道マニアが参加している、という事実を」

タバサは、あんぐりと口を開ける。

「それじゃあ……」

二郎は、にやりと笑い返す。

「そうさ、駅員も機関士も、好きこのんで役目を果たしているんだよ。おそらく【蒸汽帝国】の鉄道員の競争率は、驚くほど高いのじゃないのかな？」

客車からホームに降り立つと、タバサは本来のコスチュームに変

化した。十九世紀のドレスから、肌も顕わな動きやすい服装になる。

タバサは、ほっと溜息をついた。

【蒸汽帝国】で支給されるコスチュームは確かに優雅で、女らしいものだ。でも、やっぱり、このほうが自分らしいと思う。

二郎も初めて出会ったときの姿になる。全く変わらないのは、ゲルダ少佐だけだ。

？世界？

駅舎から？門？をくぐると【大中央駅】である。【大中央駅】には、いつものように無数のプレイヤーが、思い思いのコスチュームを纏い、銘々の目的地を目指して早足に行き交っている。

「こつちだ」

すでに目当ての場所を目指し、二郎は大股に歩き出した。タバサと少佐は慌てて後を追う。

目の前に聳える？門？を見上げ、少佐は驚きの声を上げた。少佐の声には、明らかに疑いの響きがあった。

「二郎さん、本当に、この？世界？でいいのですか？」

タバサはそつと少佐に近寄り、質問する。

「何か問題でもあるの？」

少佐の表情は苦々しい。少佐の視線を追って、タバサも？門？を見上げる。

毒々しい、といっているほど色の氾濫であった。黄色、青、赤の三原色がペンキでぶちまけられたように塗られた？門？には、犬、猫、その他色々な動物のキャラクターが嵌め込まれている。

どのキャラクターも、大幅なデフォルメが施され、陽気そうな笑いを浮かべている。まるで遊園地の入口に見える。

「ここは何ていう？世界？なの？」

タバサの質問に、少佐はさも厭そうに答える。

「スラップ・スティック・タウン」！ 又の名を「ドタバタ・ワールド」という。
（差別用語で発音できない）の町だ！」

少佐の口調は、吐き捨てるようだった。

スラップ・スティック・タウン

？門^{ゲート}？を抜けた途端、目の前に派手なピンク色の車が、壁に激突して、ぺしゃんこになる光景に出くわす。

いや、ぺしゃんこに実際なったのだ。くしゃくしゃと、銀紙を折り曲げたように車体が歪み、ぷしゅーっと車体から白い煙が上がっている。

よろよろと中から運転手らしき、真っ赤な上着に、黄色のズボン。真っ青なシャツと人間信号機のような色合いの、ひよろりと痩せた人物が飛び出した。頭にはおかしな格好の、帽子を被っている。運転手は帽子を耑り取り、忌々しげに地面に叩きつけた。やけくそのように、車体を蹴り上げる。

「おーほっほっほっほっ！」

蹴り上げた足のほうが痛かったらしく、大袈裟に呻いて、ぴよんぴよんとその場で飛び上がっている。

目の前を「かんかんかん！」とベルを鳴らし、消防車が猛然と通りすぎた。消防車には、数十人とも思える消防士が鈴なりになって、必死に車体にしがみついている。

消防車は怖ろしい勢いで急カーブを曲がり、ばらばらと十名ほどが振り落とされる。振り落とされた消防士は、すぐ立ち上がり、慌てて消防車を追いかけた。

「わあああっ！」

悲鳴にタバサが顔を上げると、ビルの屋上から誰かが手足を大字に広げ、落っこちてくるところだった！ 思わず首を竦め、タバサは一步さつと後ろに下がった。

目の前の地面に、人が「ぴしゃんっ！」と大きな音を立て落下した。落下した人物は、地面に平たく、絨毯のようにぺっしゃんこになっってしまう。

足音に、そちらを見ると、数人の救急隊員らしき男たちが、台車に載せたボンベをごろごろと押して駆け寄ってくる。ボンベの腹には「ヘリウム」の文字があった。

救急隊員はボンベのホースの先を地面にぺっしゃんこになった人物の口に咥えさせ、すこすこすこすこと音を立てて気体を送り込む。

ぷーっ、とぺっしゃんこになった人物が膨らみ、元の形を取り戻した。が、救急隊員たちは、ボンベをまだ操作している。遂には落ちた人物は、まん丸に膨らんだまま空中に浮かび上がった。

ぽんっ！ と、口からポンプのホースが取れてしまった！

ぷしゅーっ、と音を立て、人物はその場から風船から空気が脱け出るように空中高く飛び去った！

大騒ぎ

「な、何なの、この騒ぎは？」

タバサの言葉に、二郎は、のんびりとした調子で返事をする。

「これが『スラップ・スティック・タウン』の、いつもの一日さ。今日は、どちらかというと、控えめなほうだな」

タバサはゲルダ少佐を見た。

ゲルダ少佐は、苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

「まったく、その通り！ だから、わたしは来なくなかった。この？世界？は、いつもこんな調子なんです」

三人の立っているのは、二十世紀初頭と思える、アメリカの都市の一角だった。ニューヨークとシカゴ、サンフランシスコを混ぜ合わせたような、と形容すべきか。

地面は舗装されていないが、十階建て以上のビルが延々と立ち並び、歩道には路上販売の屋台が連なっている。

走っている車は明らかにガソリン・エンジン駆動である。あちこちで車が正面衝突したり、先ほどのようにビルの窓から人が降ってくるが、歩行者たちはちらとも関心を示さない。怖ろしいほどの事故でも、当事者は傷一つなく平気な顔で走ったり、滑ったり、ともかくドタバタした騒ぎを続けていた。

ゲルダ少佐は二郎に厳しい顔で話しかけた。

「それで、あなたの言うお仲間ですが、どこにいるんです？」

二郎は指を上げ、道路の向かい側の建物を指差した。看板には「

ココナッツ・ホテル」の文字がある。

「たいていは、このホテルの最上階にいるはずだ。仕事がなければ
な」

横断

ゲルダは不審な顔になる。

「仕事？　こんな？　世界？　で、まともに仕事をしていると仰るのですか？」

二郎は「ぷっ」と吹き出す。

「仕事と言っても、探偵だよ。奴らは、この？　世界？　で、探偵事務所を開いているんだ。もつとも、ここでの探偵だ。世間で言う探偵とは、だいぶ違いがあるがね。さあ、行くぞ！」

二郎は、さつさと道路を渡り始める。

ひゅうーっと風を切って、二郎のぎりぎりを数台の車が駆け抜ける。

ぶつかる！　とタバサは思わず固まった。

しかし二郎は、平気な顔で歩みを止めない。数台の自動車がすぐ真横ぎりぎりを通過するが、二郎はまったく気にも留めない様子だ。

「行きましょう」

ゲルダ少佐は意を決したかのごとく、大股で道路に踏み出した。

タバサも、ちょこちょことした小走りでゲルダに続いた。とり残されるのは厭だ！

猛スピードで道路を車が通り過ぎる。すべて二人のすぐ側をブレーキを掛けることもなく、怖ろしいほどの勢いである。

タバサはゲルダの顔を盗み見た。平気な顔で真っ直ぐ前を見詰めているが、頬にはじつとりと冷や汗を掻いている。

道路の横断には、一生分の時間が掛かったかのようにだった。

スイング・ドア

なんとか渡り終えたタバサは、大きく溜息をついた。

【コナッツ・ホテル】の正面は、回転ドアだった。なぜか二郎は、回転ドアの前で考え込んでいる。

「入らないの？」とタバサが声を掛けると、二郎は無言で頷く。
「ま、度胸試しと行くか！」

なにを大袈裟な……。たかが回転ドアを潜るだけのことに、とタバサは思ったが、二郎の様子は真剣だった。

さつと二郎は回転ドアを押して、中へ入る。

と、ぐるんつと大きくドアが回転して、物凄いスピードで回り始める。

「わああああっ！」

二郎はフード・プロセッサーに巻き込まれたように、猛スピードで回転するドアに挟まれている。ぎゅーんつ、と回転するドアに捕まったまま、二郎の身体が霞む。

ぼんつ、と弾けるような音とともに、二郎の身体が勢いよくホテル内部のロビーに投げ出された。

ぜいぜいぜいつ、と二郎は床にべったり腹這いになって喘いでいた。ゆっくりと立ち上がり、ドアの向こうからタバサを見る。

「何している？ ドアを抜けて来い！」

エレベーター

無表情な二郎の顔を見て、タバサとゲルダは顔を見合わせた。
ゲルダはぐいつ、と眉を上げた。

せえのっ、と二人で呼吸を合わせ、回転ドアに突進する。

「わああああっ！」

「きゃああああっ！」

案の定、二人は猛スピードで回転するドアに捕まってしまった！

ドアのロビーと、外の道路が滲んだようにちらと視界に映り、唐突に二人はドアから弾き出される。べっちやりと、床に腹這いになったタバサは、隣のゲルダ少佐を見た。ゲルダ少佐は不機嫌な表情で立ち上がり、ぱんぱんと音を立てて服の埃を払っている。

ふらふらになって立ち上がったタバサは、二郎に噛みついた。

「何なのよう！ この？世界？はっ！ ドアさえ、まともに開かないの？」

二郎は「へっ」と肩を竦める。

「仕方ない。これが【スラップ・スティック・タウン】の約束事だね。ここに入ったら最後、マンガの登場人物のような出来事に出会うことを覚悟しなくてはならない。ま、これが好きで集まっているプレイヤーもいるから、成立しているんだが」

二郎の視線は、ロビーのエレベーターのドアに向けられている。

「これから最上階に出向かなければならないんだが、さて、どうしたものか？」

タバサも疑い深く、エレベーターのドアを睨んだ。

回転ドアがああ調子じゃ、エレベーターに乗ったら、どんな酷い目に遭わされるか、判ったもんじゃない！

「まあ、階段をえっちらおっちら上ることを考えると、他に手段はないしな……」

諦めたように呟くと、二郎はエレベーターの呼び出しボタンを押した。

ウサギ

エレベーターのドアは、すぐに開く。

「いらっしやいませ！ 何階をご利用ですか？」

エレベーター・ボーイのお仕着せを身につけたウサギが陽気な口調で声を掛けてきた。片手にニンジンを持って、時々かりかりと齧っている。

息を詰め、二郎が中に踏み込む。タバサと少佐も後に続いた。

タバサはしげしげとウサギを見つめた。

マンガの登場人物のような格好をしている。きょろりとした大きな両目に、笑い顔を貼り付かせたような顔つきである。

ウサギはタバサの視線を感じ、ウインクしてきた。

馴れ馴れしいウサギの態度に、タバサは「むっ」となって顔を背ける。

「最上階だ」

二郎の言葉にウサギは「かしこまりました！」と大声で返事をし、エレベーターの操作レバーをぐいと引いた。

「きゃあっ！」

出し抜けにエレベーターはロケットのように上昇する。物凄い加速で、全員の身体がぺっしょんこに縮んでしまう。

がくんっ！ とエレベーターは急停止する。

ぴしゃんっ、と急停止した反動で全員はエレベーターの天井にぶつかってしまう。

からからから……と皿が回転するような音を立て、ぺったんこの全員は床に転がる。

「最上階です……」

ウサギの声がする。ぺったんこのウサギから、大きな両耳がぴよこんと出ている。

ドアが開き、皿のように平べったくなった二郎は、にゅっと足を外に出して、のこのこと歩き出す。

「もう……やんなっちゃう……」

タバサの呟きに、二郎はもごもごとくぐもったような返事を返した。

「我慢しろ。この前こいつに乗ったときは、天井を突き抜け、道路の向かいのビルに突き刺さった。今回は、まともに止まっただけ、めっけものさ！」

「むん！」と二郎は力む。ぴよこり、と二郎の身体が元に戻った。

タバサ、ゲルダも、同じように力んだ。

ぱこん、ぺこん……とブリキ缶のような甲高い音とともに、二人の姿は元に戻る。

「はあっ」とタバサは息を吐き出した。

二郎が目の前のドアを指差した。

「ここだよ」

探偵事務所

【真葛兄弟探偵事務所】と、ドアに金文字で書かれている。

二郎はドアを叩く。

「お入り！」との返事に、二郎はドアを勢い良く開け放った。

「これは、客家二郎！ 珍しき客人であるな！」

入ったところに机があつて、向かい側の椅子に一人の中年男性が座っている。もじやもじやの黒髪を真ん中分けにして、大きな黒縁眼鏡を掛けている。

口元には黒々とした髭があつた。手には太い葉巻。身に着けているのは、黒いスーツに濃い灰色のズボンと、まあ、一見まともな格好である。首許は大きな蝶ネクタイで締めていた。

男は、じろりとタバサとゲルダを見ると、目を輝かせた。

「なんと！ 今日、妙齡のご婦人を、お二人も連れてまいったのか！ いや、感謝！」

びよこんと発条仕掛けのような動作で立ち上がり、尻を後ろに突き出し、前のめりのような奇妙な格好で男は、ささっとタバサの近くに寄ってきた。

「ふうむ、美しいお若い女性に、吾輩いたく感動いたしましたぞ！ さて、お食事でもいかが？」

男の顔を覗きこみ、タバサは気づいた。眼鏡は、レンズが嵌まっ

ていない伊達眼鏡で、口元の髭は、べったりと絵の具を塗りたくったものではないか。

「おいおい」と二郎が割り込んだ。

「入ったすぐにナンパかね？　今日は仕事の話で来たんだ。秋波を送るのは、後にして貰えないか」

「ふむ？」と男は首をかしげ、ひよこひよことした歩き方で元の椅子に戻った。

どっかりと腰を下ろし、両足をデスクに投げ出す。手に持った葉巻を口に咥え、すぱーっと吸い込み、朦々と煙を吐き出す。

「仕事とな？　して、どのような」

「【ロスト・ワールド】だ！　遂に、攻略の時節が来たんだ！」

二郎の言葉に、男は眼鏡の奥の両目を大きく見開いた。

名刺

私立探偵 真葛玄之丞 へげんのじょう
失せ物、探し人、何でも請合います

男はデスクの表面に、トランプのカードを配るように、タバサとゲルダに名刺を投げて寄越した。

名刺の名前を見て、タバサは客家二郎以外にも、日本人名を使うブレイヤーがいるんだと少し感心した。

それでは、目の前の真葛玄之丞と名乗る男は、日本人なのだろうか？ 大きな鼻と、彫りの深い顔立ちは、どこことなくアメリカ人に見えるが。

用意された三脚の椅子に、二郎を真ん中に左右にタバサとゲルダが座る。

「【ロスト・ワールド】とな？ 本気なのか、二郎君」と、やや横を向き、葉巻をふかしながら玄之丞は流し目で二郎を見た。

二郎は真面目な顔で頷く。

「そうだ。【ロスト・ワールド】に出かける約束は、忘れていないだろうね」

「忘れてはおらん！ おらんが、吾輩は忙しいのだ！ 今週も、ヨーロッパのさる公国から仕事の依頼があつてね、出かけなくてはならん！」

玄之丞は嘯く。

二郎は、すぐ反撃した。

「嘘つけ！ あんたの腹は読めているぜ。臆病風に吹かれたのか？」

ばん、と玄之丞はデスクを叩く。

「失礼千万！ 無礼にもほどがある！ 吾輩が臆病風とは！ 取り消せ！」

髪を振り乱し、玄之丞は両手をデスクについて、ぐいっと顔を突き出した。

二郎は顎を上げ、「けっ」と短く笑う。

「取り消すよ。あんたが一緒に【ロスト・ワールド】に付き合ってたならね！」

「ふうむ」と玄之丞は椅子に再び座りなおし、短くなった葉巻を灰皿に押しつけるようにして消した。

もう一本、胸ポケットから取り出して、口に咥える。

消火器

デスクの下からガス・バーナーを取り出し、「ぱんっ」と音を立てて点火すると、青い炎を葉巻に近づける。

葉巻はバーナーの熱で一気に燃え上がった。

「あっちちちち！」

燃え上がった葉巻を口から離し、玄之丞は悲鳴を上げた。

転がったガス・バーナーの炎が絨毯に燃え上がり、あたり一面ぼぼぼと瞬時に火の海になる。

玄之丞は叫んだ。

「火事だ！ 火事だ！ 消火器を！」

「火事だって？」

部屋の奥からドアを開け、もう一人の人物が姿を表した。

ぎょろりとした大きな目にグレーの上下。頭にはなんとも形容のしようのない、妙な帽子を被っている。手には消火器を抱えていた。その場の惨禍を見てとり、男は消火器のホースを向けて消火液を噴出させる。

あっという間に、火事は消し止められた。

しかし噴出した消火液で、玄之丞は頭の上から爪先まで真っ白になってしまう。

玄之丞を見て、男は溜息をついた。

「兄貴、葉巻に火を点けるときは、マッチで充分だといつも言っているだろう?」

玄之丞から目を離し、男は二郎を見て驚きの色を見せた。

「客家二郎! 珍しい客人もいるもんだ」

「久しぶり、知里^{ちりあ}夫君」

二郎は、にこやかな挨拶をする。

知里夫と呼ばれた男は左右のタバサとゲルダに目をとめる。
鋭い視線。油断のなさそうな、にたにた笑いが顔に浮かんだ。

鼾

タバサは二郎に囁いた。

「今、兄貴って、あの人が言ったわね。ということは、兄弟？」

「そうさ。真葛三兄弟というのが、おれの連れて行きたい仲間なんだ」

二郎はタバサに顔を向けず、囁き返した。

「三兄弟？ それじゃ、もう一人いるの？」

「そうだ……おい、玄之丞。晴彦はどうしたね？ 三人が揃ったところで仕事の話をしたいんだが」

ようやく白い消火液を振り落とし、玄之丞は顔を上げた。

「晴彦！ そう言えば、姿を見ないな。おい、知里夫。あいつはどこだ？」

「知らねえ」と知里夫は肩を竦める。

玄之丞は「むっ」となる。

「こんなときに、あいつは……。おい！ 晴彦！ どこにいる！」

ぐおおおっ……。

まるで返事のように、鼾いびきの音が聞こえてきた。玄之丞は、にっこりとなった。

「おるわい。この部屋のどこかに隠れておる！ さあ、どこにいる？」

にやりと笑いを浮かべ、玄之丞はぎろりと部屋の中を見渡した。すぐさま玄之丞の目が鋭く、部屋の隅にある洋箏筥に向かった。ぴよこぴよこと歩いていくと、耳を押し当てる。

ばたんっ、と箏筥の扉を開くと、中からコートを纏った、もじやもじやの金髪の男がころりと転がり出る。

ばたん、と腹這いになり、それでも「ごおおっ」と盛大に鼾を掻いている。

「晴彦！ 寝てないで起きろ！ こら！」

玄之丞が靴の先で蹴るが、晴彦と呼ばれた男はまるで木偶でくの坊のように寝っ転がったまま鼾を掻きつづけた。

玄之丞は頭をくしゃくしゃと猛烈な勢いで掻き毟った。

バケツ

晴彦は、一向に目を覚まそうとしない。

揺すぶろうが、蹴り上げようが、お構い一切なしに、鼾を盛大に上げている。

玄之丞は苛々して、隣でにたにた笑いを浮かべている知里夫に叫んだ。

「知里夫！ 水を持ってこい！ コップじゃないぞ、バケツで持ってくるんだ！」

「へいへい」

気のない返事をして、知里夫は部屋から出てくると、すぐ手にブリキのバケツを提げて戻ってきた。

玄之丞の顔を見る。

「やれ！」と玄之丞は短く命令する。

知里夫は頷き、バケツを持ち上げぶちまける。

ばしゃっ！

バケツの水はまともに晴彦の頭から注ぎ込まれる。

「ごおおおっ……！」

相変わらずの鼾。玄之丞は地団太を踏んだ。

「糞っ！ こいつは一旦こうなったら、絶対に目を覚まさん！ まったく、頑固な三年……いや、百年寝太郎だわい！」

諦めたのか、椅子に座ると葉巻を口に咥え、二郎に話し掛ける。

「仕方ない、話を続けようか？」

知里夫は自分用に椅子を引いてくると、背もたれを抱える逆向きの格好で座り込んだ。

二郎は晴彦を見て「いいのか？」と玄之丞に確かめた。玄之丞は頷いた。

「構わん！ どうせ、起きていても聞いちゃいないんだ。それで『ロスト・ワールド』攻略の時節が来たと言ってたな。どっという訳だ？」

計画

二郎は【蒸汽帝国】での顛末を手短に話した。
玄之丞の目が、ぱつちりと見開かれた。

「なんと！ つまり【ロスト・ワールド】のほうから、他の？世界？に接触したと言うのだな？ シャドウは何を狙っている？」

二郎は顎を引き、真面目な表情になる。

「おそらく……他の？世界？を自分の？世界？に融合させるつもりだろう。」

手始めに【蒸汽帝国】の？世界？律を変化させ【ロスト・ワールド】化させるつもりだ。

シャドウは【パンドラ】の初期バージョンを握っている。一旦？世界？を取り込んでしまえば、それきり【蒸汽帝国】は【ロスト・ワールド】の一部になってしまう。

最終的には【大中央駅】の支配さ。そうなったら、仮想現実における総ての？世界？がシャドウの思いのままだ」

玄之丞は、すぱーり、すぱーりと葉巻をふかしながら真剣な顔つきになった。

「しかし、なぜ選りに選って、今だ？ この十年、シャドウは、なぜ行動しなかった？」

二郎は肩を竦めた。

「【ロスト・ワールド】が、まだそれほど成長していなかったからだ。」

他の？世界？に罫を仕掛けるくらいが関の山だった。しかし、罫のお陰でプレイヤーを多数こっそり捕えることができ、プレイヤーの持っている【ハビタット】を吸収して？世界？を成長させた。時節到来とシャドウは考えたのだろう。

だが！」

二郎は芝居がかった仕草で、指を一本立てて見せる。

「【蒸汽帝国】に？門？を作り出したことにより、おれのチャンスが高まった。

今までは潜入しても脱出ルートを確保できず、周辺部を探索するのが精一杯だった。

だが、あの？門？のおかげで、一番の重要な問題を解消できる。

真っ直ぐ中心部に達し、目的を果たしたら、すぐさま【蒸汽帝国】に空けられた？門？から脱出できるからな」

握手

玄之丞の瞳が爛々と輝き出す。

二本、三本と立て続けに葉巻を咥え、もくもくと紫煙を吐き出した。タバサは玄之丞の葉巻が、まるで臭くないのに気付く。

ああ、そうかと、ほどなく合点する。

ここは仮想現実なのだ。煙草を喫っても、煙は現実のものではない。だから、厭な匂いもまったくないし、吸い込んでも平気である。

二郎は、からかうような目つきになった。

「どうするね、玄之丞さん。あんただって、興味があるんじゃないのか？」

玄之丞は用心深そうな表情になる。反り返り、両手を頭の後ろに回した。

「そりゃあ　まあ、な。【ロスト・ワールド】には、大変なお宝が眠っている、ってえ話だからな」

思わずタバサは「お宝？」と口を挟んだ。

ぎろり、と玄之丞は鋭い目付きでタバサを見る。が、すぐ笑顔になって身を乗り出し、話し掛けた。

「そうともお嬢さん。【ロスト・ワールド】には、大変な値打ちのお宝があるんだよ」

隣で座っていた知里夫が、もじもじと身動きをする。

「あくまで噂、だろう？　兄貴。うかうか、こいつらの話に乗れる

のか？」

ぱん、と玄之丞は自分の膝を叩く。

「乗ってみるのも悪くはないさ！ こいつは、吾輩にもチャンスかもしれない！」

知里夫は肩を竦める。

「ご勝手に！ おれは知らんよ」

玄之丞は、びつくりした顔で弟を睨む。

「なんだ、お前は同行するんじゃないのか？」

知里夫は、にたにた笑いを浮かべた。

「そんなこたあ、ねえよ。お宝どうのこうのは眉唾もんだ。でも【ロスト・ワールド】にや、興味がある。ここより、もっとハチャメチャな？世界？だって話じゃないか？」

「成る程な」と頷き、玄之丞はさつと右腕を二郎に向けた。

「吾輩、貴殿と行動を共にすることを、ここに確約するぞ！」

二郎と玄之丞は固い握手を交わす。

時計

その時、壁に架けられた鳩鳴き時計が時を告げた。

ぼつぽー……と鳴り響いた途端に、それまで寝っころがっていた晴彦が、ぴょん、と一挙動で立ち上がる。

あーあ……！ と長々と伸びをした。

玄之丞は振り返り、目を丸くした。

「なんだ、晴彦。起きたのか？」

晴彦は「ふあああ」とばかりに口に手を当て、頷く。子供のような笑みを浮かべていた。

「おい、晴彦。この客家二郎は知っているな。これから【ロスト・ワールド】に向かうぞ！ 準備しろ！」

「うん」と晴彦は頷くと、壁に架かっていた鳩鳴き時計を外して、コートの中へ捻じ込んだ。

玄之丞は呆れた声を上げた。

「なんだ、そんなもの持って行って、どうするつもりだ？」

晴彦は両手を合わせ、頬に当てると顔を傾け、目を閉じた。

「眠るのか？」

玄之丞の問い掛けにっこりして、指で丸を作る。鳩鳴き時計の

鳩の仕草で、口を尖がらせる。

「なーる、ほど！ 目覚まし時計が必要だ、ということか！」
玄之丞が大声を上げると「うんうん！」と何度も頷いた。

「勝手にしろ！」と玄之丞は肩を竦める。

晴彦は、にこにことした笑みを浮かべ、タバサに近寄ると、いきなり顔を近づけた。

ハープ

タバサは驚き、思わず身を引いた。

「な、何？」

相変わらず笑みを浮かべつつ、晴彦はコートから巨大なハープを引っ張り出した。

タバサはびつくりした。こんなもの、どこにどうやって隠していたんだろう……。

ああ、そうか！　ここは仮想現実だった！

きつと晴彦のコートは　えもんのN次元ポケットと同じなんだ。

ハープを前に、晴彦は気取った仕草で両手を構える。

ぼろろん……。

晴彦の指が、ハープの弦を掻き鳴らす。意外と晴彦の腕前はプロはだして、本格的だった。

しばらく晴彦のハープの演奏が続き、ついタバサは、うっとりとして聞き惚れてしまう。

晴彦のコンサートが終了し、タバサは思わずぱちと拍手する。晴彦は深々とお辞儀をして、ハープを元通りコートに納めた。

「へっ！」と知里夫は笑う。

にやにや笑いを浮かべ、玄之丞は口を開く。

「こう見えても、知里夫はピアノの名手でね。晴彦のハープと、い

い勝負をするよ」

「へえ……」と感心したタバサは、知里夫に声を掛けた。
「ねえ、知里夫さんも、なんかやってよ！」

知里夫はそっぽを向き、氣取った口調で返事する。

「後でな。天才は忘れた頃にやってくる……ってね！」

玄之丞は立ち上がった。

「それでは、これより『ロスト・ワールド』に向かうとするか！
二郎も立ち上がった。

「いよいよ、シャドウと対決だな！ 気を緩めるなよ」

二郎の言葉に玄之丞は眉を上げて返事した。

「それとも吾輩がカモである、かもな。やれ行けや、カモが飛び込むネギ畑。向こうで、けだもの組合でも始めるか！」

訳の判らないことを呟いて、事務所のドアを開いた。

瓦礫

がらがらと瓦礫の中からタバサは身体を引っこ抜き、ぺっぺと口に入った砂利を吐き出して、文句を垂れる。

「もう！　なんで、ともにエレベーターは上がった、下がった
りできないのよっ！」

玄之丞の事務所からエレベーターに乗って降りようとして、今度
は下ではなく、横にエレベーターは吹っ飛んだのである。

エレベーターはホテルの壁を突き抜け、道路の反対側の建物に突
っ込んだ。

後から二郎も這い出し、慰めるように声を掛けてきた。

「あの回転ドアを、もう一度、潜ることを考えたら、まだマシじゃ
ないか！」

二郎の後からゲルダ少佐も不機嫌な顔つきで這い出す。

ゲルダの不機嫌な表情は、【スラップ・スティック・タウン】に
到着してから、まるで貼りついたように変わらない。

二郎の言葉に、ゲルダは「まったく」と短く感想を述べて、服の
破れ綻びがないか丁寧に確認している。

「知里夫、晴彦！　無事かね？」

埃で真っ白になった玄之丞が、それでもしっかりと口に葉巻を啜
えつつ這い出した。

ぼこり、と瓦礫の山が動き、知里夫が顔を突き出す。「ふーっ」と大きく息を吐き出し、それでも慣れているのか、平気な顔で立ち上がる。

しばらく、ぱたぱたと、皆の服の埃を払う音が続いた。

玄之丞は辺りを、きよろきよろと見回した。

「おい、晴彦はどうした？」

知里夫は肩を竦める。

「知らねえ……どっか、その辺に埋もれているんじゃないのか？」

鳩

玄之丞と一緒に瓦礫の山を探していたタバサは、建物の破片の間から大きなドタ靴が二つ、空を向いているのに気付く。

玄之丞の袖を引っ張り、指さした。

「玄之丞さん、あれ！」

「おお！ 晴彦の靴に違いない！」

玄之丞は大きく目を見開き、同意した。

「タバサさん、手伝ってくれんかな？」

片方の足を持ち上げ、玄之丞はタバサに声を掛けた。
タバサは頷き、もう片方の足を両手で掴む。

「では、引っかくぞ！ せえの！」

気を揃え、二人は全身の力を込め、晴彦の両足を引っ張った！
ずるずると晴彦の身体が破片の中から引き出される。晴彦はタバサの顔を見上げ、目をぱちくりとさせた。

「大丈夫か？」

玄之丞は心配そうに声を掛けるが、晴彦はぴよんと真っ直ぐに身体を突っ張らせたまま立ち上がる。ぴよん、ぴよんと元気に飛び跳ねて見せた。

ぽっぽー！

鳩鳴き時計の音がして、ぴょんと晴彦の口の中から鳩が飛び出す。慌てて晴彦は自分の口を両手で押さえる。

ぽっぽー！

今度は両耳から鳩が飛び出す。

晴彦は両耳を押さえる。

すると口から、口を押さえると耳から。晴彦の顔が真赤に染まり、口と耳を交互に押さえる動作が繰り返された。

「いい加減にしろ！」

ばかり、と玄之丞が晴彦の頭を殴りつけた。

鳩は飛び出さなくなった。

晴彦は、ほっと安堵の溜息をついて、にこにこ笑みを浮かべた。

「それじゃ、行くぞ！」

騒ぎにまるで動じる気配もなく、二郎は歩き出す。

看板

ぞろぞろと、全員がカルガモの親子状態になって、町を歩き出す。玄之丞が二郎にせかせかと追いついて、話し掛けた。

「おいおい、ところで、どうやって【ロスト・ワールド】へ吾輩たちを連れて行くのだね？ まさか【ロスト・ワールド】はこっちです、なんて看板が出ている訳あるまい？」

二郎は、ぴたりと立ち止まった。顔を上げ、指さし、涼しい顔で答える。

「ところが出ているんだな、これが」

ロスト・ワールド入口

でっかく、周りにネオン・サインと電飾を散りばめた、十キロ先からでもはつきりと判る派手な看板がおっ立っている。その場にいる住民たちも、思わず立ち止まって見上げていた。

玄之丞は、あんぐりと口を開ける。

だけではない、二郎を除いた全員が、ぽかりと大口を開け、呆けたようになって看板を見上げていた。

「こんなもの、いつできた？」

髪の毛をくしゃくしゃと掻き回し、玄之丞は大声を上げた。
ぼん、と二郎のポケットから金属球が飛び出した。

二郎の相棒、ティンカーである。

「この看板が出現したのは、正確に三分十四秒前のことです！」

きんきんとした甲高い声に、玄之丞は目を丸くする。両腕を振り
回し、二郎に食ってかかった。

「どういうことだ？ 吾輩が判るように説明して貰おう！」

「【ロスト・ワールド】が本格的な活動を開始した、ということさ。
いよいよシャドウの奴、あらゆる？世界？のプレイヤーを根こそぎ
自分の？世界？へ引つ攫うつもりだ！」

二郎は冷静に返事する。

水をぶっかけられたかのごとく、玄之丞はばたんと両腕を下ろし
た。

ゲルダは一步ずつと前へ出て、疑いの声を上げた。

「でも、うかうかと【ロスト・ワールド】の誘いの手に乗る馬鹿者
がいるとは思えません」

ドア

言ってる端から、一人の住民がふらふらと前を横切る。
看板に近づき、ぼけつとした表情で見上げる。

なぜか西部劇から脱け出たような扮装をしていた。幅広のテンガロン・ハット。明るい茶色のシャツプス（乗馬用の前覆い）。歩くたびに、踵の拍車が、かちゃかちゃと軽薄な音を立てていた。

平原児はハットを持ち上げ、にやりと笑った。

看板の下には、一枚のドアがあった。何の変哲も無い、木の板でできている。ドアには金色のノブが突き出していた。

「面白そうだなあ……おら、一度【ロスト・ワールド】ちゅうところへ行きたいと思っていただよ！」

ぐいつと手を伸ばし、ノブを握りしめる。

「やめろ、おい！」

二郎が慌てて一歩前へ出たが、すでに遅かった。カウボーイは、さつさとドアを潜り抜け、中へと踏み込んでいた。

ぱたり、とドアが閉まった。

ひひーん！ と馬の嘶き。ついで「タリイ・ホウ！」という男の怒鳴り声。

ぱかつ、ぱかつと蹄の音がして遠ざかる。

全員が毒気を抜かれたかのような顔を見合わせた。

玄之丞が二郎に向け、決意した口調で声を掛けた。

「行くか？」

二郎は、ゆつくりと頷く。

「向こうのお招きとあればね……」

ゲルダが逡巡を振り払うように叫んだ。

「エミリー皇女が助けを求めています！ 行かなければなりません！」

拗ねた顔つきで知里夫が「へっ」と笑った。

「こりゃ、おっそろしく楽しめそうだ！」

二郎はタバサを振り返る。

「タバサ！ これが最後のチャンスだぞ。【ロスト・ワールド】に足を踏み入れたら、もう行くところまで行くしかないんだぞ。戻れるのは、今だけだ」

タバサは唇を噛みしめる。気付くと、自分の手の平がじつとりと汗ばんでいる。

怖くない！ 怖く……ないったら！

と、すたすたという足音がして、タバサの横を晴彦がのんびりとした顔つきのまま、ドアに歩いていく。

何の躊躇いもなく、晴彦はドアを開けた。

「晴彦さん！」

タバサが呼び掛けると、晴彦は「にこっ」と笑顔になった。

そのまま平気な顔で、足を踏み入れる。

「待って！」と、思わずタバサは追いかけた。

たった一歩。それだけでタバサは【ロスト・ワールド】に踏み入
れてしまっていた。

【ロスト・ワールド】

あたしって、馬鹿？

タバサは自分の頭をこつん、と叩く。思わず飛び出してしまったが、まったく何も考えていなかった自分の間抜けさに、つくづく愛想が尽きた。

ここが【ロスト・ワールド】なのか……。ここが？

どこにでもありそうな、何の変哲もない住宅街が、一面に広がっている。電柱、舗装路、どこまでも続いている平凡極まりない建売住宅の列。

仮想現実から目覚め、現実世界で外へ出たら、こんな風景に出くわしそうだ。

空を見上げると、すこーんと抜けるような青空が高く、白い雲が数個のんびりと浮かんでいる。

横に晴彦が、ぼんやりとした表情で立ち尽くしている。ちょっと小首をかしげ、自分が立っている場所を確認している様子だ。

タバサは晴彦に話し掛けた。

「ここが【ロスト・ワールド】なの？　とても、そうは見えないわね」

晴彦はタバサに顔を向け、笑顔になる。相変わらず、子供のよう
な邪気の無い笑顔だ。

「こりゃまた、何と云うことだ！」

出し抜けに背後から声が聞こえてきた。玄之丞の喚き声だ。

玄之丞は、すばすばと葉巻をふかしながら、油断無さそうな目付きで、じろじろと辺りを見回している。

玄之丞の背後から知里夫も現れる。何も無い空間から、ぽんと飛び出す。

ドアは見えない。つまりは、あのドアは一方通行なのだろう。入口だけで、出口なしということだ。

書き割り

最後に二郎と、ゲルダ少佐が並んで出現した。

二郎はタバサを見て、呆れたような顔つきになった。

「やれやれ、あれほど考えるよう忠告したんだが、まるで無視かね？　これだから、初心者は怖い……」

タバサは、かつとなって二郎に食って掛かる。

「ここが【ロスト・ワールド】なの？　全然、そうは見えないけど。それに、あたしは子供じゃないのよ。自分がしたことくらい、判っています！」

二郎は冷静に頷いた。

「ああ、間違いなくここは【ロスト・ワールド】だ。自分がしたことを判っていると言ひ張るのなら、それでいい」

冷やかかといつていい二郎の口調に、タバサの激昂は、しおしおと萎んでしまう。

「全然、危険でも何でもないように見えるわね……」

呟きながら、手近の住宅に近づく。二郎は素早くタバサの腕を掴み、引き寄せた。

「危ないっ！　自分のしていることが、判っているのか？」

「え？」とタバサは二郎を振り返る。二郎の顔は真剣であった。一つ頷くと、二郎は「見ていろ！」と叫び、いきなり立ち並ぶ住

宅の塀に蹴りを入れる。

ばたん！

二郎の蹴りが入ったブロック塀は、まるで芝居の書き割りの安物大道具のごとく、呆気なく倒れこむ。

ぱた、ぱたん、ぱたぱたぱたっ！

塀が倒れこんだ住宅も、ドミノ倒しの要領で、次々に倒れていく。それは、まったく書き割りの平面的な形だった。

擬態

知里夫の瞳が輝いた。

「面白え！」

叫ぶと、反対側の住宅に飛び蹴りを食らわす。

ばたん、ばた、ばたばたつ！

反対側も、まったく同じように呆気なく倒れていく。
あつという間に、辺りは倒れこんだ住宅の書き割りで埋まった。

二郎はナイフを手にとった。

空を見上げ、腕を引いて全身の力を込め、真っ直ぐ上へと投げ上げる。二郎の投げ上げたナイフは、ロケットが上昇するがごとく、ずんずんと高度を上げていく。

と、ナイフの先端がぶすり、と何かに突き刺さった。

びりびりびりっ！

ナイフは空を、布地のように切り裂いていく！

瞬く間に、空中に一つの切れ目ができていく。切れ目からは、毒々しい真っ赤な空に、どんよりと漂うグリーンの雲が覗いた。

ぎええええっ！

どこかで苦悶そのものといった、怖ろしい悲鳴が上がった。

ぴょこん、とそれまで地面に倒れこんでいた書き割りが一斉に立ち上がる。

ざあああつ！ と、書き割りは空中に飛び上がり、猛烈な風を巻き起こした。飛び上がると、くるくると空中で旋回し、蚊柱のように一本の竜巻となって浮かぶ。

一方、切り裂かれた空は、さらに切れ目を広げながら、地平線の彼方に消えていく。後には、厭らしい真っ赤な空と、腐ったような緑色の雲が残るだけ。

「い、今のは……何っ？」

ようやく、タバサは息を吐き出し、言葉を押し出した。驚愕に、全身がこちん、こちんに固まっている。

「擬態だ。現実世界の町そっくりに擬態し、プレイヤーという獲物を待ち受けていたんだ。あのまま君がぼけーっ、と家に足を踏み入れていたなら、ぱくつと一飲みにされていたはずだぜ！」

二郎は「ふっ」と指先で額の汗を拭った。

生態系

タバサは絶句し、ぱくぱくと口を動かし、やっとのことで言葉を発した。

「それじゃ、それじゃ……あれは生き物だったの？　一飲みにするって、何のために？」

「君の？　ハビタット？　を吸収するために、そして君の分身のデータベルソナを横取りするためにさ！　いや、融合するためかな？　ここでは食うものも、食われるものも同じなんだ。あれを見る！」

二郎が指差した方向を見ると、はるか彼方のごつごつとした丘に、一人の人物が立っている。幅広のテンガロン・ハット。

あのカウボーイだ！

しかしタバサは、カウボーイの姿が、奇妙に変形していることを認めた。

上半身は元のままだが、下半身は馬の両足になっている。尻からはぱたぱたと動く、馬の尻尾が突き出していた。さらに、腰のあたりから、馬の首が前方に突き出していた。

ひひーん！　馬の首が、高く嘶いた！

ぱしんっ！　と、カウボーイは自分の尻を叩くと、ぴょんと前へ飛び出す。二本の馬の足が地面を踏みしめ、蹄がぱからっ！　ぱからっ！　と、音を立てた。

ぱかぱかとカウボーイは、タバサのほうへ近づいてくる。満面に笑みを湛え、ひどく満ち足りた様子である。

並足になって近づいたカウボーイは、ハットを指先で撥ね上げ、にやつと笑いかけた。

「ここが【ロスト・ワールド】けえ！ まんず、おらにとっては、ええ場所だなあ！ おら、ずっと人馬一体になることを夢見てただよ！ その望みが叶って、満足だあ！」

言葉どおり、カウボーイの顔には、充足した表情が溢れんばかりに現れている。

ひひーんっ！

遠くから同じような馬の嘶きが聞こえてきた。声の方向を見ると、二本足の馬が数十頭、群れを成して丘を駆けている。カウボーイは、そわそわとし始めた。

「ありや！ 仲間が呼んでいるだあよ！ おら、急がなくてはならねえっ！ ほんじゃ、どちらさんも、御機嫌よう……」

ぱかぱかと蹄を鳴らし、群れの中へ戻っていく。

「ああいうのも、いる。ここの暮らしに満足する連中も、少数だが、いるんだ……」

二郎の解説に、全員ぼけつと、言葉もなく立ち尽くしていた。

「でも？ ロスト？ するんでしょう？ 記憶をなくして……。自分が

【ロスト・ワールド】に入り込んだことも憶えていないんでしょう？」

タバサは苦々しげな口調になって尋ねる。二郎はしょっぱい顔つきになって頷いた。

「まあな。ここには？ ロスト？ したプレイヤーが、うようよ徘徊し

ているよ。だから気をつけろ、と注意したんだ」

二郎の言葉に、皆、肅然となった。

ゲルダだけは背を真つ直ぐ伸ばし、厳しい顔つきになった。

「それで……シャドウは、どこにいますのです？ 我々はシャドウを見つけないければ！」

ゲルダ少佐の表情には、使命感が溢れている。

二郎は頷き、歩き出す。

「こつちだ……。【ロスト・ワールド】の地理が変わっていないければ、シャドウの住む本拠地は、こつちの方向にあるはずだ」

そろそろと二郎の後に続き、全員が一斉に歩き出した。

タバサは二郎に追いつき、話し掛ける。

「地理が変わっていないければ、ってどういう意味？」

二郎は、にやっと笑った。

「まあな。ここじゃ、地理が変化することは、しょっちゅうだよ。聳えている山脈が、次の日にぱっと消えている、なんてことは珍しくも何ともない」

答える二郎の歩みは自信に満ち、力強かった。

エミリーの怒り

「帰して下さい！　わたしを【蒸汽帝国】へ、早く帰して！」

毅然とした表情で、エミリー皇女はシャドウに向かって言い放つ。言葉は願い出るものだが、口調は完全に命令する者の威厳に満ちていた。

真っ直ぐ背を伸ばして立ったエミリーは、軽く前で両手を組み合わせ、瞬きもせずシャドウを見つめている。

シャドウは「ふ……」と薄く笑う。

皇女を引つ攫い、自分の本拠地に連れてきてから、微塵も怖れる様子は見せなかった。

多分、強がりのはずだ。本当は「わっ！」とばかりに泣き叫びたいはずなのだが、必死に耐えているのは可憐である。

「そうは、いかん」

シャドウの返答に、エミリーの眉が微かに寄せられた。軽く首を振ると、柔らかな金髪の巻き毛が揺れる。

「なぜ、わたくしを攫ったりしたのです？　あなたに、何の得があるのです？」

シャドウは無言で窓の外を覗きこんだ。

【ロスト・ワールド】の、奇妙な風景が一望に広がっている。

シャドウがだんまりを決め込んでいるので苛々したのか、エミリー

「は一步さつと前へ踏み込むと」「たん!」と床を踏みしめた。

「返事をなさい! わたくしの下問に、すぐ答えるのです!」

質問

シャドウは、ゆっくりとエミリーに顔を向けた。シャドウの凝視に、エミリーの頬がすつと青白くなる。

「下問……ね。おれは、あんたの家来ではないよ」

ぶるぶるとエミリーの唇が小刻みに震えた。

わざとエミリーに向け、シャドウは飛び切りの悪魔的な笑みを浮かべる。唇の両端に、にゅっ、と白い犬歯が覗いているのを、シャドウは自覚している。

シャドウは思い入れたっぷりにエミリーを見つめ返すと、肩を竦める。

「が、ご下問なら返答しよう。おれは、あんたを【ロスト・ワールド】の女王として迎え入れたいのだ！」

エミリーの顔が怒りに赤く染まった。

「馬鹿なことを仰い！ なぜ、わたくしが、そなたの【ロスト・ワールド】にて、そのような地位に昇らなければならないのです？」

ずい、とシャドウは一步エミリーに近づく。

「はっ！」と驚きにエミリーは引き下がった。

もう一步。エミリーは、さらに下がる。

とうとうエミリーは壁に押し付けられたも同然の格好になる。シャドウは近々と自分の顔を寄せ、エミリーの大きな瞳を覗きこんだ。

まん丸に見開かれたエミリーの瞳孔は大きく開き、真つ青な瞳にはシャドウの顔が、はつきりと映し出されている。

とつくりとエミリーの恐怖に引き攣った表情を眺め、即座にシャドウは身を引いた。

「なぜなら、あんたこそが、仮想現実世界の女王に相応しい女だからだ！ あんたは覚えているかね？」

話題の変化に追いついていけないと見え、エミリーは童女のような表情を浮かべる。

「何を憶えている、と仰るの？」

「子供の頃の思い出だ。まだ幼い頃の自分だ！ 憶えているかね？ あんたの両親、兄弟姉妹、なんでもいい。子供の頃の思い出を憶えているか？」

わくわくとエミリーの唇が震え始めた。目がきよときよとと、落ちつかなげに辺りを彷徨う。息が掛かるほどの距離にシャドウは顔を近づける。

「憶えていないかね？ エミリー。君は何歳なんだ？」

エミリーの両目が「えっ？」と虚ろになった。

記憶

「君は幾つだ？ 答えてみる！」

シャドウの詰問に、エミリーは両手を挙げ、顔を覆う。
ぶるぶると激しく首を振る。

すつ、とシャドウは身を引いた。

「十年前、君は【蒸汽帝国】に華々しく登場した。すると、普通なら君は二十八歳になっているはずだ。仮想現実接続装置は、満十八歳にならないと使用を許可されないからな。それ以前の記憶で、何か憶えているのはないかね？」

がくり、とエミリーは膝を折った。すんと腰が抜け、床にべったりと座り込む。顔を覆ったまま、嚙り泣いた。

「わたし……わたし……！ 判らない、判らないのよう……！」

シャドウは両腕を後ろに組み、諭すように話し掛けた。

「無理もない。君は【蒸汽帝国】で生き始めてから、唯の一度たりとも、現実世界で目覚めたことはないのだ。君は、ずっと夢の中で生きているのだ。完璧な仮想現実の女！ それこそが、君だ！」

シャドウは決め付け、指を突きつける。エミリーは顔を上げ、まじまじとシャドウの顔を見上げた。

「あなたは、あたしの何を知っているの？」

「何もかもだ！ おれは、全仮想現実のあらゆる？世界？にスパイを放っている。君の存在を知ってから、おれは、いずれ全？世界？

を支配した後、君を真の玉座に座らせることを夢見てきた。君こそ、
仮想現実で女王になるに相応しい女だからだ！」

シャドウを見上げるエミリーの目には、何事か考え込んでいる表情が現れている。

元帥

メシヤム
海泡石のパイプを吸い付けたガント元帥は、煙草が切れていたことに気付き、顔を顰めた。

ポケットから新しい煙草を詰めなおし、再び火を点ける。

巨大な象のような体躯、つるりと禿げ上がった頭に、冷酷そうな灰色の瞳をした男で、歴戦の勇士を証明する数々の顕彰が胸に輝いている。

一服喫い、紫煙を口から漂わせ、苛々した口調でターク首相に向けて話し掛けた。

「ターク首相！　いつまで我々は、こうして待ち続けなければならないのだ？　帝国軍は総て？　シテイ？　に集結し、装備を点検し、機動部隊には燃料を注入して、待ち続けておる！」

パレス
「王宮？　の執務室から広場を見下ろしたまま、タークは背中を向けたまま答えた。

「何を待っている、というのだ？」

ガント元帥は吠えた。

「突入命令をだ！　決まっておる！」

ばん、と音を立てデスクを叩く。拳が握りしめられ、白くなった立ち上がり、タークの背後に近づき、唸り声を上げた。

タークの視線の先には【ロスト・ワールド】の？^{ゲート}門？　が不気味な

姿を見せていた。？門？の周囲には、完全装備の帝国軍兵士が、手に手に武器を持ち、鋭い目付きで辺りに気を配っている。遠巻きに市民が取り巻き、不安そうな顔で？門？を見上げていた。

「まだ早い。客家二郎からの合図は受け取っていない」

「たかが電脳盗賊ではないか！ あやつが何を企んでいるか、判つたものではない！」

くるり、とタークはガント元帥に向き直った。

「【ロスト・ワールド】の侵攻を、最初に警告したのは、客家二郎だぞ」

説得

ガント元帥の目が細められた。

「シャドウと二郎が、示し合わせていたら、どうなんだ？ 皇女の誘拐も、二郎が背後で糸を引いていたとしたら？ 否定できまい」

タークは無言で唇を噛みしめた。

タークの反応に、ガント元帥は満足そうに頷く。

「どうだ？ 時間は刻々と失われている。もちろん、皇女の残り時間だ。あと二日で、皇女は仮想現実から強制切断され？ ロスト？ が起きる！ 判っているのかね？」

近々と顔を近づけた元帥の顔には、興奮のために血が昇った。

「今だ！ 今こそ、我が帝国軍の全部隊を、あそこに見える？ 門？ に突入させ、皇女を奪還する作戦を決行すべきだ！ さあ、何を躊躇っている？ その通話装置に向かって一言、命令すればいいのだ！」

さつと元帥は、執務室の通話装置を指さした。

「全軍、突入せよとな！ この命令は、お主しか下せない！ 皇女が大事なら、すぐ命令するんだ！」

タークは顔を背け、再び広場に視線を戻す。

「ゲルダ少佐が同行している。彼女の忠誠心は疑いのないものだ！ もしものときは、ゲルダ少佐が……」

だん！ と元帥は足踏みした。

「女ではないか！ しかも、まんまとシャドウに皇女を目の前で引っ攫われて、おめおめと逃げ帰ってきおった！」

口調を和らげ、懇願するように話し掛けた。

「なあ、ターク。君とわしとの仲じゃないか？ 【蒸汽帝国】創立のころから、わしらは肝胆相照らす友人として付き合ってきた。お互い、皇女を大切に思う気持ちは同じだ！ その君が、なぜこうもグダグダとした態度でいるのか、わしには判らん！」

タークは、そっとポケットから二郎から渡されたディスクを取り出した。

ディスクの表面には不思議な煌めきが走り、ほんの少しの傾きで細かな紋様が浮き上がる。【パンドラ】修正プログラムの入ったディスクを弄び、タークは？門？を見つめる。

自信が激しくぐらつくのを感じ、タークは立ち尽くしていた。

登攀

ごつごつとした丘は、金属と結晶でできているように見えた。柔らかい土は、ほんの一欠片も存在しない。

空は血のような赤一色。たなびく雲は、腐ったような緑色。見ているだけで、気分が滅入ってくる。目を楽しませる自然の風景は「ロスト・ワールド」には一切、存在しない。

「なんで……仮想現実だったのに……こんなに、疲れなきゃならないっ……のっ！」

喘ぎ喘ぎ、タバサは険しい道のりを、足を引き摺りながら、とぼとぼと歩いている。全身の筋肉という筋肉が悲鳴を上げ、頭はがんがんする。

とにかく、汗でべっとりと服が肌に纏いつき、実に不愉快である。

「実際、筋肉が疲労しているからだ。乳酸が溜まって、疲労を感じているんだ」

側を歩いていた二郎が、冷静な口調で返事をしてくる。

タバサは「訳が判らないわ」と呟いて、二郎を見る。

「だって、実際のあたしは部屋の中で、仮想現実接続装置に繋がったまま、寝椅子に寝っころがっているんでしょう？ どうして疲れるわけ、あるのよ？」

二郎は頷く。

「その、寝椅子が答えた。説明書に、仮想現実接続装置にリンクするときは、寝椅子に横になるよう指示があったな？」

「うん」とタバサは首を縦にする。

「寝椅子には、横になった人間の筋肉を刺激する電極が内蔵されている。仮想現実で歩いたり、走ったりすると、筋肉が刺激され、実際に行動した分と同じ疲労が生じる」

「なんで、わざわざ、そんな七面倒な……」

「そうでないと筋肉が萎縮するからだ。一日の大部分を仮想現実で過ごすようになると、実際に歩いたり、走ったりの運動をしなくなる。それが長年ずーっと続くと、ひよろひよろの萌やしのような筋肉になって、ともに生活できなくなる。それを防ぐための工夫なんだ。もっとも、病気や事故で動けない人間には、特別に免除されているけどね」

二郎の説明を聞いて、思わずタバサは「エミリーのように？」と言いかけた。が、寸前で危うく思いとどまった。

気配を感じ、二郎は微かに首を横に振る。視線で、背後から従ってくるゲルダ少佐を示した。皇女のこととは、【蒸汽帝国】の、いや、あらゆるプレイヤーに秘密なのだ。タークは、くどいほど強調し、どんなことがあってもエミリー本人すら明かさないうつ、頼んでいた。

それにしても二郎は、まるで疲れを知らぬように、ぐいぐいと力強い歩きで丘を登っていく。真葛三兄弟　玄之丞、知里夫、晴彦の三人もまた、全く疲労を感じていないかのようだ。一人、タバサだけが顎を出し、ぶつぶつブウ垂れている。

忠告

二郎は同情するような笑いを浮かべた。

「我慢しろ。多分、お前さんは普段から運動不足なんじゃないのか？　どんなスリムな体形の分身になっても、元々の身体がそうでなくっては、無理が生じるんだ」

さつとタバサは視線を逸らし、真っ直ぐ前を見詰めた。二郎の指摘に、頬がかつと熱くなった。自分が耳まで真っ赤になっていることを感じる。

悔しさに、言い返した。

「あんたは、どうなのよ？」

「おれが？」二郎は思わぬ逆襲に、きょとんとした表情を浮かべた。タバサが言い返すのを、予想していなかったかのようだ。

「そうよ。あんたは仮想現実の最初のころから活躍しているって、自称していたわね！　となると、どんなに若くたって、今は二十八……もしかしたら三十歳過ぎのの親爺ってことじゃない？　厭だあ！　あたし、そんなジジイと一緒に歩いているのかしら？　否定できる？　それとも、本当のあんたのこと、あたしに明かしてくれるのかしら？」

二郎は、しばらく黙って歩く。

無言になった二郎に、タバサは「悪いこと言っちゃったかしら？」と反省する。

やがて、二郎は口を開いた。意外なことに、二郎の口調は物柔ら

かなものだっただ。

「そんなことを絶対に口にしちゃいけない。いいか、決して……もう一度はつきり言う。決して、他のプレイヤーに仮想現実以外での生活や、本名、年齢などプライベートなことを質問しちゃいけない！絶対に、だ！」

二郎の顔つきは、ひどく真剣だった。タバサは思わず「しゅん」となる。

「ど、どうして？」

「それが、エチケツトなんだ。どんな敵対しているプレイヤー同士でも、お互いに仮想現実以外のプライベートには、干渉しないことが絶対の鉄則になっている。

なぜならば、仮想現実にリンクしている間、プレイヤーは完全に無防備な状態だ。もし、この原則を破るような行為をしたことが明らかになったら、原則を破ったプレイヤーは、即座に仮想現実から締め出される罰を受ける。

実際、初期のプレイヤーには、ストーカーまがいの言動をして、仮想現実から永久追放された連中もいるんだ」

玄之丞が、のんびりとした声を上げた。

「吾輩も【スラップ・スティック・タウン】で探偵をしておるが、時々そんな依頼を持ち込まれることがある。もちろん、言下に断るがね！」

一同は、黙って丘を登り続けた。

乗物

いつまでも歩き続けることに、ほとほとタバサは、うんざりしていた。歩きながら、ぶちぶちと不平を漏らす。

「ねえ、いつになったら、シャドウのところへ行き着けるの？ もう、歩き飽きたわ！」

玄之丞も、タバサに賛意を示す。

「ふむ。吾輩もタバサの意見には、全面的に賛成するな！ なんだか、当てもなく歩いているようにも思える。二郎君、シャドウの本拠地は、それほど遠くにあるのかね？」

二郎は立ち止まった。

「我慢しろ。もうすぐ乗り物が見つかる」

二郎の言葉に玄之丞は目を引ん剥いた。

「乗り物だあ？ 【ロスト・ワールド】に、そんなご大層な代物があるのかね？」

二郎は玄之丞の質問には答えず、鋭い視線を辺りに配っている。何か探しているのか。

二郎の瞳がきらりと煌いた。じわりと頬に笑みが浮かぶ。

「あつた、あつた！ ここまで歩いてきた甲斐があつたぜ！」

腕を挙げ、彼方に指を一本、真っ直ぐに伸ばした。全員、二郎の指差した方向に注目した。

二郎の指し示したのは、金属の丘に横たわる、一本のチューブのような物体だった。丘には結晶の森がごちゃごちゃと立ち並び、指摘されるまで、そんな物体があるとは、気付きもしなかった。

チューブは、地面からほっそりとした脚で支えられ、空中に高々とどこまでも伸びている。チューブはかなり太く、直径は三メートルはある。

「なに、あれ？」

「電車だよ。線路だ」

二郎の答えに、タバサは首を傾げる。

「からかっているの？」

「まさか！ さあ、行くぞ！」

二郎はタバサの質問に全く取り合わず、とつと歩いていく。無視され、タバサはちよつと「むっ！」となったが、それでも僅かな期待を胸に、従った。

スプリング

近づく、チューブは見上げるような高さにある。表面は雨風に打たれ、薄汚れ、とても鉄道の線路とは思えない。

そつと表面に手を当てたタバサは「どくん！ どくん！」という微かな脈動に気付いた。

「生きているみたい……」

「その通り！ これは、生き物の身体の一部だ」

驚いてタバサは手を離れた。なんだか、やたら気持ち悪い！
タバサの表情を見て、二郎は「くくつ」と笑った。

「噛みつきはしないよ。さあ、登らないとな……」

見上げながら二郎は呟く。

ゲルダ少佐は難しい顔つきになって、一緒に見上げた。

「どうやって？ 階段すら、ないのに」

「こいつが、ある！」

二郎が手を空中に浮かすと、ポケットからティンカーがぴょんと飛び上がり、手の平にすっぽりと収まった。

「ティンカー！ 頼むぞ！」

「了解！」

ティンカーの身体が変形して、スプリング発条の形に変形した。

二郎は脚を挙げ、ティンカーの上へ立つ。

ぐつと上を見上げ、叫んだ。

「行くぞ！」

びょーん！ とティンカーが変身した発条は一気に跳ね上がる。
二郎は先端に立ち、そのまま上空へ飛び上がった。

一瞬、ふわり、と空中で静止したと見るや、すでに二郎は、チューブの上へ飛び移っていた。チューブから身を乗り出し叫ぶ。

「さあ！ 続いて来い！」

落下

地面に残された全員は、驚きに顔を見合わせる。しばし、探るような視線が、お互いの顔を交叉する。

「では、わたしから」

ゲルダが意を決し、片足を上げてティンカーの上へ登る。上昇し、放物線の頂上に到達すると、見事なスワン・ダイブでくると回転し、チューブに乗り移る。

「ふむ。文明的とはいいかねるが、他に代替手段はなし、と……」

ぶつぶつ文句を言いながら、それでも玄之丞はゲルダに続き、飛び上がった。空中ではたばたと見つともなく手足を動かしたが、それでも無事、乗り移る。

「なるほど……面白れえ！」

にやにや笑いながら、知里夫も続く。

晴彦はまるで頓着することなく、躊躇いもなくティンカーの上へ飛び上がった。びょーん、と空中に飛び上がった晴彦は、コートからぱつと黒い雨傘を取り出し、空中で素早く開く。

なぜか、ふわふわとした動きで、チューブの上へと降り立った。邪気のない、天真爛漫な笑顔は、そのままである。

二郎が下を覗き込み、タバサに叫んだ。

「何している？ 君の番だぞ！」
「う……」

どつと背中に汗が噴き出すを感じる。タバサは拳をぎゅっと握りしめた。脚が震え、上を見上げるだけで、くらくらと眩暈がしてくる。

「だ……駄目！ あたし、高いところ、弱い……！」

二郎は顰め顔になった。

「高所恐怖症か！ しかし、いつまでも愚図愚図していると、置いていってしまうぞ！ それでもいいのか？」

「置いて行ってしまう」との言葉に、タバサは一大勇気を振り絞る。怖々と片足を上げ、発条の形に変形したティンカーの上へ立った。

ぎゅっと目を瞑り、覚悟を決める。

出し抜けに、ぎゅーん、とタバサの身体が持ち上がる。

「きゃあああああっ！」

声を限りに絶叫した。

目を開くと、自分の身体が空中に浮かんでいることを認める。足下にチューブが見え、表面に立った仲間が、ぽかんと口を開き、タバサを見上げていた。

すたん、とタバサの身体は落下し始める。

「厭 っ！」

どう見ても、タバサの落下地点はチューブから明後日の方向を向いている。このままでは、空中に放り出されてしまう！

鉄道

「ティンカー！」と二郎が叫んだ。

ひゅっ、と空中を飛び上がったティンカーは、全体をロープの形に変形させ、タバサの腰に巻き付いた。

ロープの端を二郎は握りしめ、ぐいっと力の限り引っ張る。がくんっ、とタバサの身体は二郎に引っ張られ、チューブへ引き寄せられる。

「おっと！」

玄之丞が腕を伸ばし、タバサの腕を掴んだ。

どすん、とタバサの身体はチューブに落下した。

タバサの身体は玄之丞の上に押し掛かり、玄之丞は「ぐえっ」と奇妙な悲鳴を上げた。

「おっ、重い！ 圧死する！ 早く、どいてくれっ！」

「失礼ねっ！ あたし、そんなに重くありませんっ！」

それでもタバサは急ぎで立ち上がる。

玄之丞は「ふいーっ」と溜息をつくとき、指で額の汗を拭いた。

二郎を見ると、にやにやと笑いを浮かべている。

「何よ？」

「いや、別に……」

喧嘩腰で睨みつけると、二郎は笑いを浮かべたまま、そっぽを向く。

チューブは中空で、筒を半分にした形をしている。巨大な雨樋の内側に、タバサたちは立っていることになる。

「これが、どこが鉄道なの？」
ぼんやりとタバサは呟く。

二郎はチューブの内側に蹲り、耳を表面に当てて何か、聞き耳を立てている。

「しっ」と指を口に当て、静かにするように合図する。

にやり、と二郎の唇が会心の笑みを浮かべた。
立ち上がり、チューブの彼方を見つめている。

「来るぞ……。列車の登場だ！」

芋虫

どすどすどす……と、微かな震動が足下から伝わってくる。
何かが、明らかに接近してくるのだ！

目を細め、遠くを眺めたタバサは、雨樋の内側にぴったりとした芋虫のような姿の生き物が近づいてくるのを認めた。芋虫は、腹の辺りからぬるぬるした粘液を放出させ、ずりっ、ずりっと身体をくねらせ接近してくる。

「あ……あれが、列車？　ですってええ！」

二郎は指を口に当て「ひゅーっ」と、高々と指笛を鳴らした。

ぴた、と芋虫は前進を止めた。頭がぐい、と持ち上がり、ひくひくと触覚が空中を探っている。二郎は再び指笛を鳴らす。

今度は「ぴっ！　ぴっ！」と断続的な鳴らし方だ。芋虫の頭が、のそりとチューブの床に下がり、何かを待ち受ける態勢になった。

「さあ、乗り組むぞ」

叫んで、二郎は自信満々に芋虫に近づいた。ぐっと芋虫の身体を踏んづけ、さっさと当然のように背中に登る。呆気にとられている全員に、顎をしゃくった。

「何している？」

またまたゲルダが先頭に立つ。無言で芋虫を睨みつけ、ぐっと踏みつける。足が芋虫の柔らかな身体にめり込む瞬間、実に神妙な表

情になる。

続いて、玄之丞。

玄之丞は脚が芋虫を踏みつけた瞬間「おほっ！」と短く笑い声を上げた。

知里夫は無造作に飛び上がる。ずばつと足首まで埋まり、芋虫は「ふんぎゅっ！」と小さく声を上げた。
二郎は眉を顰め、声を掛ける。

「おいおい、乱暴に登るな！ こいつは生き物なんだからな」
「すまねえ」と、知里夫は首を竦めた。

晴彦はスキップしながら近づいた。勢いをつけ、飛び上がる寸前、二郎は慌てて手の平を挙げ、制止した。

「おいっ！ さっき知里夫に注意したばかりだぞ！ そつと登れ！」
ききつ、と晴彦は危つく留まり、ばたばたと両手を旋回させバランスを取る。それでも大人しく、芋虫の背中に登った。

最後が、タバサである。高いところは苦手だが、虫は……それも芋虫は、もつと苦手だ！

かちん、こちに全身が緊張し、ぎくしゃくと出来損ないのロボットのようになり、芋虫に近づいた。なるだけまともに見ないようにして、背中に足を接地させる。

ふにゅ、と足の裏が、柔らかな生き物の背中を踏んづける。

「うわあ……」

泣きそうになって、それでも必死に悲鳴を押し殺して、どうにかこうにかタバサは背中に登った。

蝶

二郎は芋虫の頭辺りに陣取り、胡坐をかく。

真似をして、タバサたちも柔らかな背中、腰を落とした。

二郎は指を唇に押し当て、「ぴーっ！」と高々と鳴らした。

ぐつと芋虫は頭を挙げ、ぐねぐねと全身を蠕動させ、再び前進を再開した。

「こ……これ、何なの？」

「見ての通り、幼虫だ。チューブは、こいつの通り道になっていてね、滑りを良くするために粘液を放出させるが、粘液はチューブにとって栄養となる。つまり、共生関係だな」

芋虫の身体の動きで舌を噛みそうになったが、それでもタバサは、必死に質問する。

「それで、どこに向かっているの？ さっきの指笛は何？」

「やーれ、やれ！ また質問責めかよ……」

うんざりした表情になりながらも、それでも二郎は説明をする。

「なりはデカいが、要するに、こいつは幼虫だ。芋虫と聞いて、何を連想する？」

タバサはぶんぶんと激しく首を振った。芋虫なんか、考えたくもない。

「ほら、蝶だよ。こいつは、あの種の虫の幼虫なんだ。充分に身体

が育つと、こいつはチューブを伝って、蛹むすめになる場所を目指す。指笛は、こいつにとっては、生きるための信号だ。おれは何度か【ロスト・ワールド】に潜入して、こいつの利用方法を見出したんだ」

ゲルダは真剣な表情で割り込んだ。

「それで、シャドウの本拠地に、どれくらい近づくんですか？ 幼虫の巣籠もりをする場所が、シャドウの居城なのですか？」

「いや」と、二郎はゲルダの質問に短く首を振った。

「そう、真っ直ぐ行けるといふ訳にはいかないよ。しかし、かなり距離は稼げる。まあ、あとは空路を取るようになるけどね」

「空路……！」

と、全員が声を上げる。

いや、唯一人、晴彦だけは会話にまるで無関心で、ぼけっと呑気な表情で、周囲の景色に目をやっている。

これが鉄道なら、飛行機はなんだろう……。

タバサは一寸考え、二郎が蛹になって蝶になると説明したの思い出した。

ということは……！

せめて、本当に蝶でありますように……！

タバサは、蛾が大嫌いなのだ。

接近

芋虫の背中に乗ったまま、旅は順調に進んでいる。

速度が上がると、芋虫の動きは滑らかになり、タバサはようやく落ち着いた気分です。周囲の景色を見渡す余裕が出てきた。

地形は直線と、平面で構成され、曲線部分はほとんど見当たらない。透明なもの、あるいは白濁した結晶が、によきによきとあちこちから突き出している。

二郎の説明では、森にあたるらしい。山脈には奇妙な線刻模様が浮き出し、時折、青白い光が走る。

タバサは空を見上げ、首をかしげた。

太陽は見えない。ただ、真っ赤な血のような空が広がっているだけだ。それなのに光は感じる。どこに光源があるのだろうか。

これも仮想現実の不思議の一つなのだろうか。

遠くの空にくると、十字型のプロペラのような物体が数個、浮かんでいる。

タバサは指さし、二郎に話し掛けた。

「ねえ、あれ。【ロスト・ワールド】の鳥なの？」

タバサの指さした方向を一目ちらつと見た瞬間、二郎の顔色が変わった。

「いかん！ あれは敵だ！」

拳銃

タバサは「敵？」と、ぼんやりと呟く。タバサの香気な反応に、二郎は苛々とした表情になる。

「そうだ。天敵だ！ この芋虫のな！」

「襲ってくるんですか？」

素早く反応したのは、ゲルダだ。さすが軍人らしい。ゲルダは腰のホルスターから拳銃を抜いた。二郎は皮肉な目で、ゲルダの拳銃を見た。

「それで何するってんだ？」

心外な、という表情をゲルダは浮かべる。

「攻撃を受けるなら、こちらも反撃しなくては。当たり前のことでしょう？」

二郎はゲルダの拳銃をしげしげと見つめ、軽く首を振る。

「そいつは【蒸汽帝国】から持ち込んだものだな。ここで使えと思っているのか？」

ゲルダは驚きに、目を瞪る。

「なぜです？ これは帝国軍の制式拳銃ですよ！」

ぶい、と二郎は、そっぽを向く。

「まあ、試してみな。どうなるか……」

明らかに小馬鹿にした、二郎の態度に、ゲルダは見る見る顔を真っ赤に染めた。

タバサはゲルダの拳銃を眺めた。拳銃というより、小型の大砲、といった形容が当たっている。銃口が喇叭状に開き、ずっしりと重そうである。ゲルダは軽々と扱っているが、タバサが持てば数秒と経たないうちに、腕が痺れ、持ち上げることすら困難だろう。

奇妙なのは、真葛三兄弟である。二郎が危険を予感して、緊張しているのに、三人は薄ぼんやりと空を眺めたり、知里夫は鼻毛を抜いたりしている。

まるで危険というものを、感じていないかのようだ。

見る間に空中を回転していたプロペラは、芋虫の進行方向に近づいた。

薄平たい、四本の羽根が旋回している。これが生物とは信じられない。

羽根の形は、根本が細く、先端が丸く広がった形をしていて、先端には目玉のような器官が付いている。もし目玉だとすると、ぐるぐる旋回していて、どうやって見るができるのだろうか。

根本は口らしい。丸く開いた円形の穴の内側に、細かな突起が無数に生えている。歯である。

プロペラ生物は、ひゅんひゅんと風切り音を立てながら、見る見る接近してくる。

不発

芋虫の背中に、ゲルダがすつくと立ち上がった。

両手で拳銃を構え、静かに接近するプロペラ生物を待ち構えている。ゲルダの指が銃爪を引いた。

かちゃり……。微かな金属音を立て、撃鉄が下りた。それだけである。

タバサは「どかーん！」という拳銃の音を予想して、早々と耳を塞いでいたのだが、何も起きない。慌てたのはゲルダであった。

かちゃ！ かちゃ！ と、何度も銃爪を引くが、拳銃は何も反応無しだ。

「くそっ！」と小さく舌打ちをすると、今度は腰の軍刀をすらりと抜き放つ。拳銃は投げ棄てた。

一匹が、すぐそこまで近づいている。ゲルダは軍刀を素早く、下から上へ切り上げる。

ぎゃりんっ！

ゲルダの軍刀は虚しくプロペラ生物の身体を滑った。相当、硬い表皮をしている。それでも切り掛かった衝撃で、プロペラ生物のコースは逸れた。

二郎は素早く真葛三兄弟を振り返り、叫んだ。

「あんたらの出番だ！」
「ほいちっち！」

妙な掛け声を上げ、玄之丞が立ち上がる。腰に両手を掛け、胸を張った。

二郎がタバサに近づき、囁いた。
「耳はそのまま塞いでおけ！」
「え？」
「いいから、耳を塞ぐんだ！」

二郎はしっかりと両耳に指を突っ込む。訳が判らないなりに、タバサも真似する。

すうーっ、と玄之丞は大口を開け、息を吸い込む。

吸い込む。

まだ吸い込む。

まだまだ吸い込む。

どんどん玄之丞の胸は膨らんでいく。顔は赤らみ、眉間に深い皺が刻まれた。

知里夫、晴彦の二人も、しっかりと耳を塞いで、何かを待ち受けている。

声

玄之丞は声を発した。

渴　　っ！

声、というより、何か強烈な衝撃波が、物理的な力を持って、空間を切り裂いた、といったものだった。

震動で、タバサの皮膚がぶるぶると震え、髪の毛がばさばさと逆立った。両手で固く耳を塞いでいるのに関わらず、鼓膜を通り抜け、脳髓に直接ぐわんぐわん突き刺すような音が轟き渡った。

タバサは気が遠くなり、目が霞む。

恐る恐る、タバサは目を開く。

ふっ、と玄之丞は芝居っ気たっぷりに、額の汗を拭う仕草をする。

さっきまで接近していた数個のプロペラ生物が、ふらふらと頼りない、まるで気絶したかのように目標を見失って、さ迷っている。ぽとり、と一匹が地面に落ちていく。ついで、ぽと、ぽとりと残りのプロペラ生物も後を追う。ぱたん、と地面に平べったくなり、そのまま動かず止まっている。

芋虫はずんずん進んでいるから、あっという間に後方に遠ざかり、見えなくなった。

すぱーっ！　と、得意そうに玄之丞は葉巻を吹かす。

「どうかな？　危機は脱したかな？」

二郎は小さく頷いた。

「ああ、助かった。しかし、相変わらず、あんたの声は凄いな……」

「まあ、な！」

おほん、と咳払いをして、玄之丞はそっくり返った。

タバサは二郎に囁いた。

「これで、あの人たちを連れてきたの？」

二郎は素早くウインクをする。

「そうさ。あの連中、見かけはああだが、各々特技があつてね……。

まあ、残りの特技も追々、披露してくれると思うよ」

進行方向に顔を向け、笑顔になった。

「さてさて、次は芋虫の巣籠もり場所が近づいた！ 終着駅は、すぐそこだよーい！」

岩山

近づいてくるのは、二郎の言う「芋虫の巣籠もり場」である。

それは、岩山だった。といっても、普通のごつごつとした岩山ではない。四角いブロックが積み重なった山である。大小無数の正方形に近いブロックが積み重なり、岩山を形成している。どうやら「ロスト・ワールド」では、普通の浸食作用は無縁らしい。

岩山の幾つものブロックの隙間に、ぽつ、ぽつと蛹のようなものが貼り付いている。

気がつくと、岩山には今、タバサが利用しているチューブの他に、何本かのチューブが様々な方向から集中していた。他のチューブを注意して観察すると……いたいた！ 芋虫が必死で、岩や目指して黙々と這い進んでいる。

岩山の天辺辺りには、奇妙なものが散見される。

風船だ！

ぶつくと、幾つかの風船が、岩山の天辺近くに数個、浮かんでいる。風船には糸が付いていて、先端は岩山に繋がっている。風船は、微かな風にふらり、ふらりと左右に揺れている。さらに風船の根本あたりには、籠のようなものが付属している。

タバサは目を瞠った。人間だ！

籠の中には人間が乗り組んでいる。ということは、あれは気球な

の
だ
！

原理

タバサは二郎に話し掛けた。

「ねえ、空路に行く、と言つてたけど、あれなの？」

「そうだ」と、二郎は頷いた。タバサの见ている風船を、二郎も見上げて説明を加える。

「ここは、熱気球の発着場なんだ。あれを使つて、シャドウの本拠地へ向かう」

タバサは「ほっ」と安堵の溜息をついた。

良かった！ また、虫の背中に乗り込まなくてはならないのかとビクビクしていた。

しかし、どうやってあそこまで登るつもりなのだろう？ まあいい、二郎が総て知つてゐるはずだ。

気になつてゐるのは、ゲルダ少佐の態度である。プロペラ生物のゴタゴタが終わつた後は、なぜか、むつつりと黙り込んでしまった。

ゲルダは膝を抱えた姿勢で視線を上げ、二郎を見つめた。

「二郎さん。質問があります」

「なんだ」と二郎は振り返る。

ゲルダは居住まいを正した。正座し、真つ直ぐ二郎を見つめ、質問する。

「どうしてわたしの銃が作動しなかったのか、知つてゐるのですか

「？」

「ああ、そのこと」

二郎は薄っすらと笑いを浮かべる。ゲルダの頬が、二郎の笑いで紅潮したが、それでも黙って答を待ち構える。

「あれは【蒸汽帝国】から持ち込んだものだよな。それも、おれの見たところ、蒸汽軍制式の蒸汽銃だ。

【蒸汽帝国】のテクノロジーは蒸汽に依存している。とはいえ、普通の蒸汽機関ではなく、【蒸汽帝国】独自の原理で動く。

ここは【ロスト・ワールド】だ。【蒸汽帝国】で有効な原理は、ここでは作動しない。だから、だよ」

恐れ

ゲルダ少佐は目を丸くした。

「それでは、もし【蒸汽帝国】の軍隊があなの？門？^{ゲイト}を通って、こちらへ侵攻したとしても……」

「馬鹿な！」

二郎は顔を顰めた。

「おれが散々、念を押しておいたはずだ！ 絶対、王宮前に現れた？門？には近づくな、と！ もし、あそこから【ロスト・ワールド】に乗り込んだら、総ての【蒸汽帝国】軍の武器兵器は、即座に何の役にも立たぬ、スクラップ同然になっている現実を悟るだけだ」

そこまで喋って、二郎の顔色が変わった。

ぐい、とゲルダに身を乗り出し、噛みつくように尋ねる。

「おい！ まさか、【蒸汽帝国】のボンクラども、妙な考えを弄んでいる訳じゃあ、ないよな？ じっとしておけ、とおれが諄いほど念押ししていたのを、忘れたとは言わせねえ！」

ゲルダは暗い目つきになった。

「それが……ターク首相はともかく、軍の一部には、あなたの忠告に従うことを潔しとしない人も……」

「けえーっ！」と、二郎は奇妙な叫び声を上げた。

「まったく、何を考えているんだ！ もし、奴らが本気で？門？からこっちへ進攻しようと試みたら……」

ゲルダは心配そうな表情を浮かべる。

「どうなります？」

「総てご破算だ！ おれが散々、苦勞してお膳立てしたこと全部が、そっくり無駄になる！ 【ロスト・ワールド】正常化はおろか、お前らのお大事のエミリー皇女の救出だって、永久に不可能になっちまう！」

ゲルダは真っ青になった。

蝶人

芋虫は岩山に近づくと速度を落とし、チューブが岩山に接した場所へ、もぞもぞと這って行く。ぐいつ、と頭を持ち上げ、前足を掛ける。

乗り込んでいた全員、芋虫から降りて見守った。

芋虫は、のそのそとした動きで、それでも着実に、岩山をじんわりと登って行く。

岩山を構成する真四角な岩は、あちこち外へ突き出し、登攀するには苦勞しそうだが、芋虫はしっかりと多足の脚部を使って、ゆっくりと登る。

じっと見つめていると、ようやく満足した箇所を見つけたのか、芋虫は不意に動かなくなった。頭部を微妙に動かし、口から糸を吐き出して、岩の面に接着する。それから芋虫の巣籠もり行動が始まった。

タバサは岩山のおちこちに視線をさ迷わせた。

その気になって観察すると、岩山には無数の蛹が貼り付いている。

ばさばさばさ……と羽音がして、タバサは顔を向けた。

巨大な蝶の羽根が、視界に飛び込んできた。羽根を動かしているものを見て、タバサは思わず「えっ？」と声を上げる。

羽根の中心にいるのは、人間……のように見える。ほっそりとした手足、白蛾のような肌をして、血の気のまったくない顔色をして

いたが、どう見ても人間だ。

髪の毛はプラチナ・シルバーの銀髪、瞳は薄いブルー。目尻は吊り上がり、唇には色が付いていない。

タバサは一瞬、裸なのかと思ったが、全身が肌と同じ色の、真っ白な生地のパツたりとした衣装を身に着けている。男とも、女ともつかない中性的な顔つきの人間は、二郎を見つめ、にっこりと笑い掛け、形のいい唇が開き、声を発した。声もまた、顔つき同様、男女の区別をつけることができないものだった。

「ようこそ、客家二郎。またいらしたのですね」

ケスト

呼びかけられ、二郎は笑い返した。

「やあ！ ケストか！ 仰せの通り、何とか無事にここまで辿り着くことができた。この六人で熱気球に乗りたいのだが、手配してくれるかね？」

ケストと呼びかけられた蝶人間は、にこやかな笑みを返した。

「今回は、お仲間をお連れになったとは！ いよいよ、シャドウと対決するのですか？」

「そうさ。いよいよだ……！」

二郎は真剣な表情になった。

タバサは二郎の袖を引っ張って囁く。

「知り合いなの？」

ケストはタバサを見下ろし「にっ」と笑いかけた。タバサは「どうも！」と無意味な呟きを口にし、どういう訳か自分の顔がかと火照るのを感じていた。

ふわり、とケストは羽根を動かしてタバサの目の前に舞い降りた。微かに頭を下げ、胸に手を置いて挨拶する。

「初めまして。わたくし、ケストと申す蝶人の者です！」
慌ててタバサは自己紹介をする。

「あっ！ あたし、タバサです。よろしくっ！」

ケストは小首をかしげ、しげしげとタバサを見つめてくる。ケストの凝視に、タバサはときどきと動悸が高鳴るのを感じる。やがてケストは得心したのか、にっこりと笑った。

「なるほど！ とても良いお嬢さまのようですね。【ロスト・ワールド】へ、ようこそいらつしゃいました」

何を言っているかわからず、タバサはじっと見つめ返した。ケストの顔に「ああ」といった表情が浮かぶ。

「わたくしのことがお知りになりたいのでしょうか？ ご安心なさい。わたくしは真正銘の人間のプレイヤーです。但し、？ロスト？したプレイヤーの、成れの果て。ここ【ロスト・ワールド】で、蝶人にされてしまいました」

タバサはケストの最後の言葉を聞き咎めた。

「ここで蝶人にされた？」

「そうです」とケストは背後の岩山を指差した。指先は、岩山に貼り付いている一つの蛹を示している。

示された蛹は、今にも羽化する寸前のものだった。

背中に亀裂が生じ、白い羽根の一部が覗いている。ふるふると震えながら、蛹は羽化を始め、内部から身体が抜け出してくる。

人間だった！

ケストと同じような、真っ白な身体の間が蛹から孵ってくる。背中には巨大な羽根が生え、まだ身体が固まっていないため弱々し

い印象だが、明らかに人間のプロポーションを持っていた。

「あ、あなたが……あれ……？ まさか、信じられない！」

タバサは支離滅裂なセリフをしどろもどろに口にするが、ケストは大真面目に頷いた。

「そうです。わたくしも、ここで蛹から、この身体に生まれ変わったのです！」

階段

岩山には、細い隙間があつて、間を階段が刻んである。大の人間一人がようやく通り抜けることが可能であるが、かなり狭い。

「首相が従いてこなくて、正解だったな。タークの身体じゃ、ここを通り抜けるなんて、絶対に無理な話だ」

二郎の言葉に、タバサは思わず吹き出した。【蒸汽帝国】で見た、ピア樽そのままの、首相の身体つきを思い出し「言えてる！」と思つた。

背後の気配に振り向くと、ゲルダの目と合つた。ゲルダはいつもの謹直な顔つきであつたが、唇がひくひくと震えている。

が、ついに堪えきれなくなつて「ぷっ」と吹き出す。自分が笑つたことで、身体中に笑いの発作が波のように襲い掛かつて、ゲルダは身を折つて「あははは！」と声を上げて笑つた。

「あはははは！ 何よう？」

タバサが声を上げると、ゲルダは首を何度も振つて「ひいひい！」と笑い崩れる。しばらく二人は、歩けなくなつていた。

先頭を蝶人のケストが案内し、二郎、タバサ、ゲルダ、玄之丞、知里夫、殿軍が晴彦と続く。ケストは大きな翼を畳んで歩いている。

階段は真つ直ぐで、曲がり角はなく、これなら蝶人でも利用できる。狭いとはいえ、ほっそりとした身体つきの蝶人にとっては充分

に広い。

時折、向こうから別の蝶人がやってくるが、するりと蝶人同士すり抜ける。しかし後方を二郎たちが歩くので、蝶人はその横をすり抜けるときは、少し苦しそうであった。多分、普段は蝶人だけが階段を利用するのであろう。

急な階段を登りきると、立方体ブロックでできた岩山の、踊り場のような場所に出た。

「ここでお待ち下さい」

ケストは一礼すると、羽根を広げ、ふわりと空へ飛び上がった。

熱気球

「ねえ、あのケストって人、男なの？ それとも、女？」

ケストが見えなくなると、タバサはかねての疑問を二郎にぶつけてみる。

二郎はゆっくりと首を振った。

「どちらでもない。ケストが？ ロスト？ する前、男だったか女だったか知らないが、蝶人になった時点で、そんな区別は消滅している。おそらく、ケスト自身も覚えていないんじゃないのかな」

「あの芋虫がケストだったなんて、信じられないわ！」

二郎は、にやっと笑った。

「まあな。【ロスト・ワールド】じゃ、？ ロスト？ したプレイヤーは、ここの生き物に狙われることがしょっちゅうだ。ここの総ての生き物たちは、我々、人間のプレイヤーを渴望していると言ってもいい」

タバサは首を傾げる。

「どうして？」

「ここだよ」と二郎は自分の額を指さした。

「おれたち人間のプレイヤーには、他の生き物にはない知性ってやつがある。憶えているだろう？ 最初に出会った、馬と同化したプレイヤーを」

タバサは、こくん、と頷く。

「あのカウボーイなんざ、どう見ても知性的とはいえない。それでも、ここの生き物にとっちゃ、神の如き知性の持ち主なんだ。多分、

あいつは、二本足の馬たちのリーダーになるかもしれない」

ばさばさ……と羽音がして、ケストが戻ってくる。手に一本のロープを握っていた。ロープの先には、最初に見た熱気球が繋がっている。熱気球の籠は充分に大きく、六人が乗り込んでも余裕があった。気球部分と籠部分は一繋がりで、どこにも継ぎ目はない。材質は半透明の柔らかな素材で、触ってみると、妙につるりとしている。

吊るされている籠は、驚くほど細い紐が数本あるだけで、これでは重みを支えることができるのだろうか、とタバサは怪しんだ。

水母

「大丈夫。切れることは絶対でない」

紐を弄っているタバサに、二郎は自信ありげに断言した。

それでも恐る恐るタバサは乗り込んだが、二郎の言うとおり、切れる様子は微塵もなかった。ゲルダも同じ思いなのか、タバサと顔を合わせると、眉を上げ、肩を竦める。

平気な顔をしているのは三兄弟で、玄之丞はポケットから葉巻を取り出し、悠然と口に咥えた。マッチを籠に擦りつけようとするのを、ケストは慌てて制止した。

「止めて下さい！ 気球が嫌がりますので」
「へっ？」

玄之丞はポカンとする。
目を上げ、頭上の熱気球を見上げる。

「どういうことかな？」
「この気球は生き物です。わたくしたち、蝶人は気球の世話をすることが使命なのです」
「ほおおっ！」

感嘆の声を上げる。それでも葉巻を喫うことは諦めた。渋々、口の葉巻をポケットに戻す。

気球部分の真下には、ぶよぶよとした質感の固まりが吊り下がっ

ている。ケストは固まりに顔を近づけ、低く歌いかけた。

「フーン、ホーン、フーン……」

と聞こえる歌声で、固まりはケストが歌い出すと、ぶるぶると震え出す。気球部分がゆっくりと膨張し、気がつくとも高度が上がっていた。

ケストは籠の中から外の様子を確かめる。

「この上の上空に、シャドウの本拠地に向かう風があります。そこまで上昇しましょう」

ケストは言葉通り、気球を上昇させた。

「これが生き物……」

タバサが気球を見上げ呟くと、玄之丞は肩を竦め、感想を述べる。

「なんだか、水母くらげのようであるな！」

玄之丞の言葉にケストは大きく頷いた。

「そうです！ 気球は【ロスト・ワールド】では、水母のような生き物なのです。【ロスト・ワールド】では例外的に弱々しい生き物で、わたくしたちが世話してやらないと、あっという間に絶滅してしまう危険があるのです」

会話の間にも気球は着実に上昇を続け、ケストの言う気流に乗った。気流に乗っているため、タバサは風を感じなかった。

但し、籠から下を見ると、移動している証拠に、ぐんぐん地上の景色が動いていく。

動いていく。
動いて……。

「おええええっ！」

タバサは高所恐怖症だった事実を、すっかり忘れていた。
二郎は黙って、タバサの背中を擦った。

謎

気球は緑色の雲が漂う高度まで上昇した。雲を見上げ、タバサは眉を寄せる。

「何だか、雲に近寄っているみたい」

タバサの言葉通り、気球は自らを雲に潜りこませた。ずぼり、と気球部分が雲に突っ込む。

緑色の霧の中で気球は、ふわん、ふわん……と盛んに透明な膜を膨らませたり、縮めたりしている。

「食事中なのです」

ケストが満足そうな表情で答えた。

「食事中？　雲を食べているの？」

ケストはタバサに顔を向け、説明した。

「この雲は、いわゆる現実世界の水蒸気の雲ではなく、まあ、言ってみればプランクトンの固まりみたいなものです。気球は空で生まれ、育ち雲の中で成長します。ほら！」

ケストはタバサの顔を指差す。

緑色の霧の中、タバサの目の前を、注意して目を凝らさないと見分けられない透明な何かが横切った。まるで石鹸泡のように儚げで、薄い小さな何か。

思わず指を一本上げ、触ろうとした。

ケストは瞬時に押しとどめる。

「触らないで！ 破れてしまいます。これは、気球の幼生なんです！」

言われてよく見れば、確かに気球と相似形をしている。丸い気嚢部分に、小さな籠部分が付いている。小さな気球は、タバサの息を感じ、ひこひこ膜を震わせ、慌しく離れていく。

晴彦は気球の幼生を見つけ「にまーっ」と笑いを浮かべた。しかし、ケストがタバサに注意したのを見ていたのか、まじまじと見つめるだけで、触ろうとはしなかった。

緑色の霧を覗き込むと、いるいる！ 大きい、小さい、様々な大きさの気球が、ふわふわと浮かんでいる。しかし、ほとんどは、タバサが乗り込んでいる気球ほどの大きさには成長していない。

タバサは目を細くして、濃い霧を見通そうとした。

なんだろう、遠くに微かに一列の光が見える。ゆっくりと右から左へ動いている。

「あれは何？」

ケストは首を振った。

「判りません。雲の中に棲息している何かですが、わたくしたちも知らないことが【ロスト・ワールド】には多々あるのです」

目を丸くするタバサに、ケストは笑いかけた。

「あれは、^{エニグマ}謎なのです。それで良いではないですか？ わたくしたちは、そっとしておこうと決めています」

到着

気球は満腹したのか、高度を落とし、緑色の雲から脱け出た。再び、地上の景色が目の前に広がる。

タバサは慣れてきたのか、地上を見下ろしても、もう、吐き気は覚えなかった。

ふと、ケストの言葉を思い出す。怒りを込めて詰問する。

「あんた、緑色の雲はプランクトンの固まりって言っていなかった？」

大変だ！ あの中で自分はたっぷり、呼吸していた！

しかしケストは、にこやかに笑うと、首を振った。

「大丈夫ですよ。第一、ここは仮想現実です。プレイヤーには一切、影響が出る訳ないでしょう？」

ケストの返答に、タバサは「あっ」と声を上げていた。

そうだった！ ここは、仮想現実。あまりに真に迫っているため、すぐ念頭から消えてしまいが、実際の身体には影響が全然ないんだっただけ！

二郎や、ゲルダ、三兄弟はとくに承知しているのか、タバサの慌てぶりをにやにやしながら見守っている。タバサは、またしても顔が火照ってくるのを感じていた。

「あれがシャドウの本拠、？ロスト・シティ？です！」

ケストが叫び、前方を指で差し示す。

音

「町なのね……」

タバサは呟いた。

丘の中腹に、町ができている。やや離れた丘の頂上に、町を見下ろすように大きな建物が聳えていた。

タバサは何となく、シャドウの本拠は？城？のようなものと想像していたのだが、外れた。

確かに大きく、規模は城ほどもあったが、殺風景な、四角い窓のほとんど見当たらない岩の固まりであった。灰色の無愛想な岩が、丘の頂上から突き出し、ところどころ申し訳程度に、小さな窓が覗いていた。

対して、丘の中腹に広がる町は、色とりどりの屋根と壁が、色彩の爆発のように各々の存在を主張している。

壁には色んな模様が描かれている。道路はくねくねと乱雑に曲がりくねり、道の両側にはテントが張り出している。どことなく中近東のバザー風景を思わせる町だ。

町を眺め、タバサはある事実に気付いた。

立ち並ぶ家々の窓は、総て丘の頂上の反対側に開いている。丘の頂上側の壁には、一つも空けられていない。まるでシャドウの居城が存在することを否定しているようだ。

町から少し離れた平地に、タバサが乗り込んでいる気球と同じような丸い形が、地上に点在している。気球は、そこに向かっていく。

町を見下ろすうち、タバサは奇妙な音に気付いた。

かっち、かっち、かっち……。

何だろう、まるで旧式なアナログ時計の秒針のような音が、耳の奥から聞こえてくる。

耳を押さえても、聞こえてくる。

タバサの仕草を見て、二郎は頷く。二郎の何もかも承知しているといった顔色を見て、タバサは声を上げる。

「何よ？」

「音が聞こえてくるんだろう？ 秒針のような……」

二郎の指摘に、タバサは目を見開く。

「何か、知っているのね！ 何なの、この音！ あんたにも聞こえているの？」

二郎は頷く。ゲルダ、三兄弟もまた、同じように頷いた。

「あんたたちも！」

「さっきから聞こえていましたよ。残り時間が、いよいよ二十四時間を切ったのです」

ゲルダが冷静な口調で答える。玄之丞が腕組みをして後を引き取る。

「仮想現実接続装置は、七十二時間の制限時間がある。それを過ぎ

ると、強制的に接続が切断され？ロスト？が起きる。今しつこく聞
こえている音は、強制切断が起きる残り時間を知らせているんだよ。
いよいよ残り少なくなると、時計の秒針の音が秒読みの声に変わる
が」

希望

タバサは、ぞっとなった。

試しに、目を閉じ、仮想現実装置の接続解除コードを思い浮かべる。

が、何も起きない。普通なら、コードを思い浮かべただけで接続は終了され、タバサは元の肉体で目覚めるはずだ。改めて、タバサは「ロスト・ワールド」に自分がいる現実を、否が応でも納得させられていた。

二郎は同情するような目付きになった。しかし二郎の口から出たセリフに、タバサはかっとなっていた。

二郎は「だから言ったじゃないか？」と皮肉たつぷりのセリフを口にしたのである。

タバサは、猛然と怒りを表明した。

「そんなこと言わないで！ 何よ、偉そうに……！」

二郎は取り合わず、籠から地上を覗き込む。

「どうやら降りるようだぜ」

二郎の言葉どおり、ふんわりと気球は地上に降下した。

気がつくと、ケストと同じ蝶人が数人、羽根を羽ばたかせ近づいてくる。蝶人はケストが投げかけたロープを受け取ると、地上にぐいぐいと引き寄せた。

とん、と軽く音を立て、籠が地上に着地すると、待ち受けていた蝶人たちが地上に固定して、タバサたちが降りる手助けをしてくれ

た。つまりここは、気球専用の発着場なのだ。

全員が地上に降りると、ケストは二郎を真っ直ぐ見詰め、話し掛けた。

「これでお別れです。二郎さん。シャドウと対決して【ロスト・ワールド】を是非とも正常化してください。これは？ロスト？した、わたしたちプレイヤーの全員の願いです」

「判ってるさ」

二郎は軽く答えたが、表情は真剣だった。ケストの表情も真剣だった。

タバサはケストに尋ねた。

「どうして？ロスト？したプレイヤーたちが【ロスト・ワールド】の正常化を願っているの？」

タバサの疑問に、ケストが答える。

「なぜなら【ロスト・ワールド】からは、どの？世界？にも行けない、一方通行だからです。わたくしたち？ロスト？プレイヤーは、もう自分の肉体に戻ることはできなくなっていることは承知していますが、それでも一度は仮想現実ではない、現実世界を見てみたい。ワールドウ遠隔操作義体を使えば、その願いも叶います。しかし【ロスト・ワールド】が今のままの状態にいる限り、望みはありません。『パンドラ』の開発者の客家二郎さんが、わたくしたちの希望でもありません」

二郎は肩を竦めた。

「へっ！ 大袈裟だな。だが、まあ、何とかやって見るさ！」

タバサは何だか、二郎が照れているみたいだ、と思った。

バザー

町に近づく、タバサの仄かな常識などは、あっけなく朝日に消えていく靄のように溶けていった。

町とは、人間が住まう場所である。少なくとも、現実世界ではそうだ。

ところが、この？ロスト・シティ？ときたら、はつきり人間だと思えるのは僅かばかりで、後は人間のプレイヤーと【ロスト・ワールド】土着らしき生命体との融合した、訳の判らない連中ばかりだ。

半魚人がいる。

岩男がいる。

両足が竹馬のような奴、鳥の羽が全身にくっついていてるやつ、亀の甲羅を背中につけている……ああ、あれは河童か！

ともかく、目がクラクラしてきそうな雑多な連中が、町の通りを闊歩し、お互い無言の敵意を飛ばし合っていた。

二郎は小声で囁いてきた。

「いいか、目を合わせるな！ 話し掛けられても、返事をするな。否定も肯定もするな。一番いけないのは、首を振ることだ。返事したと思われる。とにかく、無視するに限る。ここは生き馬の目を抜いて、目玉焼きにして目の前に出されても気付かないほど、素早い盗人が揃っているからな！」

建物の壁には、ずらりとテントが並び、小商いをしている商人が大声で客引きをしている。

「さあさあ！ これにありまするは【ロスト・ワールド】全体を踏破した、伝説の旅人。あのマカリー卿の記しました地図に御座います！ 今まで未踏破だった地域も、事細かに記載され、あなたの旅の供に便利で御座いますぞ！ 一枚どうだね。値はたったの、十八ビットだ！」

「そこのお客さん、あんな奴の台詞を真に受けちゃいけませんぜ！ マカリー卿の地図だって？ そもそも【ロスト・ワールド】で不変の場所なんて、金輪際ある訳ねえぜ！

それより、身を守る武器が欲しくないかね？ なんと、こっちは伝説のAK47カラシニコフにウージー短機関銃が揃ってるぜ！ 現実世界からデータを入手したから、完全な状態であんたらの身を守る逞しい友人だ！」

「へっへっへっ！ なーにを出鱈目こいてやがる！ データを入手だって？ そいつは模型のデータじゃないか！ それが証拠に、銃身に穴が空いてねえ！ あっしの売り物は、寂しい一人身を慰める、パンダ娘のデータ一揃いだ！ 究極の萌えNPCは欲しくないか？」

わあわあと、鼓膜が破れそうになるほど、町は喧騒に包まれている。

街路

タバサは二郎の忠告を守り、真っ直ぐ前を見たまま歩いた。

二郎は先頭に立ち、曲がりくねった街路を、ずいずいと歩いていく。

タバサは並んで歩くと、二郎に質問する。

「ねえ、どこへ連れて行くつもり？」

「町のボスに会う。シャドウの本拠に乗り込む前に、話をつけておかないとな」

「ボス？　どういう相手？」

「だから、ボスだよ。言ってみれば、ギャングの親玉だ。なにしろ？　ロスト・シテイ？　はこんな場所だ。力で捻じ伏せなければ、好き放題にされるのが落ちだ。それが厭なら、隠れるか、それとも、これから会うギャンのように、実力を蓄えるしかない」

「ギャン？」

「これから会う相手の名前だ」

二郎はタバサを見て、眉を上げ、指を一本ひょいと立てて見せた。

「いいか！　君は何を聞かれても、黙ってる！　徹頭徹尾、知らぬ存ぜぬを通すんだ！　でないと、何をされても文句を言えなくなるぞ！」

タバサは唇を真っ直ぐ引き締め、無言で頷いた。

注文

ギャンという面会相手がいるのは、町の奥まったところにあるレストランであつた。

意外と本格的な造りで、席は半分がた埋まっていた、プレイヤーが出された料理をガツガツと食らっている。

それを見て、タバサは「あつ、そうか!」と合点した。

プレイヤーたちは全員が?ロスト?したプレイヤーである。従つて、生身の身体を気にすることもなく、旺盛な食欲を満足させているのだらう。

六人は丸い大きなテーブルに案内された。

案内した給仕は、NPCではなく、人間のプレイヤーであつた。真つ白いお仕着せを身に着け、優雅な仕草で、給仕は全員を席に着かせ、片手にメニューを持って口を開く。

「本日、当レストランがお客さまにお出しするのは、ガレガレ鳥のシチュー、フンボルト蛙と、モート特産レンズマメ煮込み、サラダなど?のようなもの?になっております!」

ふんぞり返つて玄之丞は口を開いた。

「それでは吾輩は?のようなもの?を注文するぞ!」
「へっ?」

給仕はポカンと口を開けた。目が驚きに虚ろになっている。玄之丞はニヤリと笑つて、追い討ちをかける。

「お前さん、言ったではないか？　？のようなもの？と。吾輩は、それを食したい」

「へっへっへっ……」

給仕は脂汗を掻きながら、それでもなんとか立ち直ろうと悪戦苦闘する。

「ご冗談を……」

「冗談ではないっ！　なんだ？　？のようなもの？は出せんのか？」「生憎と、品切れになっております」

「それでは、吾輩は、トチメンバーを召し上がるぞ！」

給仕は顎を引き、上目遣いになった。

「あのう……メンチボールのお間違いでは？」

「トチメンバーだよ、トチメンバー。なんじゃ、それも出せんのか？」

知里夫が割り込む。

「おれは、アカチバラチを頼む！　アバカラベッソンも忘れるなよ」
玄之丞は歯を剥き出し、ニタニタ笑った。

「そうそう、それがないと、ベケンヤにならんからなあ！」

徐々に給仕は忍耐の限界に達したようだ。表情が険しくなり、ぴくぴくと頬の筋肉が痙攣し、蟬谷こめかみからびっしりと汗がたらーり、たらりと流れている。

「少々お待ちを……」

言い捨て、くるりと背を向けると、早足になって店の奥へと駆け

込んで
いった。

ギャン

二郎は笑いを堪え、首を振った。

「玄之丞、あまりからかうなよ。給仕の奴、店の主人に御注進に走ったぜ」

「ふん！」と玄之丞は鼻を鳴らす。

「ちょうど良いではないか！店の主人とは、おぬしの言うギャンとか申す奴だろう？こっちから探す手間が省ける」

言い放つと、おもむろに葉巻を啜える。

玄之丞がマッチを探していると、ぬつと背後から腕が伸びた。指をぱちりと鳴らすと、親指にぽつ、と炎が点火される。玄之丞は葉巻を指に近づけ、吸いつけた。

「こりゃ、すまん」

「お客さまにはサービスを　　が、当店のモットーで御座いますから……」

声は気だるく、囁き声に近かった。玄之丞は顔を上げる。

背後に立っている男は、指先の炎を口元に近づけ「ふっ」と息を吹きかけ、火を消す。

「わたくしが、この店の主人で御座います。何か、うちの店の者にご迷惑をお掛け致しましたでしょうか？」

タバサは仄かに、香水の芳しい香りを嗅ぎ取っていた。現れたのは、十頭身はあろうかと思われる、ほっそりとした身体つきの、青白い顔をした男であった。

身に纏っているのは、真っ白なスーツに、ピンクのシャツ。しかも盛大なフリルが首許から、手首から出ている。肩に掛かるほど長い漆黒の髪の毛をはらりと顔に垂らし、憂鬱の国から、憂鬱を広めに來たような雰囲気を漂わせている。

驚くのは、男の背後にわんさかと薔薇の花が咲き誇っていることである。薔薇の花は空中に浮かび、男の身動きに合わせて漂っている。

男は背中の薔薇を一本、ひょいと摘み取ると、優雅な仕草で胸のポケットに差した。気障きざもここまで徹底すると、いっそ清々しい。玄之丞は、おずおずと尋ねた。

「あんたは？」

男は微かに頭を下げる。

「ギャン、とこの辺りの人間は、わたくしを呼びます……」

一巻の終わり

ギャンと名乗った男の目が、テーブルの向こうに据わる二郎の顔に止まった。

驚きが、ギャンの顔に弾ける。長い手足を折り曲げるようにして、空席に座る。

「どういう風の吹き回しですか？ 客家二郎とは、何とお珍しいお客さん！」

二郎は、にやにや笑いを浮かべ、返事をする。

「シャドウと対決するため、来たんだ。いよいよ【ロスト・ワールド】の正常化に手を着けようと決意してね。あんたの助力を当てにしてやってきた。協力してくれないか？」

ギャンは両手を組み合わせ、目を光らせた。

タバサは、ギャンの目が光った瞬間「キラーン！」という効果音が、どこかで聞こえたような気がした。

「お断りします……。あなたのお手伝いなど、金輪際、断固として御免蒙りたい！」

「おいおい……」

二郎の両目が、驚きに見開かれる。

さつとギャンは右腕を振った。まるで手品のように、右手に拳銃を握り締めていた。

拳銃の銃口をぴたりと二郎の胸に擬し、ギャンは素早く忠告する。

「おっと！ 動かないで下さいね。こいつは引き金が軽くて、あなたがちょっと動いた途端、間違えて撃つてしまうかも知れません。知つての通り【ロスト・ワールド】では倫理保護規定は働いておりません。もし撃たれたら、あなたでも冗談ごとでは済まなくなりますよ！」

二郎は両手を挙げ、口を引き結んだ。

食い縛った歯の間から、言葉を押し出す。

「ギャン……貴様！」

「客家二郎、一卷の終わり……かな？」

ギャンは銃口の狙いをつけたまま、薄い唇を持ち上げ、軽く笑った。

子供騙し

店内にさつと緊張が漲った。

テーブルに着いていた他の客は、そろそろと、音を立てぬよう椅子から立ち上がり、そそくさと店を後に行行った。

残されたのは、二郎以下の一行六名、および店の主人であるギャンだけである。

ギャンは、ぴくりとも腕を動かさず、銃口を真っ直ぐ二郎の胸に狙いをつけている。

かちかちかち……。

タバサの耳に、強制切断を警告する音だけが響いている。秒針の音は、タバサを急き立てるかのように、時を刻んでいた。

かちり……！

遂に、ギャンの指が引き金を絞っていた。

タバサは思わず目を閉じた。

「ばん！」ギャンの唇から声が漏れた。

タバサは目を開けた。

ぴよこり、とギャンの握っていた銃口から、色とりどりの万国旗が飛び出していた。二郎は呆気にとられた表情になっている。

「くっ……くくくく……」

身を震わせ、ギャンは込み上げる笑いを必死になって抑えているが、遂に堪えきれず「あっはっはっはっはっ！」と、爆笑していた。

「はーっ！」と、二郎の口から安堵の吐息が漏れていた。溜息をついたのは、タバサも同じである。今の今まで、息を止めていた。どーっと疲れが押し掛かる。

「脅かしやがる……」

二郎の顔は怒りのため、真っ赤に染まっていた。ぐっと両手をテーブルに着き、立ち上がった。

「ギャン！ 悪ふざけも大概にしやがれ！」

「くつくつくつ！」と笑いを堪えながら、ギャンは玩具の拳銃をテーブルに置いた。

晴彦は興味津々になって、拳銃を見つめている。そっと手を伸ばし、ギャンの顔色を窺うと、銃把を掴んだ。拳銃を目の前にし、晴彦の顔が輝く。

ギャンは、そんな晴彦に一瞥もせず、二郎に向け口を開いた。

「客家二郎ともあろう者が、こんな子供騙しに引っ掛かるとはね……。シャドウとの対決も、危ない危ない。本当に、対決するんですか？」

二郎は喚いた。

「当たり前だ！ ギャン、お前おれに協力するのか、それとも邪魔するのか？ さっさと返答しやがれ！」

【八〇一】

ギャンは肩を竦めた。

「まあまあ、協力しないとは言っていない。わたくしも心ならず？ロスト？した身。現実世界には未練はないが、是非とも、本来の？世界？に振り返りたいものですからね」

「本来の？世界？って？」

タバサが思わず尋ねると、ギャンは不思議な笑みを浮かべて見返した。

「本来わたくしの所属すべき？世界？は【八〇一】です。わたくしは、あそこで夢のような日々を送っていたのです。それが【ロスト・ワールド】の罠に掛かり、こんな有様に……」

タバサの隣でゲルダが「ぷっ」と吹き出した。ゲルダの笑いに、ギャンは明らかに気分を害したようだった。

「何が可笑しいのです！」

「いや……」

ゲルダは呟き、首を振った。面白そうな目付きになって問いかける。

「あんたが腐女子だったとはね！ 成る程、戻りたいはずですねえ」

口調には馬鹿にした響きがあった。

「【ハ〇一】って、まさか『やおい』のこと？」

タバサが口を出す。ギヤンの片頬に薄く、血が昇る。

「なるほど」とタバサは口の中で呟き、一人うんうんと納得して頷いた。十頭身の有り得ないほどのスタイル、背中で咲き誇る薔薇。何から何まで絵に描いたような、少女漫画のキャラクターである。

その時、拳銃を捻くっていた晴彦が天井に向け、引き金を引く。

だあーんっ！

物凄い轟音とともに、銃身からオレンジ色の火花が散る。金臭い火薬の匂いに、天井からばらばらと破片が落ちてくる。

作戦

呆気にとられ、全員の視線が晴彦に集中する。晴彦は平然と、拳銃をコートに仕舞う。

「玩具のはずなのに！」

ギャンが叫んだ。

マンガのキャラそっくりに、目が点になっていた。
玄之丞は肩を竦める。

「晴彦に掛かったら、本物は偽物に、偽物は本物になってしまうのは、普通だよ」

二郎は溜息をついて、感想を述べた。

「そりゃ、まるで仮想現実のことを言っているみたいだな」

ギャンは二郎を見つめ、話し掛けた。

「それで、どういう作戦でシャドウと対決するつもりなんです？
あなたが、今、対決する時期と判断した、最大の理由は？」

二郎は口早に【蒸汽帝国】にシャドウが姿を現した顛末を説明した。

「あの時、シャドウは、その気になれば？^{ゲート}門？から【蒸汽帝国】に乗り込み、支配権を手に入れることもできた。だが、なぜか、シャドウはエミリー皇女を攫っただけで、あっさり引っ込んだ。なぜだ？
なぜ？門？を作り出しただけで、満足したんだ？」

二郎の問い掛けに、全員が無言で首を左右に振る。二郎は会心の

笑みを浮かべた。

「なぜなら、それができなかったからだ！ シャドウは？門？を通過できない。あの？門？は【ロスト・ワールド】の一部だが、あれ以上には外部に広げられない。今のうちは、の話だが」

ゲルダは「今のうち？」と聞き咎める。

二郎は頷いた。

「そうさ、今のうちさ！ 【蒸汽帝国】に開けられた？門？は、まだ王宮前の広場を占拠する程度で済んでいる。だが、そのうち、ほとんど影響範囲が広がり、遂には【蒸汽帝国】の？門？と繋がってしまう！ そうなると、シャドウは念願の【大中央駅】を手に入れることができる。そうなったら最後、どんな攻撃も無力だ。だから？今？のうち、と言ったんだ」

興奮のため、二郎の息は弾んでいた。

ゲルダは首を傾げた。

「なぜ、広げることができないのです？ ？門？を広げるとを妨げている要素は、なんですか？」

二郎はニヤリと笑った。

「おれが何のために、タークに留まるよう命令したと思う？ ？門？を通過するなと念を入れた目的は？」

ゲルダは目を見開いた。

「そうか！ ハビタットを……」

「そうさ、あの時、軍隊が軽拳妄動して？門？に突進したら、ぱくりと罨が閉まって、軍隊の兵士が所持しているハビタットを吸い取られていたところだ。奴の狙いはそれ以外、何もない！今はハビタットは、まだ充分シャドウの手に集まっていけない。あと一息で、シャドウは【蒸汽帝国】全域を支配する影響力を手にするはずだ。その前に勝負を懸けないと！」

二郎は手真似で、皆に集まるよう指示した。
全員の顔が近づくと、二郎の声はひそひそ声になっていた。

「だから、おれたちがシャドウの居城へ侵入するため、奴の注意を引き付けて貰いたい。

定番だが、混乱を引き起こし、奴の注意を引き付けた瞬間を狙って、おれが乗り込む。

一瞬でもいい、奴の注意を引き付けられたら……いや、少なくとも、逸らすことができれば、望みはある……思いたい……！」

牢獄

「誰か、この音を停めて！　お願い！」

暗闇に向かい、エミリーは絶望的な声を上げていた。

シャドウの居城、どここの場所に自分はいえるのか判らない。上の階にいるのか、或いは地下に閉じ込められているのかさえ、判らない。しん、とした闇の中に、エミリーは閉じ込められ、そのまま放置されている。シャドウは完全にエミリーの存在を忘れているのか、一度たりとも訊ねてはこない。

闇の中から「かつち、かつち、かつち」という冷酷な音が響いている。

最初、時計の音がしているのかと思った。

壁をまさぐり、どこかに時計があるのかと探してみた。だが虚しい試みであった。

音のしている場所を探るために、あちこち顔を向けてみる。ところが、音は一定の音量で、しつこく聞こえている。

頭の中で反響しているのだ！　と気付くのは、そう時間は掛からなかった。

壁を必死に手探りするが、出入口は見つからない。完全に、平らな、滑らかな壁面があるだけだ。

床も同じく、継ぎ目のない、平坦な面があるだけである。

手探りした結果、エミリーは自分が閉じ込められているのは、十メートル四方ほどの、完全に正方形をした部屋であることを悟っていた。

天井はどれほど高いのか、この暗闇では判らない。

勢いをつけ、飛び上がってみるが、手は何も触れないから、最低三メートルはありそうだ。

しかし声の反響から、もっと高く　十メートルはありそうな感じをエミリーは感じていた。

つまり各辺十メートルの、立方体の部屋に自分は閉じ込められている、ということである。

譴言

なぜ、シャドウはこんな奇妙な部屋に自分を閉じ込めたのか？
シャドウのやること成すこと、すべてエミリーには謎である。

「あなたを仮想現実世界の女王にする！」と、シャドウは言っていた。

下にも置かない丁重な扱いをするのかと思っていたら、なぜかこんな囚人のような仕打ちである。エミリーは怒り、同時に恐怖を覚えていた。

どうやって自分は、ここに連れて来られたのだろうか？ 最後にシヤドウと会話した時点では、そんな気振りは微かにも見せなかったのだが……。

町を見下ろす部屋の中で、シャドウの目が近々と自分の目を覗きこんでいる場面は覚えている。その後、自分は気を失った。らしい。よく憶えていない。ともかく、次に気付いたら、この暗闇に放り出されていた、という状況だ。

泣き喚き、叫び、壁を何度も手で叩く。そんな儚い抵抗の繰り返し。

総ては虚しい……。

叩いても、壁はびくともせず、ただエミリーの手の平が痛くなるだけだ。蹴っても同じである。徒労感に、エミリーの全身に鈍い疲労が蓄積する。

がつくりと膝を折り、エミリーは部屋の真ん中に座り込んだ。

「お願い……あたしを出して……誰か、助けて……！」

エミリーの声は、うわごと譫言のように取りとめないものになっていく。

感覚遮断

エミリーが手足を投げ出し、床に横たわるのを見て、シャドウは、
北叟^{ほくそ}笑んだ。

もうすぐだ……もうすぐ、エミリーはシャドウの言いなりの心理
状態になる……。

シャドウの居城、最上階の一室に、エミリーは各辺十メートルの
立方体の空間に閉じ込められていた。

壁は透明で、シャドウからはエミリーの姿がはっきりと見てとれ
る。

エミリーを囲む透明の壁は、ガラスではなく、空間を一時的に通
行不可能な領域にさせた、シャドウ特性の檻である。

エミリーの視覚は、シャドウによって完全に遮断され、全く光を
感じることはない。つまり、エミリーにとっては、光のない闇にい
るのと同じである。しかし、シャドウには、エミリーの姿は完璧に
見えている。

「この音を停めて……停めてよう……」

エミリーは虚ろな表情のまま、呟きを繰り返している。

音！

強制切断を知らせる警告音である！

エミリーは知らないのだ。もっとも、生まれてから以降ずっと仮
想現実のみで生活していたのである。知らないのも無理はない。

やがて警告音は、残り時間を知らせる、秒読みに変わる。エミリーにとつては何が残り時間なのか判らないだけに、恐怖は一層ぐんと募るはずだ。

そうならいいよ、シャドウがエミリーに語りかけるのだ。自分を信じよ、崇めよと。暗闇と、完全な静寂の中、聞こえてくるシャドウの声に、エミリーは絶対に抵抗できない。

これは「感覚遮断」と呼ばれる心理学の、洗脳手法である。

完全な暗闇、静寂に置かれた人間は、最初は混乱と困惑に襲われるが、やがて無力感に支配される。無力感あらゆる心理的抵抗を突き崩し、この状態に達した被験者は、他者の洗脳に完璧に従うロボットとなる。

エミリーを取り囲む透明な壁は、音も完全に遮断する。

しかしエミリーの声は、シャドウには聞こえている。言わば音のマジック・ミラーなのだ。洗脳の時が来たら、シャドウは自分の声だけを通過させ、語りかけるつもりである。

エミリーは、生まれ変わるのだ。

仮想現実世界を支配する玉座に座る【ロスト・ワールド】の女王に！

スパイ

シャドウは今まで、何度も【ロスト・ワールド】に迷い込んできたプレイヤーを「感覚遮断」の状態にして、自分の思うがままに操ることのできる、手先としてきた。

手先はシャドウの忠実なスパイとして、様々な？世界？へ送り込まれ、報告を送ってくる。その中に、エミリーの情報もあった。

シャドウ自身は【ロスト・ワールド】から出ることができない。しかし他？世界？の、まだ？ロスト？していないプレイヤーなら、「感覚遮断」の手法で忠実な家来とし、何食わぬ顔で他の？世界？でスパイとして働かせることができる。

こつこつ……と、密やかなノックの音に、シャドウは振り向いた。

ドアを音もなく開き、一人の陰気な男が姿を現した。やや猫背で、つるりとした禿頭、皺んだ色黒の肌に、細い手足。男はシャドウと目が合うと、曖昧な笑いを浮かべた。

「なんだ？」

シャドウの鋭い声に、男は「へっ」と小腰を屈めた。じろり、と手足を投げ出し、床に横になるエミリーを見て「よろしいので？」
というような顔つきを浮かべる。

シャドウは「構わん！」と一声上げ、苛立たしく部屋へ入るよう合図する。

すると音もなく近づくと、男はシャドウの耳に囁きかける。
「？ロスト・シティ？に例の男が姿を……」

シャドウは目を細めた。

「客家二郎か？」

男は大きく頷く。目を見開き、シャドウの命令を待ち受ける。シャドウは質問した。

「それで、奴の動きは？」

「どうやら、ギャンと顔を合わせたようで。何か密談をしている様子です」

「ふつむ……」

つかつかとシャドウは窓辺に近づき、町を見下ろした。

眼下に広がる？ロスト・シティ？の建物は、シャドウの居城側に向けられている壁には窓一つ、設けられていない。また、色とりどりの壁面も、シャドウの側からは無愛想な灰色が広がっているだけである。

その中で、目立たぬ裏通りにギャンのレストランはあった。

ギャンのレストランを見下ろし、シャドウは呟いた。

「ギャン……、か。あいつ、何かあると、おれに逆らってきた。二郎と知己とは知らなかったが、不思議はないな」

ぐい、と背後の男に振り返る。

「で、どのような密談だ？ 内容は？」

男は肩を竦める。

「そこまでは……」

「ふん」とシャドウは顔を背け、嘯いた。

「まあ、どんな計画を思いついたか、想像は付くな。時間は残り少なくなっている。二郎の奴、一気におれとの勝負をつけるつもりだろう」

ニヤニヤ笑いが浮かんだ。シャドウの呟きは、何やらひどく楽しいげである。

「まあ、来るならこい！ 決戦は、おれも望むところだ」

エミリーに視線が移った。

「その頃には、エミリーも完全に生まれ変わる！ いよいよ仮想現実、おれのものに！」

シャドウの薄い唇からは「くくくく……」と、くぐもった笑い声が漏れていた。

バルク伍長

バルク伍長は、そろそろ交代の時間だなど、ちらりと手首の蒸気腕時計の上蓋を持ち上げ、文字盤を見つめ思った。

腕時計には超小型の蒸気エンジンが仕組まれている。

だから、耳に押し当てると、微かに「しゅっ、しゅっ！」というリズミカルなシリンダーの音が聞こえる。

王宮前広場に出現した、異様な渦巻きを見張るよう命令を受け、こうして日がな一日、直立不動で一般人が近寄らないよう見張っている。

伍長は不安な気持ちで、背後の渦巻きを見上げた。

渦巻きはゆっくりと旋回を続け、排水口に吸い込まれる水流のような、しかし遙かに巨大な規模で、広場の上空にしっかりと存在している。

真ん中には、真っ白い光を放つ階段が、渦巻きの中心に向かって伸びているのが見えた。

つい昨日、渦巻きを中心に起きた騒ぎは、はっきりと脳裏に焼きついている。

巨大な怪物のような「シャドウ」と名乗った怪人が、あろうことがエミリー皇女を腕に抱え、哄笑とともに消え去ったあの場面は、帝国軍兵士たち全員が目に見ていた。

直後、奇妙な二人連れがターク首相に何か申し入れ、シャドウが立ち去った渦巻きに誰も近寄らないよう、厳戒態勢を敷くように命

令が下ったのである。

てつきり、渦巻きに突入し、エミリー皇女を救出するものとバルク伍長は思っていた。

同じことを、連隊の総ての兵士は思っていたはずである。全軍に命令を下すガント元帥の、大量の苦虫を思い切り噛み潰したような不満顔は、今でも憶えている。ターク首相直々の命令だから仕方ないが、下士官以下の兵士は全員が不服であった。

もう一度、伍長は背後の渦巻きを見上げる。
やはり、変だ。

初年兵

内心、首を傾げる。

気のせいかな、さっきより直径が大きくなったように感じる。

伍長は素早く渦巻きを中心に、警戒態勢にある兵士たちを見やつた。

皆、無表情で、おのれの任務のみを遂行することだけに余念がなさそうな表情である。

現在、歩哨に立っている場所には、数人の初年兵が訓練通りに背筋を伸ばし、微動だにせず見張りの任に当たっている。

ここは広場の外れで、あまり人通りがないので経験の浅い初年兵たちが配属されたのだ。

多分、自分が一時ぐらい離れても、問題はあるまい……。

伍長は近くの初年兵に「おい」と声を掛けた。

初年兵は「はっ！」と、型通りに身体を伍長にねじ向け、全身を耳にして命令を待ち構えている。

「おれは少しここを離れ、上官殿に報告することがある。あと十五分で交代の時間だが、おれが戻らなくても、交代はできるな？」

初年兵の顔に血が昇った。

「はっ！ ご安心下さいっ！ 伍長殿のお留守でも、自分らは一瞬も油断せず、ここを死守いたしますっ！ 交代要員の申し送りも、できますのでっ！」

伍長は重々しく「うむ……」と頷く。日頃の薰陶の成果である。

「では、行ってくる！ 油断するなっ！」

初年兵たちの見送りの声を背に、伍長は素早く立ち去った。

観測班

伍長の報告に、ライス少尉は顔を上げ、眉を持ち上げた。

「渦巻きが……大きくなっている？」

二十歳をそう過ぎてはいない若々しい顔つきで、蒸気軍士官学校を首席で卒業して、すぐ少尉に任官している。血色のいい肌に、バターのような色合いの金髪をしている青年だ。少々お坊ちゃま臭いところがあるが、伍長の直属上官である。

広場には天幕でできた、応急の観測所が設置され、常に渦巻きを観測している。最新の機器で測量を続け、あらゆる数値が記入されている。観測要員たちをちらと見やり、少尉は再び伍長に注意を戻した。

伍長は直立不動になって叫んだ。

「そうなのであります！ 不肖、このバルク伍長の愚考いたすところ、あの渦巻きは刻々と勢力を拡大しているのでは、と思い、報告に上がりました」

伍長の大声に、少尉は微かに眉を顰めた。

観測要員たちも、一斉に顔を上げ、伍長に視線を浴びせている。

伍長は俄かに注目を浴び、顔を火照らせた。

「少尉、伍長の報告は正しいよ。確かに渦巻きは、徐々にだが、直径を拡大している」

観測要員の一人が、伍長の言葉に同意してくれた。バルクは、ほ

つと微かに緊張が解れるのを感じた。

少尉は唇を噛みしめ、観測員に向き直った。

「なら、なぜ教えてくれなかったのです。伍長がわざわざ持ち場を離れ、報告する前に」

観測員は肩を竦めた。

「これが何を意味するのか、判断する材料が揃っていなかったのですね。一応、我々は慎重を期することを最優先するのだ」

観測員の言葉に、少尉は顔を背けた。

それ故、少尉の怒りの表情は、伍長だけにしか見せてはいない。伍長は内心、少尉の怒りに同意していた。

報告

観測要員は軍に所属していない。全て一般人で構成されている。だから渦巻きの拡大、という重要な事態にも、悠長にデータを採取することを優先するのだ。

少尉は、それまで座っていた椅子から、猛然と立ち上がった。

「渦巻きの拡大の意味は、判りきっている！ 【ロスト・ワールド】が、わが【蒸汽帝国】を本格的に侵略する前兆以外には、考えられない！ 伍長！」

きつと伍長に向き直った。

「おれは、これから上官に今のことを伝達しに行く。お前は引き続き、監視の任に当たれ！ 休憩は、無しだ」

伍長は、さつと敬礼をした。少尉はちよつと考え、質問する。

「ところで、お前の残り時間は？」

勿論、強制切断が起きるまでの時間を聞いているのである。伍長は少尉に、につこりと笑顔を見せた。

「ご安心下さい！ この任務に就く前に、たつぷりと休息を取っております」

わざと「現実世界で」という言葉を省略している。仮想現実で暮らすプレイヤーは、建前上は現実世界と仮想現実を切り離して行動することが習慣になっているからだ。「現実世界」「強制切断」と

いう言葉は、禁句に近い。

少尉は足早に天幕を離れ、王宮へと急いだ。

伍長は再び持ち場に戻った。

執務室

伍長の報告は次々に上官に伝えられ、一時間後には、ガント元帥の許へと上がっていった。

ガント元帥は王宮の司令部に陣取っていたが、渦巻きの拡大という報告に、きりりと怒りの表情に変わった。

牡牛のような唸り声を上げると、巨大な顔面が真っ赤に染まった。ぐつと立ち上がり、どすどすと荒々しく、王宮の廊下を大股で駆け抜けていく。行き先はターク首相の執務室である。

扉を押し開けると同時に「ターク！」と破鐘われがねのように叫んでいた。

「【ロスト・ワールド】に侵攻しなくてはならん！ 今すぐに、だ！」

外を眺めていたターク首相は、ガント元帥の唐突な申し出に、驚きの表情を浮かべた。

「なにを突然に……。言っただけだ。客家二郎の連絡がなければ、我々は動けん、と」

ガント元帥は猛獣のように唸り声を上げる。かつかと頭に血が昇り、今にもタークを絞め殺しそうな衝動に駆られていた。

「そんな悠長なことを言っただけぞ！ 知っているか？ あの渦巻き、どんどん拡大を続けているという報告が上がっている」

タークは渋い表情になった。

「それがどうした？」

「それがどうしたあ……？　それだけか？　あの渦巻きが大きくなつておる、ということとは、即ち【ロスト・ワールド】がこの【蒸汽帝国】を飲み込もうとしている証拠ではないか！　このまま座視する訳にはいかん！　すぐさま、こちらから打って出て、シャドウとか申す怪人を引っ捕え、エミリー皇女を救出すべきだ！」

しかしタークは、首を激しく左右に振るだけだった。

「いかん！　我々は、待つべきだ！」

「盗賊ずれの言葉を信じる、と言うのか？」

ガント元帥の叫びは絶叫に近い。だん！　と足踏みし、タークに詰め寄った。タークは元帥の勢いに怯え、仰け反った。

「君は、どうするつもりだ？　まさか、わたしの命令を無視して？」

拡大

タークの唇が震えていた。ぷい、と元帥は踵を返し、無言で執務室を飛び出した。もう、言葉を遣り取りする段階ではない、と判断したのである。

「ガント！」と背中からタークの焦った叫びが聞こえてくるが、元帥はもう決意を固めていた。

王宮から出てくると、向こうからあたふたと観測所の要員が駆け寄ってきた。

ガントの姿を認め、転げるように近寄ってくる。

「どうした？」

咆哮すると、観測員の顔色が真っ青になっているのに気付く。

「何か渦巻きに変化が？」

声を低めて質問すると、観測員たちは一斉に強く頷いた。顔を上げ、広場の渦巻きを見上げたガント元帥の二つの目玉が、飛び出るほど極限まで見開かれる。

渦巻きは、さらに拡大していた。

たった数分、目を離れた隙に、すでに二倍……いや、三倍は拡大している。

「拡大のスピードが上がりました。先ほどまで拡大しても、それは注意しないと判らないほど小規模なものでしたが、どういう訳か一

気に、あの大きさに。今も拡大の速度は、維持したままです」

唸り声を上げ、元帥は渦巻きを見つめる。確かに、見ているうちに渦巻きは、はつきりと大きくなっているのが確認できる。大きくなって、しかも途中から向きを変えている。

その先は……。

「なんと！ わが【蒸汽帝国】の？門^{ゲート}？を向いているではないか！」

観測員たちは一斉に頷く。

「その通りです！ あの渦巻きは【蒸汽帝国】の？門？を目指しているのかも……」

「なんと言うことだ……」

ガントは呆然となった。はっ、と我に返り、観測員たちに向き直る。

「では、渦巻きが？門？と接触するのか？ どのくらいで接触は、なされる？」

反抗

一人の観測員が、携帯用の蒸汽計算機を持ち出す。

手早くキーを操作すると、計算機から勢い良く蒸汽が噴出して、がちゃがちゃと盛大な音を立て計算を開始した。

やがて計算が終わり、観測員が宣告した。

「計算の結果、約六時間後には渦巻きは？門？と接触します。そう
なると、この【蒸汽帝国】が【ロスト・ワールド】と同じ状態にな
り、我々全員が、現実世界に戻れなく……」

あとは口を噤む。表情に恐怖がありありと浮かんでいた。ガント
は囁き声になった。

「？ロスト？すると言っのか？ 我々、全員が……？」

全員の表情に、ガントは暫し立ち尽くしていた。だが、やがて全
身に沸々と怒りが満ちてきた。

観測所の方に、士官たちが屯しているのに気付き、声を限りに
叫ぶ。

「そこの！ すぐここへ来い！」

士官たちはガントの声に吃驚した表情を浮かべた。まさか元帥が
ここにいるとは思っていなかったようだ。

全速力で駆け寄ってくると、目の前に整列し、敬礼をする。答礼
するのもどかしく、ガントは矢継ぎ早に命令を下した。

「全国民に知らせる！ 用のないものは、すぐさま現実世界へ戻れ、とな！ 【蒸汽帝国】から避難するのだ！ 次に、全蒸汽軍に伝達！ 全ての装備、兵器を集め、可及的かつ速やかに【ロスト・ワールド】に向け侵攻を開始すると！」

士官の一人が叫んだ。

「それでは、首相の命令が出たのですね！」

ガントは素早く首を振った。

「いいや、命令は出ん！ これは、おれの独断だ！ 何か異論でも？」

士官たちは素早く目配せした。先ほどの声を上げた士官が決意の表情になった。

「いいえ！ 何もありません！ 閣下の決意に我々、全面的に賛同いたします！」

ガントは頷いた。

「よし！ では、行け！」

さっと敬礼して、士官たちは一斉に走り出す。腕組みをして見送ったガントは、王宮を振り返った。タークのいる執務室の窓を睨みつける。

「ターク……。たった一度だけだ。たった一度、お前に逆らうぞ！ 悪く思っな」

燃えるような決意に、ガントはいつまでも立ち尽くしていた。

武器

四時間前。

頭の中で声がする。

声は残り六時間を切ったところで「かっち、かっち、かっち」という時計の音に変わって聞こえ始めた。今は三十分置きに宣告しているが、二郎の話では三時間を切ると十分、一時間で五分と段々、間を刻んで聞こえて来るそうだ。

いかにも急ぎ立てられているようで、タバサはじっとしていられなくなる。

？ロスト・シティ？で出会ったギャンという人物は、二郎がシャドウの居城に忍び込むための準備に忙殺され、姿が見えない。

二郎たちはギャンのレストランの貸切部屋に籠もり、ギャンが引き起こすであろう騒ぎに乗じて飛び出すべく、待ち構えている。

ゲルダは町の露店で買い求めた武器をテーブルに並べ、点検に余念がない。買い求めたのは大振りの刀とか、香港映画でよく見るヌンチャクなどの武器である。何でも、拳銃のような複雑な機構の武器は、【ロスト・ワールド】ではあまり使用されていないそうだ。

というより、まともに使用できるような銃器が存在しないのだ。拳銃や機関銃を製造するには、ちゃんとした工場設備が必要だが、【ロスト・ワールド】では恒久的な変化しない土地というのは存在せず、従って設備も作れない。

【ロスト・ワールド】で不変な地域は例外的に、シャドウが居住する？ロスト・シティ？の周りのみである。だから僅かな住民はシャ

ドウの居城近くに家を構え、町を作ってきた。

今まで何度か銃器を製作する工房が設置されたことがあったが、シャドウはそのような武器工房を嫌い、悉く邪魔してきた。シャドウは住民が町を作ることには黙認しても、それ以上の行動は許さないらしい。

町の人間たちは自分たちを？ロスト？させた張本人がシャドウである事実は承知しており、シャドウの近くでなければ、安全に暮らせないことも判っている。

まったく苛立たしい限りで、町の壁がシャドウに背を向けるように建てられている理由も、そんな二律背反の気持ちが見れているのかもしれない。

綾取り

二郎は、じつと腕組みをしたまま椅子に腰掛け、真っ直ぐ前を見たまま、微動だにしない。

いかにも全身に緊張が溢れているようで、タバサは何度か声を掛けようか迷ったが、結局何もできずに、溜息を吐くのが関の山だ。

真葛三兄弟の長兄である玄之丞は、ゆったりと弛緩した表情で、葉巻を燻らせている。

時折、口をポカンと開き、煙の輪っかを吐き出している。煙の輪は、驚くほどしっかりと形を保ったまま天井に向かい、天井にぶち当たると、ほわんと消えていく。その様子を、玄之丞は興味津々といった様子で、まじまじと見つめている。まったく、何が楽しいのか。

知里夫はくっちゃくっちゃと口の中でガムを噛んでいる。時々「ぷーっ」とガムを膨らませ「ぺちん！」と破れたやつを、また口の中に戻して噛み続けた。

晴彦は、いやに熱心に綾取りあやを続けている。

真剣な目つきで、エッフェル塔とか、富士山の形に紐を組み合わせ、一つ完成するたびに、輝くような笑顔を見せる。

タバサと目が合い、晴彦は手にした綾取りを突き出した。タバサに相手して貰いたいのだ。

退屈しのぎにタバサは「いいわよ」と答え、晴彦の前に椅子を置

いて向き合った。

差し出された綾取りを受け取ると、晴彦は目も止まらぬ素早さで紐を組み合わせる。紐は白と黒の二本の色でできている。目まぐるしく紐が組み合わされ、ある形を作っていく。作り出される形に、タバサは目を見張った。

シャドウの顔が作り出されていた。顔は黒く、髪の毛は白い。晴彦はタバサから綾取りを受け取ると、両目の部分に自分の目を押し付け、タバサの顔を覗きこむ。口の形がニヤニヤ笑いを形作っているのが不気味である。

「あんた、シャドウを知っているの？」

晴彦は首を左右に振って否定した。くると綾取りを引っくり返すと、白と黒の糸が反転していた。二郎を見やる晴彦の目の動きにタバサは呟いた。

「それ、二郎の顔じゃない？」
晴彦は頷く。

その時、ギャンが部屋に入ってきた。音もなく、影のように滑り込んだギャンは、かつたるそうに呟いた。

「準備完了だ……。ちよつとした騒ぎを起こす。あとは、あんたらの仕事だ……」

それまで身動きもせず椅子に腰掛けていた二郎が、かつと目を見開く。ぐっとギャンの顔を見上げ、強く頷いた。

「恩に着るぜ、ギャン！」

ギャンは薄く笑った。

「幸運を……。それとも悪運ハード・ラックかな？」

二郎は肩を竦めて立ち上がった。

「どっちでも構わんよ。さあ、行くぞ！」

二郎に促され、一同は神輿みこしを上げる。

人形

ギャンのレストランから外に出た一同は、驚きに立ち竦んだ。

「シャドウだわ！」

タバサが大声を上げた。

ゲルダはぎくりと空を見上げ、二郎は目を見開き、驚きに口をポカンと開けている。

【蒸汽帝国】に現れた、巨大化したシャドウの姿が目飛び込んでくる。真っ黒な肌に、雪のように白い頭髮。真っ赤な口を開け、不気味なニタニタ笑いを浮かべるシャドウは、？ロスト・シテイ？全体を睥睨するかのように目を足下に向けている。

しかし二郎はシャドウを見つめ、ケタケタと高笑いを上げた。

「違う！ あれは操り人形だよ！」

「え？」

タバサは、改めて眼前のシャドウを見上げ、納得した。

そうだ！ あれは操り人形に過ぎない。

よくできているが、手足の先に長い棒がくっついて、棒の先には数人の人間が取り付いて、いかにも本物の人間のように操演していた。

ふわり……と音もなく人形のシャドウは片足を上げ、踏みしめる。

もう一方の足も続けて上げ、巨大な人間が歩いているように動いていた。

騒ぎ

玄之丞は興味深げに人形を見上げ、葉巻を吹かす。

「ほほお……。あれがシャドウの姿かね？　なるほど、良くできて
いるわい！」

二郎は笑い崩れている。

「ギヤンの奴、何を考えている？　確かに、おれは、騒ぎを引き起
こせとは頼んだが！」

途端に陽気な音楽が響き渡る。聞いているだけで手足が動き、勝
手にリズムを刻んでしまいそうな　　そうだ、これはサンバのリズ
ムだ！

じゃーん、じゃーんという金属的なシンバルが響き、トランペツ
トなどの金管楽器が、高らかに鳴り響く。通りを目にも鮮やかな衣
装を纏った男女が、激しいリズムとともに、舞い踊りながら練り歩
いていた。

行列の先頭にはギヤンが満面の笑みを浮かべ、得意満面に歩を進
めていた。住民が次々に声を掛けると、大仰に頭を下げ、挨拶を返
していた。

ギヤンは何のつもりか、シルクハットを被り、手にはステッキを
持って歩いている。身に着けているのは、真っ白な燕尾服。相変わ
らず、背中には派手な薔薇の花が咲き誇っていた。

玄之丞は「うほほほほ！」と妙な笑い声を上げた。

「成る程、確かに騒ぎであるな！　それも、大変な騒ぎであるわい！」

町の通りを、リオのカーニバルが行過ぎる。

様々な着飾った行列が、煌びやかな山車^{だし}を引いて、延々と伸びていた。

町の窓からは、突然の騒ぎに驚いた住民が顔を突き出し、何事かと見物をしていた。扉を開け、住民たちは目を輝かせて、パレードと足並みを揃えた。

先頭は巨大なシャドウの人形で、その後ろを次から次へと山車が続いている。パレードは、どうやらシャドウの居城へと向かっている様子だ。

パレード

「おい、ボケっとしている暇はないぞ！」

二郎がくるつと一同に振り向き、叫んだ。

「さあ！今のうちシャドウの居城へ向かうんだ。パレードに城の連中が気を取られる今こそ、忍び込むチャンスだ！」

二郎の言葉に全員が頷く。二郎は小走りに町の裏道を縫いながら、シャドウの居城へと近づいていった。

丘を駆け上がっていくタバサは、ときどきしていた。横をちらりと見て、パレードを確認する。

パレードは丘の踏み分け道をそろそろと行列を作っていた。先頭のシャドウの人形が、ふわりふわりと奇妙な足取りで歩いていく。遂に居城の正面に達した。

二郎たちは居城の側面に集合し、じっと見守る。興奮に、タバサは息が苦しい。

ぴたりとパレードが静止し、音楽が止まった。静寂の中を、ギャンが堂々とした歩みで居城に近づき、手にしたステッキを上げると、いきなり壁を叩き出す。

「【ロスト・ワールド】の支配者にして、暗黒の帝王！シャドウ殿に？ロスト・シテイ？の代表であるギャンが物申します！ご開門をお願いします！」

大声を上げた。

「何するつもりかしら……」

「しっ！ 黙って見ている！」

タバサが思わず呟くと、二郎はさつと指を拳げ制止する。

だんだん！ だんだん！ と、ギャンは辛抱強くステッキで壁を叩き続けている。

「煩いぞ！ 何の騒ぎだ！」

頭上から声が降ってきて、ギャンは顔を上げた。にんまりと会心の笑みが浮かぶ。

「これはこれは……シャドウ殿、御自らお出ましとは、光栄至極……」

シャドウが姿を表していた。しかも、空中に。

挨拶

シャドウは、居城から数歩の空間に、何の支えもなく、空中に浮かんでいる。

僅かな微風に、シャドウの長い髪がふわふわと揺られていた。シャドウはパレードの先頭に立っているおのれの姿を真似た人形を見て、顔を顰めた。

「そいつは、おれか？ 何という悪い冗談だ。ギャンよ、あんたはこんな悪趣味な冗談を喜ぶような、低級な人間ではないと思っただが、見損なっただな」

ギャンは宮廷の挨拶を真似、大きく腕を振って膝を屈し、頭を下げる。

「いえいえ、そのような意図など毛頭ありません。我々？ ロスト・シティ？ 全員の、シャドウ様への心からの敬意を表したく、ただその一念のみで御座います」

立ち上がると、さっと手を上げる。半裸の女性たちが小走りに前へ出、シャドウへ愛の賛歌を歌い上げる。内容は悩ましく、露骨なものだった。半裸の腰をくねくねと動かし、挑発的な目付きで色っぽく誘う仕草を見せる。

シャドウの眉が見る見る険しくなり、怒りの表情を浮かべた。

「やめろ！ 貴様ら……おれを虚仮こけにしおって……！」

咆哮し、両手を上げ指先を猛禽のように曲げると、指先から真っ赤に燃える炎を噴き出させる。炎は矢となり、張りぼてのシャドウの人形を目掛け、ミサイルのように飛んだ。

ずばーん！ と物凄い音響を立て、シャドウ人形は一気に燃え上がった。

操演していたプレイヤーは、燃え上がる火炎に慌てて棒を離し、逃げ惑う。

「お前ら、目障りだ！ 今まで目^め溢^{あふ}しをしてやったが、もう我慢ならん！」

シャドウはぐつと全身に力を込めると、ぐーつと身体を巨大化させた。

ずしん、と音を立てシャドウの両足が地面を踏みしめた。今まで張りぼての人形が存在した場所に、今度は本物の巨大化したシャドウが立っている。

悲鳴がパレードの参加者から上がった。

怒りの表情で突き進むシャドウから必死になって遠ざかり、町へと逃げ帰る。

ギャンは顔色を変え、くるりと背を向け逃げ出す。ちらりと背後を振り返り、二郎の隠れている方向を見やる。

唇が歪み、皮肉な笑みが浮かんでいた。

まるで「うまくやれ！」と二郎に語り掛けているようだった。

梯子

二郎は聳え立つ灰色の壁面を見上げる。

のつぺりとして、何の装飾も施されていない壁面には、手がかり一つ見当たらない。侵入者を頑と拒んでいるようだった。

「どうやって潜入するの？ また、ティンカーに入口を作らせるの？」

タバサが質問すると、二郎は短く首を振って答える。

「いや！ あれは、ここでは使えない。シャドウは？ パンドラ？ の初期バージョンを保持しているから、プログラムの書き換えは瞬時にバレル」

二郎は壁面を見上げた。

壁にはところどころに窓があるが、壁面のかなり上のほうにあるため、手が届かない。壁には手がかり一つないため、登攀もできない。

またティンカーの発条仕掛けで飛び上がるつもりだろうか。あれは苦手だ。

タバサがそんなことを考えていると、やっぱり二郎はティンカーをポケットから飛び出させた。ティンカーはくると発条の形になって、待ち構えている。

と、晴彦が窓を見上げ、コートの前を開いた。

なにをするのだろう……と、タバサが見守っていると、晴彦はコートからすると梯子を引き出す。

梯子は晴彦のコートからずんずん伸び、遂には十メートルほどになつて、窓に達した。

「まあ、このほうが、少しは文明的ではあるな」

玄之丞は快活に宣言すると、素早く梯子に手を掛けた。するとゲルダが玄之丞を制し、首を振った。

「ここは、あたしが先に上るわ!」

真剣な表情になつて梯子を登り始める。
程なく梯子の先端に達すると、窓に手を掛け、用心深く内部を覗き込んだ。手にはナイフを構えている。下を見て、頷いて見せた。

「大丈夫、誰もいない!」

小声で叫ぶ。二郎は肩を竦め、ティンカーを納める。

「まあ、こつちのほうが、安全かもな」

率先して梯子を上り始めた。玄之丞、知里夫と続いて登っていく。晴彦は梯子を支え、タバサの顔を見て合図した。

潜入

ごくり……と、タバサは唾を呑みこんだ。

ティンカーの発条仕掛けは回避できたが、今度は見るからに心細い貧弱な梯子を登らなくてはならない！恐る恐る梯子を掴み、登っていく。

下を見ちゃ駄目だ！ 上だけを見るんだ！

自分に言い聞かせ、必死の思いで登っていく。膝は震え、梯子を掴む手の平には、じつとりと粘っこい汗が滲んだ。窓枠に手が掛かると、二郎がぐいつと腕を伸ばし、タバサの腰の辺りを掴んで持ち上げた。軽々と持ち上げられ、部屋の中へ転げ込んだ。

ふう……と、溜息が漏れる。

晴彦は、どうしたのだろうか？

窓から覗き込むと、晴彦はさっさと梯子をコートに仕舞い込み、につこりと空を見上げて笑い掛ける。今度はコートから、ボンベを取り出し、ゴム風船を膨らませている。ふうっ、とゴム風船が膨らむと、晴彦は風船に紐を巻きつけ、握りしめた。

そのまま、ふわふわと上昇していく。澄ました表情で登ってくる、と、ゆっくりと反動をつけ、窓枠に足をつけた。ぱっと指を離すと、風船はあっという間に上昇して、真っ赤な空に小さくなって消えていく。

「ずるいわよ！ あんただけ楽しんで！」

タバサは晴彦を睨みつけた。晴彦は罪のない天真爛漫な笑顔になつて、肩を竦めた。

「そう喚くな。気付かれるぞ！」

二郎が顔を顰め、割つて入る。

タバサは慌てて口に手を当て、周りを見渡す。

潜入した部屋は、壁面と同じく、何の飾り気もない、がらんとした場所だった。家具一つすら、見当たらない。

「ここは、何の部屋？」

「知らん」

二郎は無然と答える。まじまじとタバサが二郎を見ると、肩を竦めた。

「シャドウの居城は、外から眺めるだけだったからな。何しろ愚図愚図していたら、こつちが？ロスト？してしまうから、ここまで来たことは全然ないんだ。シャドウの奴、自分の住処を飾り立てる趣味はないと見える。まあ、おれ自身そんな趣味はないから、当たり前とはいえるな」

タバサは窓から顔を突き出した。

巨大化したシャドウが、ギャンのパレードの真ん中に飛び込み、暴れ回っている。パレードに加わっていたプレイヤーたちは、悲鳴を上げ、ただ逃げ惑っているだけだ。

罾

「大丈夫かしら、あのギャンって人？」

二郎がタバサに並んで見物しながら、口を開いた。

「あいつなら、心配ないさ。シャドウが暴れこんだ時に、真っ先に逃げ帰っている。それより、そろそろシャドウの奴、こっちへ注意を向ける頃だ」

タバサは二郎を睨んだ。

「あんた、シャドウのことなら何でも知っているのね！」

二郎は顔を背けた。

「まあな。何しろ、あいつは、おれの分身だから。どっちにしろ、おれたちが易々と忍び込めたのも、奴がわざと誘い込んだと言える」

二郎の言葉に、ゲルダは一步、憤然と前へ進み出た。

「わざと？ それでは、罾ですか？」

「そうさ。おれが【ロスト・ワールド】に潜入したことは、奴もとうに気付いているはずだ。おれが何を狙っているかも承知の上で、ギャンの騒ぎに乗って見せたんだ。お互い、狸と狐の化かし合いってこと！ どっちが狸か、狐か……どっちが相手をうまく騙せるか……これは、そんな勝負なんだ」

淡々と語る二郎の言葉に、タバサはくらくらと目が回る思いだった。タバサ以外の、全員は二郎の説明に、平然と頷いている。

ぴょん、と二郎のポケットからティンカーが飛び出した。金属球

の表面に漣が波立ち、御馴染みのきんきん声で話し掛ける。

「二郎さま！ 下の階から【蒸汽帝国】に出現した？ 門？ と同じ空間特性を感知！」

二郎は鋭くティンカーに向き直る。

「あの？ 門？ があるのか？」

ティンカーはぶんぶんと二郎の周りを飛び回った。興奮しているのか？

「そうです！ 恐らく【蒸汽帝国】に直結していると思われます！ あっ！」

ティンカーの形が変化し、無数の棘が飛び出したハリセンボンのような形状になる。

「大量の質量の移動を感知！ もしかしたら【蒸汽帝国】から侵入があるのかも！」

「何いっ！」と二郎は大声を上げた。

さつとゲルダを見つめ、叫ぶ。

「危惧していたことが現実になった！ 奴ら、辛抱できず、向こうからこつちへ来る！」

ゲルダは蒼白になり、拳を握りしめる。

仕上げ

パレードを追い散らかし、シャドウはぐるりと自分の居城に向き直った。

すると巨大化した体が縮み、元の大きさに戻る。すでにギヤンたちは、這々の体で逃げ帰り、辺りには誰もいない。

シャドウは「くくっ！」と小さく声を発し、唇を持ち上げて笑いの表情を形作った。

今の騒ぎで二郎の奴は、内部に潜入したはずだ！
いいいよ、決着をつける時が来た。

悠々とした歩みで自分の居城に向かい、とんと地面を蹴って、空中へ浮かび上がる。

ここは、シャドウ自ら作り上げた【ロスト・ワールド】だ。物理特性など、簡単に無視できる。二郎は外部からのプレイヤーだから、他のプレイヤーと同じ条件でシャドウと戦わなければならないのだ。二郎の狙いは、シャドウの所持する？パンドラ？初期バージョンに決まっている。

恐らく、修正プログラムを持ち込み、バグを修正するつもりだろう。そうなれば【ロスト・ワールド】は他の？世界？と同じになり、プレイヤーは外の？世界？に自由に出入ができる状態になる。

しかし、二郎の狙いを許す訳には断固いかない！
プログラムが修正されれば、もうシャドウの思い通りに【ロスト・ワールド】を操れなくなる。

すーっ、と空中を立ったまま居城へ向かい、壁に空けられた窓か

ら内部へと降り立つ。

素っ気無い室内に、エミリー皇女が床に倒れている。すでに気絶しているようだ。長い金髪が、金色の波のように広がっている。

シャドウはエミリーを閉じ込めている透明な壁を腕の一振りで消去し、倒れている皇女の横に歩み寄った。

膝を突き、背中に手を滑り込ませ、上半身を起こし、立てている膝で支えてやる。エミリーの顔を覗きこみ、囁きかけた。

「エミリー……皇女……おれだ、シャドウだ！ 目を覚ませ！」

ぱちぱちとエミリーの瞼が痙攣し、真っ青な瞳が見開かれた。きよきよと辺りを見回し、恐怖の表情を浮かべる。

「誰？ 誰なの？」

シャドウは勝利感に顔を綻ばせた。完全にエミリーは他者に依存する心理状態になっている。もう、シャドウの思い通りになるだろう。

ぶるぶると震える手で、エミリーは両耳を抑えた。

「この声は、何？ 残り時間が一時間を切った……って、何？ ねえ、この声を止めて！」

シャドウは優しいげな声を作った。

「もうすぐ声は止まる。お前が？ ロスト？ すればな……」

錯誤

ぎくりと、エミリーは硬直した。よろよろと立ち上がり、手を空間に伸ばす。

「その声は、シャドウね！ あたし……何も見えない！ ここは暗闇じゃなくて、あたしの目が見えなくなったの？」

シャドウは感嘆した。

驚くべき推理力。混乱し、恐怖に襲われているはずなのに、冷静に今の状況を分析している。

「そうだ。だが、おれが、お前の目を元通りにしてやる！」

ぱちり、と指を鳴らす。

「はっ！」とエミリーは息を吐き出した。顔を手の平で覆い、眩しさに目を瞬く。ゆっくりと周囲を見回し、視線がシャドウに向かった。

「シャドウ……あなた……」

シャドウは立ち上がり、じっとエミリーの目を見つめた。エミリーは目を逸らすことができず、じっと見つめ返す。

「もうすぐ、お前は？ ロスト？ する。怖いかね？」

緩やかにエミリーは首を振った。滑らかな金髪の髪が、流れるようにふわりと揺れた。ぼうつとした表情のまま、憧れるような目つきになる。

「怖くはないわ……。でも？ロスト？すると、どうなるの？」

あどけない、童女のような声音になっている。
シャドウは頷いた。

「お前は、自由になる。お前の本当の实体が縛られている現実世界の軛から離れ、ここ【ロスト・ワールド】で、女王として君臨するのだ！ どうだ、素晴らしいじゃないか？」

「自由に……あたくしが、自由に……？」

小首を傾げる。

シャドウは眉を僅かに顰めた。反応が違う！　すでにこの段階では、エミリーはシャドウの言葉に全面的に同意しなくてはならないのに！

エミリーの頬に血が昇り、目が見開かれた。

「違うわ！」と叫ぶ。

「あたしは【蒸汽帝国】の皇女です！　あたしの戻る所は【蒸汽帝国】しかありません！」

「エミリー！」

シャドウは絶叫した。

馬鹿な！　こんなはずでは……！

行進

時間は少し過去に戻る。

二郎たちがシャドウの居城へ潜入するため待機していた頃、【蒸汽帝国】では、ガント元帥の命令により、帝国軍機動部隊が【ロス・ワールド】攻略のため、続々と王宮前広場に集合していた。

「いよいよ、始まりやがったぜ！」

バルク伍長は嬉しげな声を上げた。今までシャドウとか名乗る怪人が設置した？門^{ゲート}？を、ただボケつと馬鹿のように監視する任務を与えられていただけだった、これで意味のある行動に移れる！

伍長と同じ意見の者は帝国軍兵士たち、全員の総意でもあった。何しろ監視任務というのは退屈極まりなく、兵士たちの最も嫌うシチュエーションである。

「伍長殿。我々の装備は、これで宜しいのでしょうか？」

部下の初年兵が不安そうな顔つきで尋ねてきた。伍長は眉を上げ、話しかけてきた初年兵を見つめた。背後に同じ年度の兵士たちが、もじもじと決まり悪そうに待機している。

全員、帝国軍から与えられた蒸汽機関銃、蒸汽手榴弾、蒸汽突撃銃、蒸汽迫撃砲、蒸汽拳銃を装備している。伍長は快活な声を上げた。

「当たり前だ！ 我が蒸汽軍は、全ての仮想現実で？世界？イチイ

「イイ……と！ 訓練で教えられなかったのか？」

「はあ……」

初年兵たちは益々不安そうな声になる。

無理もない。なにしろ帝国軍が実戦を経験するのは、これが初めてなのだ。他の様々な戦場を舞台にした？世界？では、二十四時間休むことのない戦闘が続けられているが、【蒸汽帝国】の軍隊は、言ってみれば装飾である。

十九世紀末の英国をモデルにする際、最強の軍隊を保持するのは当然のことだったが、何しろ戦争する相手が存在しないのだ。

【蒸汽帝国】創立の頃、敵国も必要ではないかという意見が出たが、肝心の敵国人としてプレイする人間が誰もいなかったので、仕方なく諦めた経緯がある。

誰も悪役はやりたくなかった、ということだ。

しかし軍隊のパレードは市民の熱狂するところで、帝国軍は何か機会があれば、度々軍事パレードを開催して、磨き上げた装備、派手な軍装、一糸乱れぬ行進などを、市民の前で披露していた。今も、その成果が目の前を通り過ぎていく。

軍靴

ざつ、ざつ、ざつ！ と、百人の軍靴が石畳を踏みしめ、百人の兵士の腕が一つの動きとなって振り回される。

銀色の輝くヘルメットは日差しに煌き、銃剣つきの蒸汽突撃銃は兵士の肩に逞しい重みを感じさせている。

百人の行進が通り過ぎると、また次の百人が通過する。その後ろから、奇妙な形の機械が近づいてきた。

がちゃがちゃと、無数の機械の足が波のような動きをさせている。真鍮製のボディをした、蒸汽百足の登場だ！

荒れ地用に開発された、百足そっくりのロボットで、シャドウの？門？から伸びている白光を放つ階段を登るために、特に用意された装備である。

勿論、人間が乗り込み、操縦するのである。

行進を見送りながら、バルクはここに見物の市民が一人もいないことが非常に残念な気分だった。市民および、外部からのプレイヤー全員に対して退避命令が出て、【大中央駅】か、あるいは現実へと戻っていった。そのため、シティには志願した警察官、消防団員しか残っていない。

「バルク伍長！」

パレードと並行して、上官の少尉が近づきながら伍長の名前を叫ぶ。バルクは、きりつと少尉に向き直り、さつと敬礼をした。

「全員、揃っているか？」

判りきったことながら、少尉は質問する。全員がその場にいることは、一目ちらつとも見れば判るのだが、これも教本通りである。

伍長は「はっ！ 全員、異常なく、装備も完全に揃っております！」と、決まり通りに答える。少尉は頷いた。

「よし、我が小隊は、本隊に合流、【ロスト・ワールド】攻略作戦に参加する！ 従いてこい！」

言い捨てて、背を向ける。バルクは初年兵たちに「来い！」と合図して駆け出した。

興奮に、バルクの胸が高鳴った。実戦だ！ 本物の戦いなのだ！

通告

帝国軍の行進を前に、ターク首相は唇を噛みしめた。

ガント元帥は、遂に首相の命令を待たず、独断で軍を率いて【ロスト・ワールド】に侵攻を開始するつもりだ！

堪らずタークは、王宮を飛び出した。

するとタークの目の前に、数人の、完全武装の兵士が立ち塞がった。兵士の声は顔を覆うマスクで、くぐもって聞こえていた。

「ターク閣下！ 貴殿は王宮から離れてはならぬ、と元帥閣下の命令です。すぐ王宮内にお戻り下さい」

口調は丁寧だが、手には蒸汽突撃銃を抱えている。銃口は向けられていないが、タークがあくまで押して通ろうとすれば、向けるだろう。

タークは、ぐっと拳を握りしめる。

「わしは首相だぞ！」

兵士は頷いた。

「判っております。しかし、閣下の命令なのであります」

「そのガントに命令を下すのは、わしなのだ！ わしの命令が、元帥の命令に優先するということは、子供でも判る理屈ではないか？ さあ、そこをどくのだ！」

「いえ、いけません！」

兵士は頑として聞き入れない。兵士を睨むタークの額から、大粒の汗が噴き出した。

パレードは延々と続き、豪華な装備の、司令専用の軍用無蓋車が近づいてくる。軍用無蓋車に乗る元帥の姿を見て、タークは叫んだ。

「ガント！ おれだ！ 止まれえ！」

自分でも驚くほどの大声が出た。

無蓋車で上機嫌でいたガントは、タークの方に顔をねじ向ける。たちまちガントは思い切り渋面を作り、渋々ながら手を挙げ、行軍を停止させた。

小山のような体躯が動き、ドアが開き、ガントの靴底が地面を踏みしめる。

のし、のし……とガントの巨体が王宮前の広場を横切り、出口前で睨みつけるタークの前に近づいた。さっと軽く手を振り、タークの前に立ち塞がっていた兵士たちを去らせると、ガントは重々しく口を開いた。

「ターク、諦めろ。作戦は始動したのだ。もう、お前には止められん」

「国会の承認なしだぞ！　これが済んだら、ガント、お前は罷免だ！　いや、もつと悪い結果になるかもしれん」

時間

ガントは大きく眉を上げ、続きを待ち受ける表情になる。

「もつと悪い？ 何だ、それは？」

タークは押し殺した声を出した。

「【蒸汽帝国】からの追放だ！ お前は二度と、この【蒸汽帝国】に足を踏み入れることを許されない！」

仮想現実の？門^{ゲート}？に特定の「好ましがらざる人物」設定をすることにより、立ち入りを遮断するのである。滅多に行われないが、現実世界では死刑に近い極刑であった。

だが、ガントの顔に浮かんだのは、抑え切れない笑いの衝動であった。唇が震え始め、大きな肩が波立つ。遂にガントは爆笑した。

「だーはっはっ！ 追放か！ これは面白い！ 何年ぶりかで聞いた、極上の冗談だ！」

身を折り曲げ、顔を真っ赤にさせて「ひいひい、はあはあ！」と荒々しい呼吸で咳き込みながら笑っている。

太い腕を伸ばして、タークの肩を思い切り、ぶっ叩く。

勢いで、タークは軽々と吹っ飛び、兵士が慌てて転がるのを支えてくれた。

不意に真面目な表情に戻ると、ガントは両手を腰に当て、立ちただかった。

「ターク！ 今更そんな脅迫、無駄にも程がある！ 皇女を救助できなければ、この【蒸汽帝国】の存在自体が、意義を失うのだぞ！」

よろよると立ち上がったタークは、両目に思い切り怒りを込めてガントを見上げた。

「だったら、おれを連れて行け！」

ガントは「はあ？」と間抜け声を発し、ポカンとした顔になった。タークは叫んだ。

「おれを同行させる！ こうなったら、王宮で待っているわけにはいかん！」

「むう……」

ガントは口をへの字に曲げた。じろり、と横目でタークを睨む。

「判った……。同行を許す」

低く呟いた。

「一緒に来い！」

タークは立ち尽くしていた。

ガントは大声を上げた。

「何をしている？ 時間がないのだぞ！」

タークはガントの大声に、びくんと電流が走ったように全身を奮わせた。急ぎ足で車に戻るガントの後を追いつ、走り出す。

そつとタークは、ズボンのポケットを上から押さえた。

ポケットの中には、二郎から受け取った修正ディスクが入っている。

時間がない……。

まさしく、ガントの言うとおりだ。今や皇女エミリーの、強制切
断の時間が迫っているのだ！

突撃！

渦巻きは、さらに巨大化していた。

すでに【蒸汽帝国】の？門？がある、ビクトリア駅に半分くらい、達している。渦巻きの中心には、白く発光する階段が天に伸び、黒々とした闇に溶けている。

かつて帝国劇場があつた場所には、今は奇妙な結晶がびっしりと天を刺して伸び、華麗な色合いの石畳は、ぬめぬめとした質感の滑らかな丘に変わっている。

「学者の言うには、ここはすでに【ロスト・ワールド】の一部になっているという話だ。あの結晶の森も、丘も、あちら側の？世界？と同じらしい」

司令車の後部座席から、ガントは王宮前広場を指差し、解説した。口調は忌々しげで、表情は険しい。

隣席のタークは、無言で深く頷いた。

軍隊は整列を終え、すぐにでも動き出す寸前であつた。司令車に乗ったまま立ち上がったガントは、思い切り息を吸い込み、叫んだ。

「全軍、侵攻せよ！」

演説も何もない、素っ気無い一言であつたが、ガントの一声に、蒸汽軍は一個の生き物のように整然と動き出す。

前列の蒸汽百足の隊列が、無数の金属の足を、がちやがちやと騒

がしく音を立てながら進み始める。ボイラーは一杯に出力を上げ、百足の全身からは盛んに白い蒸気が噴出していた。

百足の後方からは、徒歩の兵士たちが緊張した表情で歩き出す。

「マスク、下げるーっ！」

小隊長たちが、部下に向かって叫ぶ。命令に、兵士たちはヘルメットの覆いを下げた。

兵士たちの姿は、奇怪な、ロボットのような印象に変わる。背中には小型蒸気供給装置を背負っている。装置からは太いパイプが手にした蒸気突撃銃に接続され、恐るべき威力を秘めた蒸気弾を発射する準備ができている。

急な階段を、蒸気百足がするすると登っていく。後から兵士たちが、軍靴の音もけたたましく、大股で続いた。

突撃喇叭^{ラッパ}が静寂を切り裂いた。

喇叭の音に、兵士たちは一斉に「うわーっ！」と喚声を上げた。興奮に、兵士たちの頭からは、今まで受けた訓練や規律は、焼けたフライパンの上の一滴の水のように、呆気なく蒸気と化していた。

音

もはや統制など、どこにも見当たらない。

兵士たちは各々、煮えたぎる憎しみと、勝利への確信を胸に、我先に階段を登っていく。

「馬鹿者！ 列を乱すな！ 勝手に動くんじゃない！」

喧騒の中、ガントは顔を真っ赤に染め、怒鳴り散らす、生憎と、唯の一人も聴いちゃいない。

ガントは怒りに、下唇をぎりぎりぎりとしめした。隣で座っていたタークは「実戦を経験していない軍隊の弱点が顕わになったな！」と、どうにか冷静に観察していた。

ガントは運転手に怒鳴り散らした。

「糞！ こうなったら、おれたちも続くぞ！ 全速力だ！」

運転手の兵士は一つ頷くと、アクセルを全開にさせた。弾かれたように司令無蓋車が飛び出し、階段が見る見る近づいた。

どすん！

車の前輪が階段にかかった。

ぎゅるぎゅるぎゅる……！

無蓋車の蒸汽エンジンは出力を最大に上げ、全ての車輪に動力を供給する。

さすが軍用である。蒸汽の百足ほどではないが、無蓋車は階段を、がたごとと車体を揺らしながらも、着実に登攀していく。

無数の兵士たちと蒸汽百足たちに揉みくちやにされながらも、ガントとタークを乗せた司令無蓋車は、急角度の階段を攀じ登っている。

大半の兵士たちが階段に取り付いた頃であろうか。突然、後方から何かが閉ざされたような「ぴしゃんっ！」という音が響いた。

タークは鋭く首を回し、後方を確認する。

何もない！

王宮の建物も、シティの偉容も総て、消えうせていた。

あるのは、白く輝く階段が闇に溶け込んでいる光景だけである。振り仰いで階段の上を見上げても、同じ景観があるだけだ。

「ガント、我々は閉じ込められたぞ！　これは、罠だ！」

出口無し！

「何いつ！」

ガントは二つの目玉をぎよろりと飛び出さんばかりに見開き、タ
ークの言葉を確かめようと、忙しく前後を確認する。

「王宮は……シティは、どこに消えた？　ここは、どこなのだ？」

怒鳴り散らすガントに向かって、一人の兵士が泡を食って近寄っ
てくる。

「閣下！　我々の武器が突然、機能しなくなりました！」

敬礼もそこそこに、前置き抜きに報告する。

兵士の報告に、ガントは立ち尽くした。

ぱくぱくと口だけが忙しく蒸汽ピストンのように開閉するが、唇
からは何も言葉は発せられない。

恐らく、ガントは思いつくありとあらゆる悪態をついているのだ
ろうが、禁止語なので声にならない。

猛牛のような唸り声を上げて、ガントは目の前の兵士の武器を取
り上げた。素早く棹桿を引き、銃弾を送り込む。引き金を引き絞る。

がちっ！　と撃鉄が食い込む音がしたが、何も起きない。

あれ程の喧騒が、今は欠片も聞こえていない。兵士たちは青ざめ
た顔を見合わせ、呆然と立ち尽くしていた。運転手が顔を上げた。

「閣下！ この車も動かなくなりました！」

「まさかっ？ 燃料はあるのか？」

ガントの問い掛けに、兵士は激しく首を振る。

「いいえ、燃料ではありません。肝心の、蒸気ボイラーの火が消えてしまったのです！ 理由は判りません。突然、総ての蒸気動力がゼロになってしまいました！」

ガントとタークは目を見合わせた。

タークの凝視に、ガントは目を逸らす。

タークは声を震えるのを必死に押さえ、ガントに語りかけた。

「あれ程はつきり言ったではないか！ 客家二郎は【ロスト・ワールド】の？ 門？ は、畏の可能性が高いと！ これは、畏だ！」
ガントは、もごもごと口の中で答える。
「では、ここは、どこなのだ？ 我々は、どこにいるのだ？」

タークは目を細める。

「決まっているではないか。判らんのか？」

ガントはぐい、とタークに顔を近づける。

「貴様には判っているとでも？」

「ああ、判っているさ」

タークは深く頷いた。

「我々は【ロスト・ワールド】に引き込まれたのだ。ここは【ロスト・ワールド】だよ」

彷徨

「畜生！ どこに【パンドラ】のプログラムは隠してあるんだ！」
苛々と二郎は叫んでいた。目は血走り、追いつめられた表情が浮かんでいる。

シャドウの居城内部を、さ迷うように二郎たちは延々と歩いている。

居城内部は、どこまで行っても無装飾の、灰色の壁が続いているだけだった。目印になるようなものは、何も見当たらない。

居城内部においては、部屋と通路の境は、ほとんど考慮されていないようだった。

広々とした空間が部屋として使用されているらしく、時々そんな場所に申し訳程度に家具や、何かの道具を納めた木箱などが忘れ去られたように積み上げられている。

細長い空間は通路で、ひどく天井が高い場所があると思えば、このように姿勢を低くしないと歩けない箇所もあった。

窓も同じで、たまたま建物を構成しているブロックが隙間を開けたところが窓になっていて、とんでもなく高い場所に開けられていたかと思うと、床と同じ高さに外部にあぐりと口を開けている場所もあった。

もし居城を設計した者がいるとしたら、おそろしく設計思想のない、素人以下としか考えられない。

床はおおむね平坦であったが、時折ふっと思ってもかけない場所に段差があり、とても登れないほどの高さに床が持ち上がっているところもあった。

そんなときは、一同は諦めて元に戻った。一同を引き返し、二郎

は盲滅法、先を急いでいる。どこへ向かっているのか、二郎自身にも判っていないのではないか、とタバサは怪しんでいた。

「ねえ、その【パンドラ】のプログラムって、どんな大きさなの？」

堪らず問いかけるタバサに、二郎は歩きながら口早に答えた。

「どんな大きさって、そりゃ、仮想現実を構築するためのソフトウェアだから、えーと、あれは、どのくらいのデータを使っていたかな」

天井を見上げ、思い出す顔つきになる二郎に、タバサは首を振って話し掛けた。

「そうじゃないの！ あたしが言いたいののは、プログラムって手に持てるくらい？ 目に見えるほど大きいのか？ それとも、この居城くらい大きいのか？」

「なんだ、そんなことか。そりゃ、プログラムは、ただのデータの集合だから、どんな形にも変えられる。だから……！」

二郎は立ち止まった。あんどりと口を開け、目がポカンとして、虚ろになっている。

プログラム

「そうか……そうだよ！ それしか考えられない！」

さつと一同を振り向き、満面の笑みになる。

「見つけたぞ！ 遂に【パンドラ】のプログラム本体を見つけた！」

玄之丞が期待を込めて、口を開いた。

「どこにあるのかね？」

「ここだ！」

二郎は床を指差した。

「このシャドウの居城の全体が、即ち【パンドラ】のプログラムなんだ！ おれたちは、プログラムの中にいる！」

二郎はポケットに手をやり、叫んだ。

「ティンカー！ 出て来い！」

ぴよい、と金属球が空中に飛び出す。

二郎は腕組みをして、ティンカーを見つめた。

「ティンカー！ このシャドウの居城がプログラムの本体とすれば、バグの場所は、どこにあるか判るか？」

二郎の問い掛けに、ティンカーは球体から立方体に体型を変化させた。立方体の表面に、目まぐるしく様々な図表や、数値が浮き出て輝いた。

ティンカーから光が空中に投げかけられ、立体映像で格子模様の

映像が投影された。

シャドウの居城の映像であった。

シャドウの居城は、色々な大きさの立方体のブロックが組み合わされた内部構造が顕わになっている。外からはただの平面に見えた壁は、実は立方体の集合で、隙間に窓ができていたらしかった。

ティンカーは居城の地下部分を拡大させた。そこには、大きな空間が広がっている。

「この部分です！ 地下にある、ここにバグが存在すると思われます！」

二郎の目が輝いた。ぱしん、と拳を手に平に打ち合わせると、叫んだ。

「よし！ すぐ、その場所へ急ぐぞ！ 皆、ティンカーの後に続け！」

玄之丞は芝居気たつぷりに「マグダフ、案内せよ！」とティンカーに話し掛ける。

タバサは首を捻って玄之丞に尋ねた。

「なあに、それ？」

玄之丞はぐい、と眉を上げた。

「シェイクスピアだよ、知らんのか？」

タバサの顔色を見て、玄之丞はがっかりした表情になった。

「やれやれ、すべったか……」

苦痛

シャドウとエミリーは、じっと見詰め合っている。

エミリーはすでに凜然とした態度を取り戻し、やや顎を挙げ、シヤドウを軽蔑したように見返していた。

「あなたが何を企もうと無駄です！ わたしの居場所は【蒸汽帝国】にしかないのです」

「くっ……！」

怒りにシャドウは両拳を握りしめた。拳を口元へ近づけ、前歯でかりかりと噛む。

シャドウの心は疑問と、怒りで嵐のように乱れていた。

「なぜだ……なぜ、おれの思い通りにならない？」

「知りません！ どっちにしろ、わたしはあなたの思い通りになんか、金輪際なりませんからね。諦めなさい！」

シャドウは低く「うっう……」と、狂犬のように唸った。まったく当て外れだ！

その時、シャドウの全身を、ある衝動が貫いた。シャドウは、歓喜に震える。

シャドウの突然の変化に、エミリーは眉を寄せた。

「やったぞ！ 遂にやった！」

ぐらりとエミリーに向き直り、叫ぶ。

「おれの作り上げた？ 門？ に、とうとう【蒸汽帝国】の馬鹿どもが

根刮ぎ引っ掛かった！ やつらのハビタットは、おれの物だ！」

エミリーは目を見開いた。

「【蒸汽帝国】が？」

ニタニタ笑いを浮かべ、シャドウはエミリーに近づく。シャドウの変化に、エミリーは恐怖の表情になって、後じさった。

「そうだ！ お前を救出しに【蒸汽帝国】の連中がやってきたんだ。罾が仕掛けられていることも知らずに！ 来い！」

ぐいと腕を伸ばし、シャドウはエミリーの細い手首を万力のような力で掴む。

エミリーは振り払おうともがく。が、シャドウの指はエミリーの柔らかな皮膚に、がっちり食い込んでいる。

エミリーの顔に、苦痛の表情が浮かんだ。シャドウは楽しげな声を上げた。

「どうだ、痛いかな？ 痛いだろう……この【ロスト・ワールド】では、苦痛は本物なんだ！ お前は初めて、苦痛という感覚を味わっているのだ。どうだ、苦痛の味は？」

手首を掴まれたまま、エミリーはきつとシャドウの目を睨みつけた。

「苦痛など！ 平気です！」

シャドウの両目は見開かれた。ふつと唇を舐め、首を振る。

「こい！ お前を救出しに来た連中の間抜け面を、とっくり眺めてやろっ！」

シャドウは陽気に叫ぶと、ぐっと全身に力を込める。
すとな、と二人の身体に落下の感覚があった。エミリーは足下を
見て、驚愕の表情を浮かべた。二人の身体が床にめり込んでいる！
足が、腰が、更には胸までもが床に沈みこみ、二人の身体は底な
し沼に沈み込むようにめり込んでいった。しかし、シャドウは平然
とエミリーを見つめているだけだ。

エミリーは声にならない恐怖の声を上げていた。

笑い声

轟っ……とした突風に、タバサの髪の毛が舞い上がる。

風圧に、タバサは思わず仰け反り、目を細めた。

ティンカーの案内した地下空間に辿り着いた瞬間、猛烈な風に全員は襲われていた。目の前に、巨大な渦巻きがあった。【蒸汽帝国】の、蒸汽劇場に出現した、あの渦巻きと全く同じものであった。

「？門？だ！ 【蒸汽帝国】に繋がっている渦巻きだ！」

ゲルダは二郎の言葉に「はっ」と顔を上げた。ゲルダの髪も、渦巻きから噴き上げる風に踊っている。

「それでは、この向こうに【蒸汽帝国】が？」

二郎は頷いた。渦巻きの中心を指差す。

「そうだ、階段が見えるだろう？」

二郎の指摘通り、渦巻きの中心には白く輝く階段が、塗りつぶされたような暗黒に向かって降りている。

「この部屋に、あなたの探している？バグ？つてのが、あるの？」

風に負けないよう、タバサは精一杯の大声を張り上げる。二郎は渦巻きから吹き上げる風に目を細めながら頷いた。

「そうだ、修正プログラムを手に入れないとならん！ ティンカー！ 向こうの【蒸汽帝国】に合図を送れるか？」

ティンカーは、ひゅっ、と風を切って渦巻きに飛び込む。が、すぐ戻ってきた。

「駄目です！　？門？は、閉じられています！　向こう側から侵入した多数のプレイヤーが、閉鎖空間に閉じ込められている状況は判りますが……。こちらから接触することは、不可能です！」

ティンカーの報告に、二郎は焦燥の色を浮かべた。

「糞っ！　あの連中、おれの忠告を無視しやがって……だから、言わんこつちやない！」

その時「わははははは！」と部屋を一杯に満たす大きな笑い声が聞こえてきた。声は上から聞こえてくる。

全員が天井を見上げ、息を呑んだ。

法則

シャドウが空中に浮かんでいる。真っ白な髪の毛が、吹き付ける風で別の生き物のように蠢いている。

しかし一同が驚愕したのは、シャドウの手に握られている、エミリー皇女の姿であった。二人とも、天井を突き抜け、出現していた。二郎の姿を認め、シャドウは高々と声を上げた。

「客家二郎！ 修正プログラムは、どうした？ 持ち込めば、おれの感知するところとなる。そこで多分、他の？世界？に残し、？門？から手に入れるつもりだったのだろう？ 残念だったなあ！ 【蒸汽帝国】に繋がる？門？は、すでに閉じられているぞ！」

シャドウの言葉に、二郎はぐっと息を詰め、拳を握りしめる。

そんな二郎の表情を楽しむかのように、シャドウは皮肉な笑みを浮かべている。シャドウの手に握られているエミリー皇女を見上げ、ゲルダは叫んでいた。

「皇女さまを離せ！」

シャドウは眉を上げた。

「いいのかな？ おれが手を離すと……。そら！」

ぱつと手を離す。すたん、とエミリーの身体が落下する。わつ、とゲルダはエミリーを受け止めるべく、大股で走り寄った。

シャドウは手を振った。

エミリーの落下が、唐突に止まる。空中で浮かんだまま、エミリーは、じたばたと手足を動かした。シャドウが指を上げると、エミリーの身体は再び上昇していく。同じ高さに上昇したところで、シャドウは腕を伸ばし、再び腕をがっちりと掴んだ。

なぶ
翯なぶっている。

ゲルダは悔しさに、だん！ と、足踏みをする。

「どうして、あんなことができるの？」

タバサは二郎に顔を寄せ、囁いた。二郎はシャドウを見上げたまま口の端で囁き返す。

「ここが、シャドウの作り上げた【ロスト・ワールド】だからだ。この？世界？の法則は、奴の思いのままなんだ！ 畜生、修正ディスクが手に入れば……」

修正ディスク

気持ち良さげに、シャドウは大声で宣言した。

「それでは【蒸汽帝国】の間抜けどもの顔を拝むとするか……！」

さつと渦巻きを指さした。その途端、渦巻きは消滅し、あれほど吹き荒れた風も、ぴたりと止んだ。階段には【蒸汽帝国】の軍隊が出現していた。

先頭にはガント元帥の乗り込む司令無蓋車。その隣にはターク首相の姿があつた。

呆然と、ガントとタークは目の前の光景に虚ろな表情を浮かべている。

が、二郎は嬉しげに叫んでいた。

「ターク首相！ 修正ディスクは持っているか？」

呼びかけられた首相は、二郎を認め、激しく頷く。驚きの表情が、シャドウに浮かぶ。

「修正ディスクだと？」

二郎は腕を挙げ、叫んだ。

「寄越せ！」

首相はポケットに手を入れ、ディスクを取り出した。腕を思い切り後ろに伸ばし、全身の力を込めて二郎へと投げる。

ひゅーっ、と修正ディスクがきらきらと輝きながら、空中を飛んでいく。

ぱつと二郎はディスクを受け止めていた！

ゲルダ

修正ディスクをはっしと受け止め、二郎はティンカーに命令する。

「ティンカー、デバッグ開始！」

二郎はティンカーに向け、ディスクを投げた。
ティンカーは身体にスリットを作り、ディスクを受け入れる用意を整える。

ディスクが空中を飛んで、ティンカーが飲み込もうとした瞬間、ゲルダの手が素早く伸びて、受け止めていた。

「ゲルダ少佐！ 何をするつもりだ？」

二郎は驚きに大声で叫んでいた。あまりに意外な、ゲルダの動きであつた。

ゲルダはディスクを指で挟んで、二郎に顔を向ける。その顔がニヤリと笑いに歪んだ。さっと上を見上げ、シャドウに声を掛ける。

「シャドウ様！ ディスクは、わたしが！」

叫びながら、腕を上げて掲げる。シャドウはゲルダに顔を向け、深く頷いた。

「でかした！ ゲルダ少佐！」

一同は驚愕して、言葉も出ない。

「ゲルダ……さん？ ……あなた、その……まさか！」

ようやく、途切れ途切れに、タバサが言葉を口にする。

ゲルダはディスクを掴んだまま、ささっと一同から離れる。両目が爛々と輝き、頬は興奮に火照っていた。

「そう……わたしの忠誠心は、シャドウ様ただ一人に捧げられている！ この瞬間を待っていたのよ！ このために、客家二郎の遠征隊に参加したのよ！」

階段で、目を見開き、凝固していたターク首相が我に帰り、叫んでいた。

「裏切り者！」

ゲルダはくるっとタークに振り向き、高らかに宣言した。

「裏切り者ではない！ わたしは、最初からシャドウ様の忠実な部下だ！」

ゲルダの言葉に、タークとガントは間抜け面で、ぱくぱくと金魚のように口を動かしているだけだ。ガントは顔を真っ赤に染め、タークは唇を細かく震わせている。

告白

ようやくガントは怒りに叫び声を上げていた。

「全軍！ 進めーっ！」

さつと腕を挙げ命令すると、その瞬間、凍り付いていた帝国軍兵士たちが「わーっ！」と喚声を上げ、走り出す。手に持っている武器が役に立たないことは、百も承知だろう。それでも遮二無二、盲滅法、無二無三に走り出す。

シャドウは「はっ！」と息を吐き、大声で叫んだ！

「貴様ら、静かにしておれ！」

手の平をぱつと上げ、叫ぶと、その瞬間、全ての兵士の動きが凍りついた！ まるでストップ・モーションが掛けられたかのようだった。

「さて、これでゆっくり話ができる」

昂然と言い放つと、シャドウはエミリー皇女の腕を掴んだまま、静々と床に降り立つ。

降り立ったところに、ゲルダがさつと近寄った。ゲルダが修正ディスクを渡すと、受け取ったシャドウは勝ち誇った笑顔でディスクを弄ぶ。

シャドウが手にしたディスクは、光を浴び、きらきらと煌いた。

二郎はゲルダを睨みつけ、冷静な口調で話しかける。

「そっぴや、あんたは最初から、ちよつとおかしかった。【スラック・ステイック・タウン】に三兄弟を訪ねたとき、あの？世界？を承知していたな。それに他の？世界？の事情にも詳しすぎた。最初から【蒸汽帝国】のプレイヤーじゃなかったんだな！」

ゲルダは「その通り！」と軽く頷いた。

表情には、二郎を軽蔑するかのような笑顔が浮かんでいる。

「他の？世界？にいた頃に【ロスト・ワールド】に連れて来られたの。その時、シャドウ様にお目にかかり、忠誠心を植え込まれたんだわ。あの時まで、わたしは自分の存在意義を知らなかった！シヤドウ様が初めて、あたしの本当の正体を教えてくれたの！」

告白するゲルダ少佐の顔は晴々として、熱狂が瞳に浮かんでいた。

分身

二郎は苦いものを飲み込むような顔つきになり、言葉を吐き捨てる。

「？洗脳？だな！ シャドウが手を染めているとは聞いていたが、本当に？洗脳？された相手を見るのは、初めてだ」

二郎の顔には嫌悪感が溢れている。ゲルダは怒りの表情になった。

「そんな言い方しないで！ あたしはシャドウ様によって、本来の自分というものを知ったのだから！ シャドウ様に仕え、命令を実行するのが、あたしの喜びなのよ！」

ずい、とシャドウが一步、前へ出る。

「それくらいにしておけ……。さあ、二郎。どうするね？ 修正ディスクは、おれの手に移ってしまったぞ！」

ニヤニヤと軽薄そうな顔つきになる。シャドウの表情を見て、タバサは二郎がやっぱりこんな笑顔になることを気付いた。

そうだ！ シャドウは二郎の分身なんだ！

「こういう代物は……」

シャドウはエミリーの手を離すと、両手でディスクを掴んだ。ぐいつと指先で挟み、ディスクを捻り潰そうとする。

ぐぐぐぐつ！ と、シャドウの全身に力が込められた。だが、両

手で掴んだディスクには、何の変化も見られない。

決意

二郎は「けけけっ！」と奇妙な笑い声を上げる。

「折れるものか！ そいつは物質的なものじゃない。一種の力場フォースそのものなんだ！」

憤然とシャドウは、ディスクをゲルダに投げた。ゲルダは取り落としそうになるのを、慌てて掴み上げる。シャドウはゲルダに、顔を向けずに、短く命令する。

「持っている！ おれと二郎の決着がつくまで！」

シャドウの言葉に応じるように、二郎は一歩ささと前へ歩き出す。背中を向けたまま、タバサたちに語りかける。

「皆も知っているように、おれとシャドウは、もともと同じプレイヤーだった。つまり、『ロスト・ワールド』の法則は、おれも好き勝手にいじることができる。今までは、潜入するため、封印していたが、今、対決のため、おれの全能力を解放させる！ おれたたちの戦いは？ 世界？ を変化させて行っ戦いだから、あんたらにはどうすることもできない。だから余計な行動は控えてもらおう」

二郎の言葉にタバサは猛烈な怒りを感じていた。

「それ、どういうこと？ 邪魔だから引っ込んでいる……ってことなの？」

二郎は横顔を見せた。二郎の見せる表情に、タバサは「はっ」と

なる。深い憂愁が二郎の表情には刻まれていた。

「そうだ。君らは邪魔になる」

二郎の口調は苦渋に満ちていた。タバサは何も言えなくなっていた。

シャドウは邪悪な笑みを浮かべた。

「話は済んだかね？ それじゃあ、二郎。始めようか！」

二郎は頷くと、両手を軽く上げ身構える。

タバサは二人の戦いとは、どんなものなんだろう、と息を呑みこみ、じっと見詰める。

決闘

戦いというのに、シャドウと二郎の姿には何の変化もなかった。一歩も動くことなく、じっとお互いの顔を穴の空くほど凝視しているだけである。

しかし、張り詰めた緊張感は、離れたところから見守っているタバサにも、痛いほど伝わってくる。目の前の二人は、精神の力で戦っているのだ。

意思と意思との戦い！

相手を捻じ伏せようと、あらん限りの精神力を振り絞り、一瞬一瞬が途方もない緊張感に満たされているのが、見てとれる。

そのうち、タバサの目にも、二人の戦いの影響が見てとれるようになった。

シャドウと二郎の立っている空間の中間点の付近に、時折、素早い閃光が走る。まるで逃げ水のような、あるいは陽炎のような光の揺らめき。閃光が弾ける瞬間、二郎が、シャドウが、共に顔を微かに歪め、苦痛に唇が引き結ばれる。

ばさばさばさ……と、シャドウの長い白髪が逆立った。ずり、ずり、ずりとシャドウの靴底が、床を滑っていく。

がく！ と二郎が全身に巨大な重石を載せられたかのように、膝を折った。顔を真っ赤に染め、ぶるぶると震えながら横綱の土俵入りのごとく、力を撥ね退ける。

ちら、とタバサはゲルダ少佐を見た。少佐は修正ディスクを持つ

ている！ あれを奪うことができたら！

が、ゲルダは潜入する前に買い求めた武器を構え、油断なくタバサたちの動きに対応している。タバサたちはまるつきり、武器の持ち合わせがない手ぶらである。

ティンカーは、心配そうに空中をふらふらとさ迷っていた。タバサは指を挙げ、こっちへおいでと、手招きする。

ティンカーは救われたかのように、いそいそと近寄ってきた。タバサは口を寄せて囁いた。

アイディア

「ね、何とかできないの？」

ティンカーの表面から、小声のきんきん声が聞こえてくる。

「無理です！ ディスクがなければ、プログラムのデバッグはできません！」

ティンカーの鏡のように滑らかな金属面に、タバサの必死の表情が映し出されている。

「そのデバッグとかいうの、何だか知らないけど、他に何かできないの？ あんたは」

困ったように、ティンカーは金属の身体を捻じって、ゴルディオスの結び目のような形になる。

「卒辞ながら、吾輩一つ提案があるのだが」
なぜか玄之丞が、悠然と話し掛けた。
タバサは玄之丞に喧嘩腰に声を掛ける。

「なによっ！」

玄之丞は、ますます呑気な口調になった。

「あの二人がしている戦いだが、確か？世界？の法則を変える、とか申しておったな」

タバサは改めて玄之丞の顔を見詰めた。妙に自信ありげである。

「それで？」

玄之丞は頷いた。

「その？世界？の法則を変える、というのは、あの二人だけにしかできないものかね？」

ティンカーは黙り込んだ。何か考え込んでいるのか、表面に目まぐるしく、様々な記号や、数列が走っている。

ようやくティンカーは頼りなげな口調で、話しはじめる。

「それは……ここは【パンドラ】プログラムの中枢ですから、デバッグは無理でも、上書きならできるでしょう……。あなたがたのデータを書き込んで、優先権を与えれば、二郎とシャドウの二人と同じことが……」

「それだ！」と、玄之丞は、ぱちりと指を鳴らした。

「それができれば、我々も二郎の戦いに加勢ができる！」

優先権

ティンカーが、猛烈な速さで室内を飛び回る。壁に沿って、素早く動き回ると、ティンカーの近くの壁が、次々と閃光を発した。プログラムの上書きをしているのだ。

優先権、プレイヤー、タバサ上書き終了……。

タバサの頭の中に単調な声が聞こえてくる。

同じ声を聞いていたのだろう、玄之丞、知里夫、晴彦の三人も、顔を見合わせ頷き合った。

対決している二郎とシャドウは……と、そちらへ目をやると、何と二人は、部屋の中央の空間に浮かんでいた！

空中に浮かんだ二人は、怖ろしい形相で互いを睨みつけていた。時々ふつと微かな身振りで、決闘が続いていることを見せ付ける。ぐつと二郎がシャドウに向け、指先を向けると、シャドウの全身に何か目に見えない衝撃が走る。髪の毛が逆立ち、苦痛に顔が歪む。お返しに、シャドウもまた二郎に向かって目に見えない攻撃を加えている。

「どっちが優勢なのかしら？」

タバサの呟きに玄之丞は首を捻った。

「判らん！ どっちにしろ？ 世界？ の法則を歪めている戦いらしいから、切った張ったの戦いではなさそうだな。さて、どうやって加勢すればいいのだろう？」

タバサは呆れて玄之丞の顔をしげしげと眺めた。

「だって……あんなに自信たっぷりに！」

玄之丞は、にっと笑い掛ける。

「判らんものは、しかたないじゃないかね？　まあ、無勝手流にやるさ！　それより、修正ディスクを何とかせねばな！」

忘れていた！　修正ディスクを持つゲルダを見ると、二郎とシャドウの戦いにすっかり見とれ、ポカンと馬鹿のように口を開き、上を見上げている。

チャンス！　と見て、タバサは頭を低くしてゲルダに突っ込む。

無論、勝算はない。ティンカーの上書きによる何かアクシデントが起きることを期待しての行動だ。

感覚

足音に気付いたのか、ゲルダは「はっ」と視線を戻した。さっと、手にした武器を構える。

武器は、片手に青竜刀、もう片方にはヌンチャクである。ヌンチャクのほうは、腰のベルトに捻じ込み、両手で青竜刀を持ち上げる。

青竜刀は見るからに重そうなのに、ゲルダは軽々と扱っている。ゲルダの顔が、戦いへの期待に輝く。両手で青竜刀を頭の上へ持ち上げると、無造作に突っ込んでくるタバサの頭に振り下ろす。

そのままでは、タバサの頭は青竜刀で真っ二つ！　タバサの心臓が恐怖で縮み上がる。

その時、奇妙な現象が起きた。なんと、目の前のゲルダの動きが、のろのろとしたものになっていくではないか。

明るさが暗くなり、周りの物音が低く籠もったような音に変わる。

スローモーションだ……。

何が起きたのか、さっぱり判らず、タバサはぼうっ、とゲルダの動きを眺めていた。じりじりと蝸牛が這うような遅さで、ゲルダの握る青竜刀の刀身が迫ってくる。

ああ、逃げなきゃ……と、タバサは、ぼんやりと考えていた。自分の思考も、同じように粘っこく、低速になっているようだ。

ぐぐつと迫ってくる刀身を避けるため、全力で身体を捻じる。全身の力を込めているのに、まるで糖蜜の中にもがいているかのように、徐々に、徐々にしか動けない。

それでもタバサの身体は、ゆっくりとだが、着実にゲルダの刀身から逸れていく。ぎりぎりのところで、かわ躲すことができた！

がつん！ と不意に青竜刀の切っ先が床に食い込む音が響く。途端に、辺りの風景も元に戻り、音も普通に聞こえるようになった。

ゲルダの顔が驚愕に歪んでいた。信じられないという顔つきである。

しかし、ゲルダは再び青竜刀を持ち上げた。今度は、タバサの腰を狙って、横殴りに振り回す。ゲルダの切り返しは素早く、タバサには、避けることなど完全に不可能である。

ぐつと腹筋に力を込め、背筋を反らし、仰向けになる。その時、再びあの感覚が戻ってくる。回りの音が高音から低音に変わり、明かりが暗くなつて、ゲルダの刃がスローモーションに見えてくる。今度もタバサは楽々と、ゲルダの青竜刀を避けられた。

目の前を青竜刀のばんびろの刃が通過した。ふわりと持ち上がった自分の髪の毛が数本、ぷちぷちと切断されるのをはっきりと見てとれる。

決めポーズ

そうか！ タバサは理解した。

これは、危機に陥ると、感覚が加速されるのかもしれない。

しかし、避けているだけでは、問題は解決しない。タバサには武器がない。

ゲルダの捻った腰のベルトに差された又ンチャクが目に入る。タバサは仰向けのまま、腕を伸ばし、又ンチャクに指を掛けた。じれったいほどに、のろのろと腕は動き、ゲルダの腰から又ンチャクを抜き取る。感覚は加速されているが、身体の動きは通常のままだ。

ごろごろと転がり、起き上がると、手にはゲルダの又ンチャクを持っている。又ンチャクを奪われたことに気付き、ゲルダは怒りの表情になる。しかし、すぐニヤリと笑いかけた。

「手が早いね！ しかし、そいつを振り回せるのかい？ 自分の頭に当てるのが関の山ってものさ！」

ゲルダの言葉は真実だ。タバサは一度たりとも、こんな武器を扱ったことはない。だがタバサの心中に、なにか湧き上がってくる不思議な確信があった。

「試そうか？」

なぜか、自信たっぷりと言っただけで、自分に気付く。又ンチャクを握りしめると、いきなりブンブンと音を立て振り回す。タバサの行動に、ゲルダは完全に呆気にとられていた。

タバサは、ヌンチャクをひゅんひゅんと目にも止まらぬ高速で身体の周りに回転させ、すぱっと脇の下に棒を収めた。

思わずゲルダに向けニヤリと笑い返すと、片手を上げ、挑発するように、くいくい、と手の平を閃かせてみる。どこかのカンフー映画で、こんなシーンがあったような……。

決まった！

タバサは自分のポーズに、うつとりとなっていた。

能力

「おい、兄貴。あのタバサって娘、すげえなあ！ あんな芸当ができるなんて、知らなかったぜ！」

知里夫は仰天してタバサの仕出かしたことにあんぐり口を開け、玄之丞に話し掛けた。玄之丞はすばすばと、続けざまに葉巻を喫いながら答える。

「うむ。吾輩の考察するところ、ティンカーがやったプログラムの上書きとやらが、効果を発揮しているのかも知れんな！」
「つてえと、おれたちも、あんなことできるのかね？」

玄之丞は首を振った。

「それは判らん。タバサの場合は、即席で武術の達人に変身できたが、吾輩たちはどうなるのか？ 知里夫、お前、何か感じないか？」

知里夫は首を捻った。

「判らねえ……。何も感じねえ……。ちよつと待て！ 兄貴、何でも良いから数字を言ってくれ！」

玄之丞は口から葉巻を離し、妙な目つきで知里夫を見た。しかしすぐに立ち直ると、続けざまに数字を並べる。

「1 2 9 6 6 5 4 1 2 × 6 5 8 9 4 は？」
「8 5 4 4 1 7 6 5 8 3 2 8！」

一瞬にして知里夫は答えていた。知里夫は情け無さそうに玄之丞

を見やる。

「おれの場合は、暗算らしい。畜生、こんな能力、糞の役にも立たねえ！」

玄之丞は、ぽん、と知里夫の肩を叩く。その目が、晴彦に向けられる。

晴彦は相変わらずにこにこと、馬鹿か、それとも底なしの善人なのか判らない笑みを浮かべていた。知里夫も晴彦を睨み、考え込む。

「晴彦！ お前……」

言いかけた知里夫を無視して、晴彦はにこにこと笑いを浮かべたまま、すーつと無言で歩き出す。

玄之丞と知里夫は顔を見合わせた。

とつと晴彦は、かちんかちに凍りついたように動きを止めたままの蒸汽軍兵士の前に歩いていく。

先頭に立っている、ガント元帥と、ターク首相の顔をまじまじと見つめると、何を思ったのか、さっと両腕を差し上げた。

宝

その瞬間、蒸汽軍全員の凍りついた時間が解けた！

ぱつと口を開き、タークが叫んでいる。

「エミリー皇女！」

が、視線の先にエミリー皇女はいない。きよろきよろと辺りを見回すと、驚きに両目が、くわつと見開かれた。エミリー皇女は床に長々と横たわっている。気絶しているのだ！

「エミリー！」

顔中を口にして、タークは叫んでいた。だつとパチンコに弾かれたように飛び出し、脇目も振らず、倒れているエミリーに突進する。床に膝まづくと、エミリー皇女を抱き起こす。荒々しく揺さぶり、大声を上げた。

「エミリー皇女、ご無事ですかっ！」

揺さぶられ、エミリー皇女はゆっくりと目を開いた。ぱちぱちと何度か瞬きを繰り返し、徐々に正気を取り戻す。唇が微かに動き、両目がしっかりと覗きこんでいるタークの心配そうな顔を捉えていた。

息を吐き出し、唇から言葉が押し出される。

「パ……パ……？」

タークは顔を真っ赤にさせ、怒鳴る。

「何ですと？ 今、何と仰いました？」

「パパ……、あなたは、あたしのパパでしょう？」

「エミリー！」

しっかりとエミリー皇女を抱きしめ、タークは叫んでいた。

「ふむっ……」

抱き合うエミリーとタークを見詰め、玄之丞は真剣な表情になっていた。やがて、理解の色が浮かび、晴れやかな笑みに変わる。

「判ったぞ！」

知里夫は玄之丞を見上げる。

「何が判ったんだ、兄貴」

玄之丞は腕を組み、重々しく呟いた。

「【ロスト・ワールド】の宝の正体がだよ」

「お宝あ？」

知里夫は頓狂な声を上げていた。

「そんなもの、ただの噂話に過ぎねえ、と思っていたぜ！ 本当にあるのかい？」

「ある！」

断言していた。じつと知里夫を見て、言葉を足す。

「お前はもう、お宝を受け取っているじゃないか」

真相

「おれが？」

知里夫は自分の顔を指差す。

「そうだ！ お前は、コンピューターのような暗算能力を得、タバサは一瞬で武道の達人に。他にもあるぞ。例えば、蝶人だ！」

「蝶人って、あの芋虫から蛹になる、あいつらのことか？ あいつらが、どうして、お宝を受け取っているんだ」

玄之丞は目を細めた。

「そこが奇妙なところなのだ。【ロスト・ワールド】のお宝は、一見そうではなさそうに見えるところが面白い。知里夫、お宝と聞いて、何を連想する？」

「そりゃあ」

知里夫はグルグルと両目を動かす。

「例えば、金銀財宝、とか。骨董品とか、絵画とか……」

玄之丞は新しい葉巻を咥えると、ゆっくりと頭を振った。

「そんなものが仮想現実で宝になるか？ どんな金銀財宝でも、骨董品でも、泰西名画だろうが、そんなものはデータに過ぎん。その気になれば、簡単にコピーできる。仮想現実でものを言うのは、何と言っても、プレイヤー個々人の能力そのものだ。見る、あの二人を」

玄之丞は戦っている二郎とシャドウを指さす。

二人は空中で浮かびながら、辺りの空間を歪め、決死の表情で戦

いを続けている。

「二郎は仮想現実構築支援ソフト【パンドラ】の開発者として、他のプレイヤーにはない特殊能力を持っている。シャドウも二郎の分身だから、ここ【ロスト・ワールド】では無敵を誇る。エミリー皇女にしても、そうだ。エミリー皇女は【蒸汽帝国】全てのプレイヤーにとつて、かけがえのない象徴だ。今、俺が上げた特異性は、他にはない！　どんなお宝だって、引き換えにはできないだろう」

「それじゃ……」

知里夫の顔に理解の色が浮かんた。

「あいつは、どうなんだ？」

知里夫は晴彦を指さしていた。

蒸気軍

ガントは上を見上げ、険しい表情を作った。

「あれは……シャドウではないか！　どうやら戦っているようだが……？」

ぐつと握り拳を固め、全身に怒りの震えが走る。

「糞！　何が何だかさっぱりだが、こうしてシャドウを目にして、何もできんとは！」

ガントはその時、自分の持っている蒸気銃に気付く。まだ持っていたのだ。

ぐおおおん……！

轟音に振り帰ると、なんと蒸気百足から逞しい蒸気が迸っている。無数の金属脚が、わさわさと蠢き、動き始めている。ガントの目が大きく見開かれ、その顔に喜色が浮かぶ。

「動いておる！　すると？」

無蓋車の操縦席で、ぼけつと前を見詰めたままの部下に命じる。

「おい！　この車、動くのか？」

「はあ？」

部下はポカんと、ガント元帥の顔を見上げた。首を捻り、アクセルを踏みつける。

途端に、ぐわああん！　とエンジンが咆哮し、操縦席の無数の計器に灯が点った。部下は「信じられません」と大声で喚きながら首を振る。

「動きます！ 蒸気が生き返りました！」

「そうか！」

だん！ とガントは車の外板を殴りつけた。ぐい、と首を捻り、蒸気軍兵士たちを見やる。

「お前たち！ 蒸気力が戻ったぞ！ 武器はどうなんだ！」

兵士たちは一斉に、がちゃ、がちゃと音を立て武器の点検に余念がない。間髪を入れず、部下たちを率いる中隊長、小隊長たちから返事が返ってくる。

「元帥閣下！ ちゃんと作動します！」

「そうか……」

元帥は、にこにこ笑顔になった。

「こうなれば……」

突撃！っ、と言いかける口元がぱくりと閉じる。

「なんだ、お主は？」

ぐつと背筋を伸ばし、険悪な表情になって目の前の男に詰問する。

もじやもじやの金髪、顔には満面の笑みを浮かべ、おかしなコートを身に纏っている。

晴彦だった。

武器

晴彦は蒸汽軍の真ん前に、両手をだらりと垂らし、無造作に立っている。顔には、相変わらず笑顔が張り付いていた。

ガントは怒声を上げた。

「そこをどけ！ どかんと、轢き殺すぞ！」

晴彦は何も聞こえなかったかのように、案山子かかしのようにただ立ち尽くしているだけだ。

「うぬぬぬぬ！」とガントは唸り声を上げた。

部下が「どうします？」とガントの顔を窺っている。ガントは唇を噛みしめた。

「敵か、味方か？ しかし、こんなところに馬鹿のように突っ立っているところを見ると、味方とは思えん！ 銃、構えーっ！」

ガントの号令に、蒸汽軍兵士の全員が晴彦一人に銃口の狙いをつけた。

晴彦は、まるで怖れる様子もなく、コートの懷に手を入れる。それを見て、ガントは口を一杯に開き、叫んでいた。

「奴は何か武器を持っているぞ！ 撃て！ 撃ちまくれ！」
兵士たちの指が銃爪に掛かったのが先か、あるいは懷に手を入れた晴彦の動きが早かったのか？

びしゃっ！ と、何かがガントの顔を直撃していた。

ガントは「わっ」と叫ぶと、車の上で引っくり返っていた。兵士たちは、ぎよっと、ガント元帥を見た。

ガントは、すぐ起き上がってきた。

その顔にべつとりと、何か真つ白なものが貼り付いている。べとべととした柔らかい質感で、ぼたぼたと白い粘液がガントの厚い胸板に毀^これていた。

ガントは手を挙げ、顔にこびり付く何かを拭った。

パイだった。

ガントの顔を目掛け、晴彦は特大パイを投げつけたのである。

パイ投げ合戦

洪面を作るガントを見て、晴彦は大袈裟に声もなく笑い転げている。ガントの顔を指差し、身体を折り曲げ、腹を抱え笑う。

ガントは立ち上がった。顔には、怖ろしいほどの怒りが湧き上がっている。

「撃て！ 何をしているか！」

ガントの命令に、兵士たちは「はっ」と我に返って銃を構える。銃爪を一齐に引いた！

ぽん！ ぽぽぽん！ ぽん！

銃口から白い蒸気が噴き出し、何かが晴彦を目掛けて飛び出した。

びしゃっ！ びしゃっ！

銃口から飛び出したのは、やはり真っ白なパイだった。

晴彦の全身は、たちまち真っ白なパイに埋まっていた。晴彦はもったいぶった仕草で、顔にへばり付いたパイを拭くと、かつと大口を開けた笑いを浮かべ、身に纏ったコートの前を開いた。

途端に、コートの前から、どどーと大量のパイが零れ落ちる。

どさどさどさ……！ と、まだまだ放出は止まらない。たちまち晴彦の目の前に、パイの山ができていた。

晴彦はパイを一つ掴むと、えいやつとばかりに蒸気軍兵士たちの

真ん中に投げつける。

びしゃっ！

一人の兵士の顔面が、パイに覆われる。呆然と顔面のパイを拭った兵士は、隣の仲間の顔を見た。仲間は笑いを必死に、押し殺しているが、口元にはニンマリとした笑みが浮かんでいる。

「野郎！」

投げつけられた兵士は怒りの表情になり、銃を構え、銃爪を引いた。

すぽーんっ！

それが切っ掛けに、蒸汽軍兵士たちは次々と蒸汽銃の銃口から、パイを晴彦を目掛けて浴びせかける。ガントもまた、蒸汽銃を撃ちまくり、次々と白いパイを打ち出していた。

すでに全員の頭から、シャドウのことも、【ロスト・ワールド】のことも、綺麗さっぱり跡形もなく吹き飛んでいるようだ。

「こうしてはおられんぞ！」

玄之丞は叫んでいた。

「晴彦の奴、【スラップ・スティック・タウン】をこの【ロスト・ワールド】に再現する能力を獲得したらしい！」

一気に喋り終わると、ぴょんとその場で飛び上がり、空中で両踵を打ち合わせた。

「【スラップ・スティック・タウン】のプレイヤーとして、パイ投げ合戦に参加せぬとは、吾輩の名折れになる！」

喚くと、猛然と晴彦のところへ駆け寄っていく。それを見た知里夫も「あっ」と叫んでいた。叫んだと同時に駆け出している。

真葛三兄弟と、蒸気軍兵士によるパイ投げ対決が始まった！

二人の女による対決

ぎゃりんっ！

タバサは又ンチャクの真ん中を繋いでいる鎖で、ゲルダの青竜刀を受け止めた。

普通、又ンチャクには鎖は使わない。本来なら麻紐などの素材が使われるのだが、かつて有名なカンフー映画で使用された又ンチャクが、見映えのため鎖を使っていたので、それ以来、又ンチャクを繋ぐのは鎖と決まっている。

ぐぐつと押し戻し、さつと横に払って距離をとると、タバサは目にもとまらぬ速さで二つの棒を振り回す。

ひゅん、ひゅんと又ンチャクが空を切る音がして、青竜刀を構えるゲルダの顔に、焦りの色が浮かんでいた。

ゲルダには、タバサがまさかここまで又ンチャクを扱えるとは思ってもしなかったのだろう。

ぶんっ、と音を立て青竜刀が振り回されるが、タバサは寸前のところで躲し、逆に又ンチャクを振り回して、ゲルダの隙を狙う。

一撃必殺の気合が、タバサの振り回す又ンチャクには籠められている。もとよりゲルダも「ロスト・シティ」の露店で買い求めただけあって、又ンチャクの扱いには慣れている様子で、タバサの攻撃にもひらりひらりと身軽に避けていた。

が、形勢は明らかにゲルダの不利であった。

なにしろゲルダの持っているのは、重い、青竜刀である。いくらゲルダが強い筋力を持っていたても、振り回し続けているのには、限界というものがあつた。

たらたらとゲルダの額から、大粒の汗が流れ出ていた。

汗は瞼に掛かり、目に入って視界を塞ぐ。

ぱちぱちとゲルダは何度も瞬きを繰り返し、必死になってタバサの攻撃を受け止めている。

敗北

びしっ！ と厭な音がして、がらんとゲルダの握っていた青竜刀が床に転がった。

ゲルダは指を押さえ、苦痛に呻いていた。タバサのヌンチャクの先端が、ゲルダの親指を直撃していたのだ。剣道で言う「指きり」の技である。

顔を上げたゲルダの顔からは血の気が引き、真っ白になっている。顎からぽたぽたと汗が滴っていた。

仮想現実で感じる初めての苦痛！

【ロスト・ワールド】では、苦痛は本物だ。

すかさずタバサは爪先を蹴り上げ、ゲルダの取り落とした青竜刀を遠くへ蹴飛ばす。

がらがらと派手な音を立て、刀はくるくると旋回しながらゲルダの手が届かない遠くへ飛ばされていく。ゲルダの顔に絶望感が浮かぶ。

「修正ディスクを渡しなさい！」

ヌンチャクを構え、タバサが叫んだ。
ゲルダは物凄い視線で睨み返した。

「誰が……お前なんか……！」
タバサは唇を噛みしめた。

どうしたら、いい？

何とか勝負には勝てたが、これから何をすれば良いのか、タバサには判らなかった。

ゲルダはシャドウの洗脳で、どうしようもない忠誠心に縛られている。ディスクを渡すことなど、考えもしないだろう。

しかしタバサには、無情にゲルダに対し、気絶するほどの苦痛を与えるなど、できそうにもない。

ゲルダは吠えていた。

「どうした？ わたしを殺せばいい！ そのヌンチャクを思い切り振り下ろせばいいだろう？ できないのか、臆病者！」

ゲルダは、せせら笑った。

タバサは動くことができなかった。顔を上げ、戦っている二郎とシャドウを見上げる。タバサの視線を追い、ゲルダも顔を上げていた。

手詰まり

はあっ、はあっ
と肩で息をして、二郎とシャドウは睨みあっている。

戦いは決着がつかず、疲労だけが二人の身体に重く押し掛かっている。文字通りの手詰まりに陥っていた。ゆっくりと顔を挙げ、シャドウが話しかけてくる。

「どうした二郎……。もう、お終いか？」

二郎は低く唸ると、答える。

「お前こそ。おれを殺すつもりじゃなかったのか？」

シャドウは「はっ」と肩を竦めた。

「当たり前だ！ 【ロスト・ワールド】には、創造者^{クリエイター}は一人しかいないからな。【パンドラ】を制するのは、おれか、お前か、どちらでもない」

ちら、と二郎は睨み合っているタバサとゲルダを見る。視線をシャドウに戻し、皮肉たっぷりに話し掛けた。

「あっちも立ち往生しているみたいだぜ。あんたのゲルダには武器がない。タバサはそのゲルダを殺すほどの残酷さはない。なあ、いい加減に諦めて、修正ディスクを渡して【ロスト・ワールド】を正常化しないか？ それで、お前に何の損がある？ 仮想現実全ての征服など、馬鹿らしいとは思わないか。それより、正常化した【ロスト・ワールド】から飛び出して、全？世界？に居場所を探す努力をしたほうが利口だし、楽だぜ」

シャドウは怒りの表情を浮かべた。

「お前には判らない！」

指を突きつけ、叫んでいた。

「おれが？ロスト？したときの、あの絶望感！ そりゃ【パンドラ】のプログラムのバグなら、おれだって修正できた！ しかし、修正したところで、何の変わりがある？ おれが現実世界に一生戻れないことは、はつきりしている。ぬくぬくと現実世界に戻っているお前を、こっちから指を咥えて眺めているだけしかないおれは、どうなる？ これは、おれの復讐だ。プログラムのバグを見逃したお前、つまりは、かつてのおれに対する復讐なんだ！」

二郎は片頬に苦い笑いを浮かべた。

「自分の誤りを指摘されるほど、辛いことはないな。しかも、その誤りを指摘するのが他人ではなく、他ならぬ自分とは！」

喋りながら二郎は微かな疑念を感じていた。まるでシャドウは話を引き伸ばしているかのようだった。

待っている。

シャドウは何かを待ち続けている。

何を？

不意に、シャドウの狙いに思い当たり、二郎は愕然となった。

「シャドウ……お前！」

ニタリと、シャドウは笑いを浮かべた。

「やっと気付いたか！ しかし、もう、遅い！」

さつと？門？に続く階段を指さす。

「二郎！ 我が【ロスト・ワールド】の？門？は、すでに【蒸汽帝

国】を通じて【大中央駅】と繋がったぞ！
グラント・セントラル・ステーション
は【ロスト・ワールド】の支配下にある！」
もう、全ての？世界？

【大中央駅】

その時、全ての？世界？にいたプレイヤーは、不思議な衝撃を感じていた。不意の喪失感が、プレイヤーを襲う。

何だ、何が起きた？

きよろきよろと、プレイヤーたちはお互いの顔を見詰め合い、不安に立ち止まる。それは【大中央駅】にいたプレイヤーも同じである。【大中央駅】で目当ての？世界？に訪問しようとしていたプレイヤーたちは、全員その場で立ち竦んでいた。

「戻れないぞ！ 現実に戻れない！」

誰かが大声を上げる。

「戻れないとは、どういうことだ？」

「だから、現実世界へのアクセスができないって言ってるんだ！
まるで、まるで……」

大声を上げたプレイヤーは、的確な表現ができず、両手をさ迷わせる。隣にいたもう一人が呟いた。

「？ロスト？だ……」

隣のプレイヤーが呟いた言葉に、その場にいた全員が、ぎよつとなった。ざわめきは、徐々に広がっていく。

？ロスト？！

それは、全てのプレイヤーにとっての悪夢である。七十二時間の

時間制限を過ぎると起きるとされている。現実世界では、プレイヤーの本体は仮想現実で過ごした記憶を失い、一方、仮想現実に取り残された分身は、そのまま現実世界に戻る伝手を失って、ひたすら仮想現実をさ迷う羽目に陥るのだ。

ざわめきは悲鳴に変わり、悲鳴は叫びとなって【大中央駅】を覆った。

わあわあとした喧騒が【大中央駅】全ての場所で起きていた。お互い両手を振り回し、精一杯の大声を張り上げ、両目を血走らせ、今にも掴みかからんばかりの勢いである。

が、【大中央駅】では人々の衝突判定はゼロとなっているから、たとえ殴り合いの喧嘩が発生しても、拳はお互いの身体を突き抜けるだけだろう。

だっ、と一人が遂に我慢できず、走り出した。行く当ては一切ない。唯その場に立ち止まっている恐怖に耐え切れないだけだ。しかし、一人が走り出したことにより、プレイヤーたちの間に恐怖が浸透し、全員が何の目的もなく闇雲に走り出す。

何億人というプレイヤーが脛を飛ばし、恐怖に両目を飛び出さんばかりに見開き、口をぱかりと開いて全速力で走り回る。お互いの身体を空気のように突き抜け、一直線に、あるいは、うろつろつと、その場で行きつ戻りつしながら動き回っていた。

【裁定者】

やがて群衆の動きは【大中央駅】中心に向かう流れとなっていた。

【大中央駅】の中心に、一個の巨大な塑像が聳えていた。

ゆったりとしたローブを纏った、三面六臂の神の坐像であった。正面に優しい表情の仏陀の顔。右にはリンカーン、左にはマホメットの顔を象っている。

塑像は、仮想現実を監視する【裁定者】の坐像であるとされる。どっしりとした身体つき、厳しい顔は半眼を閉じ、長い白髪を背中に垂らした姿は、言い知れぬ威厳を感じさせる。顔には髭はなく、ゆったりとしたローブ姿は男性、女性どちらとも見える。

仮想現実世界では、プレイヤーの安全を守るため様々な制限が加えられている。苦痛をカットする倫理規定もそうであるし、差別語を発音できないことや、七十二時間の制限時間も、その一つだ。仮想現実世界の全てを監視する【裁定者】も、安全装置の一つである。とはいえ、【裁定者】は唯の一度たりとも、実際に作動したことはないとされている。今、プレイヤーたちは最後の希望を込め、【裁定者】の坐像を見上げていた。

一人、また一人と【裁定者】の坐像の膝もとに集まり出し、無意識であろうが、両手を合わせ、祈りのポーズをとる。やがて、ゆっくりと喧騒は静まっていった。プレイヤーは続々と【裁定者】のもとに吸い寄せられる。

「【裁定者】さま……どうか、お救いを！」

一人が声を上げる。声を上げたことが切っ掛けとなり、全てのプレイヤーも同じように眩きながら、祈りのポーズを取った。

どのくらいの時間が経ったのだろう。

ふと見上げたプレイヤーたちは、驚きに声を上げていた。

「見る！ あれを！」

指さす。

指先は【裁定者】の顔に向かっていた。【裁定者】の両目が開いていた。半眼に閉じていた両目が、くわっと見開かれ、両の瞳は金色に輝いている。

ゆらり……、と【裁定者】の巨体が揺らめいた。ゆっくりと、実にゆっくりと【裁定者】は立ち上がり始めた。仮想現実の歴史上、初めて【裁定者】が動き始めたのである。

三面ある【裁定者】の三つの唇が開かれ、ある音声が発せられた。痺れるような音声は、その場にいた全てのプレイヤーに、じーんと染み入った。

「天上下、唯我独尊！」「人民の人民による……」「アツラー・アクバル（アラーは偉大なり）！」

【裁定者】は叫び終わると、ゆっくりと足を挙げ、第一步を踏み出した。

悔恨

ぎしぎしぎし……。奇妙な軋み音に二郎はさっと周りを見渡した。

何が起きている？

音の正体を見て取り、二郎は驚きに身を強張らせる。

シャドウの居城を構成する いや、【パンドラ】プログラム本体だ のブロックが、動き出しているのだ。大小無数のブロックが動き出し、壁から迫り出している。

シャドウは二郎の驚きを楽しむように、邪悪な笑みを浮かべていた。

「どうだ！ おれの【パンドラ】プログラムは、お前のバージョンに比べ、着実に進化している。この十年、おれは【パンドラ】の改造に取り組んできたんだ。この瞬間を待ち続けてな！」

二郎はシャドウに対し、穏やかと喋っていい口調で話し掛けた。

「何を狙って改造したんだ？ お前が【パンドラ】に加えた変更とは？」

シャドウは吠えた。

「全ての？世界？を【ロスト・ワールド】に変更するプログラムだよ！ 【蒸汽帝国】から【大中央駅】に繋がった？門？を通じて【ロスト・ワールド】のプログラムが書き換えを加えるんだ！ さあ、

始まるぞ」

ひゅん、ひゅんと音を立て、空中に飛び出したブロックは、一斉に？門？を目指していく。？門？の先の暗黒にブロックは次々と飛び込み、消えていった。

飛び込むとき、一瞬だが、暗黒の中に目映い光が閃く。光が閃くたび、二郎の体内に奇妙な衝動が貫く。

「どうだ、感じるだろう？ おれの【パンドラ】プログラムが、全？世界？を乗っ取っているんだ。仮想現実は、おれのものだ！」

シャドウは、うつとりと天井を見上げた。

「全？世界？の支配者、シャドウの誕生だ。おれは皇帝に即位してやる！」

真っ赤な大口を開け、シャドウは高笑いを上げた。二郎は無言でシャドウを見詰めている。二郎の胸に、悔恨が酸性の毒のように育っていた。

すべては無駄だった……。

光

大小無数のブロックが次々と？門？に飛び込み、シャドウの居城は徐々に解体されていった。天井を構成していたブロックも続いて、隠されていた真っ赤な空が見えてくる。

ひゅー……。

風が吹き込み、シャドウの長い髪を弄んだ。

目映い光に、二郎は目を細めた。

光？

二郎は振り返った。見ると？門？が金色に発光している。二郎は目を睜った。あの光も【パンドラ】プログラム改造の結果なのだろうか？

いや、違う。

いつの間にか、シャドウも？門？を見詰めているが、驚きの表情を浮かべているのを認めた。

シャドウの目が、まん丸になった。

「なんだ、あれは？」

いよいよ？門？の光は、強烈に輝いた。

もう、まともに見ることも困難なほどだ。光には蒸気軍も、真葛三兄弟も、もちろんタバサもゲルダも気付いていた。全員その場に立ち止まり、呆気を取られ光に顔を向けている。

ゆらり……と、光の中に何か動いている。人の形に見える。が、途方もなく大きい。ぐーっと人の形は、その場から立ち上がり、やがて光は弱まって、三面六臂の巨人が姿を表す。

巨人はゆっくりと頭を動かし、二郎とシャドウに視線を向けた。シャドウは、ぱくぱくと口を動かしているだけで、声も立てられないほど驚いている。

「何だ、あれは？」

やっと掠れ声が出た。二郎は答えていた。

「【裁定者】だよ。仮想現実の守り神だ」

言葉

二郎が喋っている間に【裁定者】は一つ頷くと、ゆっくりと膝をついて、大きな顔を近々と寄せてくる。

唇が開き、声が発せられた。

「お前たちが、この騒ぎの原因だな？ ふむ、どちらも同じプレイヤーで、一人は？ロスト？した分身であるな。まったく迷惑至極なことではあるが、仮想現実の平和のためには余が乗り出すしかない」

シャドウは反抗的な目付きで【裁定者】を見上げていた。

「何を偉そうに……。それじゃ、おれが？ロスト？したときはどうなんだ。あの時、どうしてお前は乗り出さなかった？ おれ一人、どうなっても構わないというのか？」

巨人は、ゆっくりと頷く。

「そうだ。個々人の不注意は、プレイヤー各々の責任として背負わなければならぬ重荷である。が、仮想現実の全領域に影響する今回のような場合は、余が乗り出すべきなのだ。さて、今回の騒ぎの原因は、その客家二郎および分身であるシャドウにある。余は、一方便を使つて、お前たちのお互いに対する憎しみを解決してやる……」

【裁定者】の目が光り輝いた。

光に貫かれ、二郎とシャドウは身動きができなくなった。

【裁定者】の口が大きく開かれ、ある言葉が発せられた。

「色即是空、空即是色！」

光は物理的な圧力を持って、その場にいた全員を打ちのめす。タバサも、ゲルダも、三兄弟も、更には蒸気軍全員も、床にひれ伏し気が遠くなるのを感じていた。

帝国軍の帰還

恐る恐る、タバサは顔を上げた。

どのくらい時間が経ったのだろうか？

顔を上げると、ゲルダの目と合う。ゲルダもまた床に腹這いになり、突っ伏していた。

もそもぞとした気配に、その場に突っ伏していた蒸汽軍兵士たちや、三兄弟も顔を上げていた。皆、ポカンとした表情で、虚脱した目付きでお互いの顔を覗きこんでいる。

「何が起きた？」

声を上げたのは、ターク首相だった。タークはエミリー皇女をしっかりと抱きしめている。エミリーはしっかりと床に手の平を押し付け、立ち上がる。タークも立ち上がり、エミリーと目を見合わせる。二人の視線が絡み合う。

「パパ……」

エミリーが呟く。

タークは真っ赤になった。

「エミリー。どうして？」

皇女は頭を振った。豊かな金髪が、ふわりと揺れた。

「判らない。でも、やっと思い出したの。あかし、ずっと昔、怖いことがあって……それでね……」

なぜか、エミリーの口調は、幼い幼児のものになっていた。タークは目を瞠った。エミリーはタークを見詰め、にっこりと笑いかけた。

「思い出したのは、それだけじゃないわ。パパの顔も思い出したのね、あなたは、あたしのパパよね？」

エミリーの顔には期待が込められている。タークはゆっくりと首を振り、頷いた。

「そうだ。わたしが、お前の父親だ！」

「ああ、パパ！」

エミリーは両手を広げた。タークはエミリーの身体をきつく抱き寄せる。二人は顔を挙げ、聳える巨人を見上げていた。【裁定者】は二人を見下ろし、唇を開いた。

「エミリー皇女はシャドウにより洗脳を受けたが、エミリー独自の生い立ちにより、洗脳を跳ね除けた。仮想現実で、エミリーのような記憶を持つプレイヤーは、他には絶対に存在しない！しかし、シャドウの企みは、エミリーの本来の記憶を蘇らせることに役立った。故に、エミリーは本来の自分に立ち戻ったのである。エミリー皇女よ」

【裁定者】は直接エミリーに話し掛けた。

「そちはもう、自由である。【蒸汽帝国】に留まるのもよし。他の？世界？に遊ぶのも自由である。どうだね、これから後、そちには全ての？世界？が待っているのだ」

エミリーは【裁定者】を見上げ、微かに否定の形に首を振った。

「いいえ。わたしは【蒸汽帝国】の皇女です。その義務は、果たさなければなりません」

皇女は蒸汽軍兵士たちに顔を向けた。

蒸汽軍兵士は、毒気を抜かれたような顔つきで、呆然と立ち竦んでいる。全員が三兄弟とのパイ投げ合戦で、真っ白なクリームに埋まっていた。

エミリーは真っ直ぐガント元帥を見詰め、声を掛けた。

「元帥。さあ、【蒸汽帝国】に戻りましょう。国民が心配しているでしょう」

元帥は「はっ」と我に帰り、かつんとブーツの踵を打ち合わせ、敬礼をした。

「承知しました！ 全軍、皇女をお守りし、【蒸汽帝国】に帰還いたします！」

タークはエミリーと腕を組み、悠然とガント元帥の車に近づいた。無蓋司令車は真っ白なパイに溢れているが、エミリーはまるで気にする様子もなく、優雅な仕草で後席に乗り込む。

「さあ、帰るのです！」
全軍に呼びかける。

ぐわああん、と蒸気エンジンが息を吹き返す。がちやがちやと蒸汽百足の足が動き出し、そろそろと武器を抱えた兵士たちが階段に集まってきた。

回答

「タバサよ、それに、ゲルダ」

声にタバサは顔を上げた。

【裁定者】はタバサとゲルダに視線を向け、莞爾とした笑みを浮かべていた。

「タバサ、お前は初めての冒険に、十分な働きを果たした。もう、お前は初心者などではないな。どうだね、仮想現実というのは、お前の期待通りだったかな？」

タバサは仄かな満足感を感じていた。

「ええ」

頷いた。

「期待通り……いや、想像以上でした！」

ふと、ゲルダを見る。ゲルダは肩を落とし、全身から何か力が抜けてしまったようだ。顔には緊張感が、欠片も見受けられない。

「そのゲルダというプレイヤーは、シャドウにより悪意ある洗脳を受けているが、もう治癒されている。すでにゲルダは、本来の自分に戻っている。さて、ゲルダ。何か忘れてはいないかな？」

【裁定者】に呼びかけられ、ゲルダは「はっ」と顔を上げた。

そろそろと胸のポケットに手を伸ばし、修正ディスクを取り出す。ディスクをタバサに向け、口を開いた。

「これを……。返すわ……。あたし、もう帰らなきゃ……」

タバサがディスクを受け取ると、ゲルダは目を閉じた。ゲルダの姿が薄れていき、消えていった。現実世界で、本来の自分が目覚めたのだ。それを見て、タバサは思い出した。

自分の時間も、もう残り少ない。しかし、二郎は？

タバサは地下室の真ん中に目をやった。あの辺りに、二郎とシャドウがいたはずだが。

いた！

しかし立っていたのは、たった一人。二郎だろうか、それとも、シャドウ？

「二郎？」

タバサは、おずおずと声を掛ける。
人物は、ゆっくりと右顔を向けた。

真っ白な髪の毛、真っ黒な艶のない皮膚。

シャドウだ！

遂に人物はタバサに全身を向けた。タバサの顎が、だらんと垂れ下がった。

「あんた、誰？」

「おれは……」

人物は唇を開く。自分の名前を告げようとするのだが、その顔に当惑が浮かぶ。

「おれは二郎？ いや、シャドウだ！ 違う！ おれは、おれは……」

人物は手で顔を覆う。ぶるぶると震える両手が下ろされる。そこには奇妙な人物が立っていた。

右半分はシャドウである。真っ黒な皮膚に、真っ白な雪のような髪の毛。

しかし、左半分は二郎のものだ。顔の真ん中で、二つの顔がぴたりと合わさっていた。

「このプレイヤーは、客家二郎であり、シャドウである。両方の記憶を持っているのだ！ 我が一方便により、二つの人格を合わせ、一つにした。もはやシャドウの憎しみも、二郎の悔恨も消え去った！ さあ、全員、現実世界に戻りなさい」

巨人の大音声が、その場を支配していた。巨人の背後から、金色の光が現れ、全体に満ちていく。光を浴び、タバサは目を閉じていた。

強制切断まで、あと十秒……。時を告げる声が単調に響いていた。

再会

田端洋子は無人の電動バスを降り、目の前の建物の入口へと向かった。

現実世界の至るところで進んでいる荒廃は、ここでは一切どこにも見当たらない。

建物の壁は塗りたての新品のように艶やかで、白く陽光を反射しているし、ずらりと並んだ窓ガラスは、一枚残らず綺麗に磨き上げられ、鏡のように外の景色を映し出している。

入口を通り抜け、エスカレーターで屋上へと上がる。屋上には、数十人の見物客が、期待を込めた眼差しで、目の前のただっ広い滑走路を見詰めている。双眼鏡を持参している者も見受けられる。

滑走路の真ん中を、どどかい円盤型の機体が占領していた。円盤の下部からは、時折もうもくと、蒸気のような白い煙が上がっている。洋子は【蒸汽帝国】を思い出す。

陰々としたサイレンが聞こえてくる。

「上がるぞ……！」

一人が呟いた。見物人は、どどと屋上の手摺に近寄り、一瞬たりとも見逃さぬよう目を皿のように凝らしている。

円盤の下半分から上がる煙が、さらに強まる。煙の向こうに、白く輝く光が覗く。

ゆらり　、と円盤は上昇を開始した。上昇していった円盤の滑走路面には、幾つもの奇妙な筒が上を見上げ、筒先は白く輝いている。筒先は明らかに円盤を追っている。上昇する円盤の角度に合わせ、筒先は一斉に上を見上げていく。

すごい！

初めて見る光景に、洋子は息を呑んでいた。

ぼん、と肩を叩かれ、振り向くと、一人の痩せた中年の男が立っていた。

皮肉たつぷりの笑みを浮かべ、白髪交じりの頭髪をした男は、白黒だんだらの、チェッカー柄のジャンパーを身につけている。

洋子は用心深く、声を掛ける。

「あんた、客家二郎……よね？」

男の笑みが開けっぴろげなものになった。

「そうさ。君はタバサだろ？」

洋子は頷く。しかし、すぐ首を振った。

「そう……、でも、あたしの本名は田端洋子というの。今はタバサじゃなく、洋子」

「そうか」と、男は肩を竦めた。

洋子は男の顔を観察する。年齢は見当がつきにくい、四十前後。疲れ切った顔つきであるが、目の奥に客家二郎の「何でもお見通しだぞ」と言いたげな、表情を認めていた。

迷い

洋子は空を見上げ、上昇していく円盤を見詰めて口を開く。

「あんたがここを指定したから来たけど、あれは何なの？」

「やれやれ」と二郎は呟いた。

ああ、確かに客家二郎である、と洋子は思った。口調がそっくりだ！

「レーザー・パルス推進の宇宙船だよ。ここは宇宙船の発射基地だ。今回、初めての実用試験があると聞きつけ、折角だから、ここを指定したんだ。どうだ、凄いだろう？」

「ふうん」と洋子は、気のない返事をする。

正直、さっぱり判らない。どこが凄い、というのか？

「つまりなあ」と二郎は説明口調になった。

「レーザー・パルス推進とは、レーザーの焦点を集中することで熱を生み、それを推進力に変える宇宙ロケットなんだ。地上にエンジンと、燃料を置いて、本体を上昇させるから、搭載量が格段に違う。次世代の宇宙ロケットなんだよ」

「そうなの」

ともかく、相槌を打つに限る。

洋子は、二郎と現実世界で顔を合わせることが希望した。二郎は最初は躊躇したが、結局、洋子が押し切った。

あれから、洋子は仮想現実に接続することを迷っていた。自分の

しでかしたことを考えると、どれくらい大騒ぎに巻き込まれ、仮想現実世界そのものを揺るがすことになったのである。怖れを感じて当然だった。迷いを断ち切るためには、二郎と直接、面と向かって会って、話をしたいと思ったのである。直に会って、二郎に尋ねたい疑問点があったのだ。

「ねえ、二郎……さん？」

「二郎で良いよ」

二郎は苦笑した。洋子は思い切って話し始めた。

「あたし、一つ聞きたかったことがあるの」
「何を？」

「あんたが、どうして【パンドラ】なんてものを開発しようとしたか、ってこと！」

二郎は黙り込み、ゆっくりと手摺に近づくと、上体を凭れかけさせた。空を見上げ、レーザー・パルス推進の宇宙ロケットを見上げる。

洋子も釣られて見上げる。

馬鹿な考え？

「あれのせいなんだ」

「あれ？ 宇宙ロケットが？」

「そう……。おれの子供のころ、宇宙開発は暗礁に乗り上げていた。知っているかい？ 二十世紀の後半、人類は月へ到着したんだ」

「知らない。本当のことなの？」

「本当のことさ！ 教科書にも載っている事実だ！」

二郎の口調に熱意がこもった。

「月に行けるのなら、火星にだって行けるはずだ。さらに遠くの惑星、もしかしたら、別の恒星系にだって行けるかもしれない。だけど、おれの子供のころには宇宙開発はほとんど行われなくなっていた。おれの父親は、誰もが宇宙へ行ける未来を夢見ていたと言っていた。しかし現実には、そうならなかった。とにかく、やたら費用が掛かりすぎるんだ。宇宙ロケットには。何しろ人間三人を月へ送り込むのに、五十階建てのビル一つまるまる燃料に費やすくらいだからな。おれは宇宙へ行ける未来を手に入れ損ねた。だから【パンドラ】を開発したんだ」

洋子は首を捻った。

「よく判らないわ」

「【パンドラ】を使えば、無限の？世界？を創造することができる。それは、他の宇宙への旅と同じ意味を持つんだ！ しかし、おれの作り上げたのは【ロスト・ワールド】だった」

二郎は空を見上げている。ロケットは、すで見えなくなっていた。

「畜生、もう少しあのロケット開発が速く進んでいたらなあ！ おれだって一生懸命に努力して、宇宙パイロットを目指していたかもしれないのに」

洋子はじつと二郎の横顔を見詰めた。

「あんた、今でも宇宙へ行きたいの？」

「当たり前さ！」

二郎は洋子に顔を向け、叫んでいた。洋子はふと思いついた考えを口にしていた。

「それじゃあ、宇宙そのものを仮想現実で作っちゃったらどうなの？」

がくり、と二郎の顎が垂れ下がる。両目がまん丸になり、心底、驚いた表情を作る。

タバサの顔に血が昇った。

「御免！ あたし、また馬鹿なこと……」

「いいや！」

二郎の顔に笑顔が戻った。

「いいや、そりゃ、馬鹿な考えじゃないかもしれないぞ！ 宇宙を丸ごと、仮想現実で作り上げる……。面白いかも……」

二郎は「けけけっ！」と奇妙な笑い声を上げていた。

初心者

【大中央駅】に、一人の新しい旅人がリンクして出現した。

いかにも初心者らしく、周りのプレイヤーにぶつからないよう、覚束ない足取りで辺りをきよろきよろと見回していた。身軽な皮の上下、灰色のシャツに、羽飾りのついた帽子を被っている。耳が尖がり、目は董色をした、エルフの装束だ。

「あんた、初心者ね！」

出し抜けに声を掛けられ、旅人は顔を真つ赤に染めた。見ると、一人の女性プレイヤーが、にこにここと笑みを浮かべ立っている。

丸まっつい身体つき。身長はせいぜい百五十五〇六？といったところか。肉付きのいい腕と太腿が、軽装の着衣から弾けそうに覗いている。女性プレイヤーは、腕を上げ、握手を求めてくる。旅人は、思わず手を握り返した。

が、二人の掌は、するりと空中ですり抜ける。

女性プレイヤーは、甲高い声で笑った。

「いつけなあい！　ここでは、物理衝突計算は、一切ないんだっけ！　握手なんか、できるわけ、ないのにね！」

朗らかな笑い声に、エルフの旅人は呆氣に取られる。

女性プレイヤーは、真面目な顔に戻り、口を開いた。

「あたし、仮想現実ではタバサって名前で通っているの！　あんたみたいな初心者の案内するのが、あたしたちの役目。どう、あたしたちの案内で仮想現実を冒険してみない？」

「あ、案内……ですか？」

ようやく旅人は、声を発することができるようになった。

「そうさ、おれたちが手ほどきすれば、すぐあんたもベテランだ」

どこから現れたのか、新手のプレイヤーが声を掛けてきた。こっちは顔の半分が真っ黒、もう半分は普通の顔色の、奇妙奇天烈な格好のプレイヤーである。

「おれは、影二郎。もとは客家二郎、シャドウという名前で通っていたが、今では影二郎という名前にしている。よろしくな」

立て続けに喋り捲られ、新来の旅人は圧倒されていた。影二郎と名乗ったプレイヤーのポケットから、金属の球体がぽん、と飛び出してくる。球体は宙に浮かぶと、きんきん声で話し掛けてきた。

「わたくし、影二郎さまの助手を勤めますティンカーと申します。よろしく！」

旅人はごくりと唾を飲み込む。

「あ、あのう、どうして僕を案内してくれるんですか？ 見返りは？」

タバサと影二郎は顔を見合わせる。タバサは「にっ」と笑うと、影二郎に話し掛けた。

「この人、馬鹿じゃなさそうね。ぼけっと、油断していないもの」「ああ。頭は回るな。いい、プレイヤーになりそうだ！」

タバサが旅人に顔を向け、話し掛ける。

「見返りは貰うわよ。ただし、あんたの同意の上でね！ 欲しいのは、あんたの？ハビタット？！」

「僕の……？ 僕の？ハビタット？を、どのくらい要求するつもりですか？」

影二郎が一步、前へ踏み出す。ぎらりと、両目が鋭く光った。

「全部だ！ あんたが仮想現実に接続するための全て、貰いたい！」

最終解決

新来の旅人は驚きのあまり、仰け反った。

「な、何でそんな途方もない規模を？」

益々、ぬーっと影二郎は顔を近づける。両目が怪しく、爛々と光っている。

「おれたちは宇宙を創造するんだ！ 丸ごと一つだ！ そのためには？ ハビタット？ は幾らでも必要だ。安心していい。あんたの？ ハビタット？ も、おれたちの宇宙の一部になるから、結局あんたは何も失うことはない。そうだろう？ 新しい宇宙では、全ての？ ハビタット？ は参加する全員が共有することになるんだから」

「宇宙、丸ごと？」

旅人の声は驚きのあまり、掠れていた。

二郎は頷く。

「そう。今のところ、規模はやつと太陽系を収めるくらいには成長したが、最終的には銀河系全体を狙っている！ 面白いぞ……おれたちの宇宙では、ワープ航法や、重力制御も当たり前にできる。百光年くらいの半径になったら、宇宙人を登場させようと思っている。SFの世界が、そのまんま再現されるんだ！」

二郎の言葉に、エルフの旅人はぼうつ、とした表情になっていた。宇宙を丸ごと！

まったく、何て夢なんだ……。

ふと旅人はタバサと名乗った女性プレイヤーの外見が気になった。むちむちとした肉付きのいい身体つき。スマートとは、お世辞にも言えない低い身長。仮想現実でプレイするなら、もっと格好いい分身を用意するのが普通じゃないのだろうか？

旅人の視線に気付いたのか、タバサはにっこりと笑みを浮かべ、話し掛けてきた。

「あたしのこの格好、変だと思っているんでしょ？」

「い、いいえ！　そ、そんな！」

慌てて否定するが、完全にお見通しである。

「まあね。あたしも、最初はこんな格好じゃなくて、女の子なら誰でも夢見るファッション・モデルみたいな分身にした。でも、あたしはあたしよ。外見はどうでもいい、って気付いたの。だから、実際の外見をそのまま分身にして、プレイしているのよ。案外、そのほうが、仮想現実ではもてるのよ！」

得意そうにタバサはウインクをする。

「へえ……」と、旅人は感心する。

もしかしたら、そうなのかもしれない。

それにしても、宇宙一つを仮想現実再現してしまうとは。本当にこの二人なら、実現するのもかも。

「そ、それじゃ、あと一つだけ！」

指を一本ひょいと立てる。タバサは首を傾げた。

「なあに？」

「どうして、僕が初心者だって判ったんです？」

最終解決（後書き）

これで『電腦ロスト・ワールド』は、お終いです。
お楽しみ頂けましたでしょうか？
感想、評価など、よろしく願いしますね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4824p/>

電腦ロスト・ワールド

2011年3月26日16時45分発行